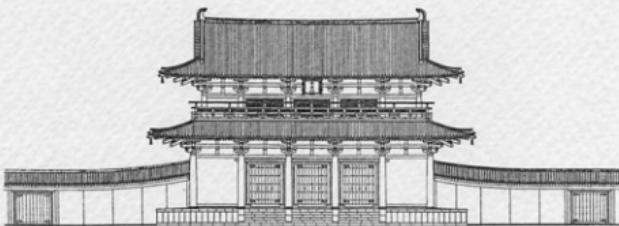


# 奈良国立文化財研究所年報

1995



奈良国立文化財研究所



コンピューターグラフィックスによって復原される第一次大極殿

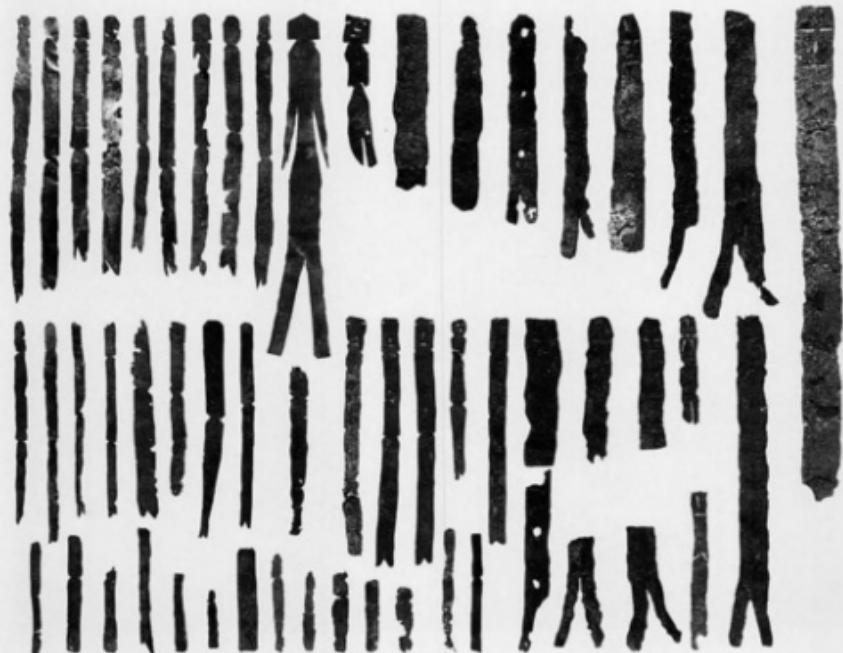
(提供：株式会社 プラス・ワン)

山田寺第9次調査全景（南から）撮影 井上直夫

水落道跡第7次調査検出石組（東南から）撮影 井上直夫



平城京左京七条一坊（東一坊大路西側溝）出土金属製人形



平城宮・京出土金属製人形



平城宮造酒司六角形井戸星形覆屋



朱雀門復原工事 一重の柱を立て、その頂部に須賀を組む

## 目 次

- 口絵 1 コンピューターグラフィックスによって復原される第一次大極殿  
2 (上) 山田寺第9次調査全景 (下) 水落遺跡第7次調査検出石組  
3 (上) 平城京左京七条一坊出土金属製人形 (下) 平城宮・京出土金属製人形  
4 (上) 平城宮造酒司六角形井戸屋形覆屋 (下) 朱雀門復原工事

### I 国際交流

北魏洛陽城永寧寺址の調査	2
在外研修	4
外国出張等一覧	6
外国研究者招聘・受入一覧	8
国際交流業報	9

### II 研究調査等

研究集会	12
長岡京発見の琴形	15
飛鳥寺軒瓦拾遺	16
法隆寺所蔵金属製容器の調査(2)	18
歌姫西瓦窓等出土の鏡描き瓦	20
動物遺存体の調査(II)	22
年輪年代学(II)	23
文化財用X線CTによって甦った銀象嵌鳳凰文様	24
石山寺法輪院の聖教目録	26
岡山市近世寺社建築調査(1)	30
発掘調査支援機械システムの試作研究	32
塔の森の石塔の写真測量および実測調査	36
平城宮東院中央建物の復原設計	37
第一次大極殿復原模型(1/10)の設計	40
1994年度平城宮跡・平城京跡出土木簡	42
「ロマントビア藤原宮'95」に伴う特別展示	44
飛鳥資料館の特別展示	45
平城宮第一次大極殿地区復原整備のための基礎調査	46
平城宮跡・藤原宮跡の整備	47
調査研究業報および公開講演会	50
III 発掘調査等	
飛鳥地域・藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査	52
平城宮跡・平城京跡の発掘調査	74
奈良国立文化財研究所要綱	93

### 英文目次

奈良国立文化財研究所年報 1995  
発行日 1996年3月15日  
編集・発行 奈良国立文化財研究所 担当 加藤元彦・巽淳一郎  
印刷 直陽社  
表紙カット 平城宮朱雀門復原図

## 北魏洛陽城永寧寺址の調査

当研究所では、中国社会科学院考古研究所と共同で日中都城の比較研究をすすめている。その一環として、同研究所洛陽漢城隊による北魏洛陽城内永寧寺址の発掘調査に、調査員3名（浅川滋男・玉田芳英・次山淳）を派遣した。期間は1994年10月20日から12月18日である。

永寧寺は、孝明帝熙平元年（516）に靈太后胡氏により建立された北魏洛陽最大の仏教寺院である。孝武帝永熙3年（534）、九層浮圖として威容を誇った木塔が焼失し、都城への遷都に伴い放棄された。

1963年のボーリング調査によって、東西215m、南北305mの築地に囲まれた範囲に、大殿・塔・南門を南北に配し、塔に正対して東西の門が開く伽藍配置であったことが判明し、1979年以降、塔・南門などの発掘調査が継続的におこなわれている。今回の調査では、塔基壇の西南・東南隅および西面、塔南方に小規模な調査区を設けるとともに、西門については全面調査をおこなった。

塔周辺の調査区では、過去の調査同様に、崩壊土のなかから塑像・鉄製仏具・風鐸片・石製螭首・瓦類・日干し煉瓦などが出土した。日干し煉瓦のなかには、表面が融解してガラス化しているものもあり、3ヶ月にわたり燃え続けたと伝えられる火災のすきまじきを目の当たりにすることとなった。

西門は、後世の擾乱が著しく不明な点も多いが、基壇掘り込み地業のプランは、東辺約30m、西辺約24m、東西18.4mの凸字形を呈し、西辺築地の外側に約1.5m張り出している（下図）。礎石は、原位置から離れたものが1点遺存していたのみであったが、根石代わりの青砂を敷いた掘付穴の位置関係から、南門と同様、桁行き7間、梁行き2間の3本の門道をもつ門であったものと推定される。桁行きの柱間は3.9m、梁行きの柱間は内側が6.8m、外側が5.5mとなる。

西辺築地は、深さ1.5mの掘り込み地業の上に、幅1.2-1.3mの版築で形成され、表面に白土を塗り、一部に赤彩の痕跡を残していた。遺物としては、鶴尾を含む瓦類、煉瓦などの建築材料が出土しており、基壇南辺からは、埋納された多量の小玉類がみつかっている。

今回の調査によって、永寧寺の建物構造に新たな知見を加えるとともに、著名な塑像群の内容がさらに豊かなものとなった。こうした成果に加えて、中国都城研究者との間で、調査技術、遺構・層位の認識等についての意見交換が日常的におこなわれたことは有意義なことであった。なお、本調査の概要については、「北魏洛陽永寧寺西門遺址発掘紀要」（『考古』1995年8期）に紹介されている。

（玉田芳英・次山 淳）

北魏洛阳城永宁寺址出土塑像·瓦当 摄影 井上直夫

## 在外研修

### —中国における高句麗・渤海遺跡の保護—

**高句麗遺跡** 吉林省集安は高句麗の古都である。特に、万を越す古墳からなる大規模な古墳群は見る者を驚かす。集安古墳の大部分を占める積石塚は、雨風などによる崩壊に加えて、長年期にわたる耕地の拡大や、古墳石材の建築資材への転用などによる人為的な破壊も進行しており、遺跡の保護は急務となっている。近年になされた集安古墳群にたいする大胆な復原、整備には、目をみはるものがあり、増加する観光客への対応策ともなっている。一方では、築造時の墳丘復原などにかんする貴重な資料が失われてはいないだろうかというような危惧も拭いきれない。

**渤海遺跡** 吉林省延辺地区では、中国語・朝鮮語併記による遺跡の表示、説明が目につく。この地域が朝鮮族自治州に属しているためである。高句麗・渤海とともに中國にとては少数民族史であり、特に渤海史は、中國では靺鞨族のたてた唐代の一地方政権とし、韓国・北朝鮮での自民族史としての扱いとは異なる。多民族国家の遺跡保護のあり方の複雑さをかいま見せている。

(千田剛道)

整備された集安高句麗古墳群  
(1994年)

渤海遺跡保護の看板 (吉林省  
和龍県龍頭山古墳群 1992年)

### —東アジア手工業生産遺跡遺物の研究—

日本の生産工房の理解のため中国の都城遺跡に開わる製陶・金属加工遺跡の存在形態と遺物の製作技術観察を主目的として、中華人民共和国の洛陽、西安、南京などにおいて調査を行った。期間は1994年5月26日から7月25日までである。

洛陽では中国社会科学院考古研究所洛陽工作站、西安では同研究所西安研究室保管の新石器時代から隋唐までの標式的発掘資料の観察を行うとともに、工房遺跡についての情報を求めた。漢魏洛陽城内では西北部の区画に集中し、銭貨・陶俑・鐵器・土器など製作物の種類によって独立的に経営され、漢長安城でも主要工房址は「市」の中でそれぞれに単一の製品を生産する体制にある。これが漢代の工房址の特徴と考えられた。しかし、漢長安城ではこうした単一種製作の工房遺跡の他に、宮城街区には陶俑を主体しながらも陶器製作、鐵器加工も行なう工房も存在する事が確認された。

一工房内で銅・鉄・漆・ガラスなど多様な素材を操る日本の古代工房と似た形態の遺跡の存在を確認し得たことは大きな成果であった。しかし、従来の調査と報告が中央政府直轄下の工房に偏っていたにすぎず、こうした経営規模の小さな「私工房」での多種製作も普遍的に存在したのであろう。漢長安城内の陶俑工房出土品の製作は、上半身・下半身それぞれを表裏の範によって製作したのち、上下を接合する方法でなされるが、範は上下とともに複数あり、上下の接合技法は更に多くの種類があり、宮城街区の工房の俑範・技法とも異なっている。俑の製作は唐代においても範による製作であり、俑の製作技術的観察は被葬者の階層性と明器の生産組織の関係に迫りうるであろう。また、唐長安城出土の埴輪調査を希望した。埴輪については調査例が少なく、多くの鉢型たる考古遺物の影に隠れて報告されることの少ない生産関係遺物であるが、日本の埴輪調査の視点と意図を提示して意見交換を行い得た点は大きな成果の一つであった。

南京では、南京大学物質文化研究所故熊海堂教授のもと、南京大学、南京博物院・楊州城などの陶磁器などの調査を行い、南京大学が発掘調査した隋~唐代の洪州窯に楊州城出土の円面鏡と同一系譜にある資料を確認し、楊州城の西南部の手工業工房址出土の埴輪には、形態的に大別2種、大きさでは細別5種、技法的には2種あることを確認した。埴輪は基本的には漢代以来変化のない砲弾型であるが多種に分かれたあり方は工房での製作物、ひいては工房の存在基盤とかかわるものと考えられた。また、楊州城の手工業工房では、漆、銅、鐵器、陶器の生産が行われているが、ガラスについては明確な資料が無く、工房で作られた製品が日用的製品で占められていることからすれば、特殊な階層を対象とする生産はまた別の場所で行われたのであろうとの印象をもった。

調査全般を通じて、中国国内の手工業遺跡・遺物の多様性が実感され、日本の手工業技術史研究に際しては、中国起源と目される技術が中国国内において如何なる位置を占めるのかの検討が必要であることを再確認した。古代日本は中国にとっては辺境の一つに過ぎず、形態的模倣は可能であっても技術の点では、直轄工房の第1級の技術との格差は充分考慮しなければなるまい。

期間中、中国の文物管理の厳しい原則の中にあって、任式楠所長をはじめとする中国社会科学院考古研究所の方々からは数多くの配慮を得た。それ無くしては、遺物観察が不可能であつただけに、まことにありがたいことであった。ここに厚く御礼を申し上げたい。また、南京大学教授故熊海堂先生には論文集校正中の公私多忙な中、案内と手工業技術交流史に関する討論の時間を与えて頂いた。この討論は手工業遺跡遺物の比較検討を通して東アジア古代社会における日本の位置を考えて行く上で貴重であつただけに、帰国後半年足らずで接した突然の訃報は慚愧に耐えないとあった。文末ながら熊先生のご冥福をお祈りするものである。

(西口壽生)

## 外国出張等一覧

氏名	期間	国名	目的
西村 康	6.4.18~6.4.26	アメリカ	遺跡探査研究成果の発表討議
猪熊 兼勝	6.4.26~6.5.14	チリ	イースター島アフ・トンガリキ遺跡の調査
沢田 正昭	6.4.27~6.5.17	チリ アメリカ	モアイ石像の保存修復に関する研究
西村 康	6.5.6~6.5.20	トルコ	国際考古学会出席及びトルコにおける古代遺跡の調査研究
西口 寿生	6.5.26~6.7.25	中華人民共和国	東アジアにおける手工業遺跡、遺物の研究
森本 晋	6.5.31~6.6.28	チリ ボリネシア	イースター島アフ・トンガリキ遺跡出土遺物の整理研究
沢田 正昭	6.6.17~6.6.29	ロシア	パシリク古墳文化に関する共同研究
小野 健吉	6.6.19~6.7.6	中華人民共和国	交河故城修復整備協議及び発掘調査
肥塚 隆保	6.6.22~6.7.6	ロシア	パシリク古墳文化に関する共同研究
松井 章	6.7.2~6.7.13	イギリス	南アジア文化財関係資料収集
沢田 正昭	6.7.5~6.7.9	中華人民共和国	銅馬車保存の研究
千田 刚道	6.7.5~6.10.4	中華人民共和国	高句麗文化の考古学的研究
村上 隆	6.7.11~6.7.19	アメリカ	スマソニアン研究機構との共同研究
町田 章	6.7.13~6.7.24	中華人民共和国	伝統的文化財保存技術の調査研究及び大明宮含元殿日中共同保存事業協力委員会調査団参加
天田 起雄 浅川 澄男	6.7.13~6.7.24 6.7.13~6.7.24	中華人民共和国	伝統的文化財保存技術の調査研究
西村 康	6.7.24~6.7.30	大韓民国	日韓における遺跡探査の研究討議
光谷 拓実	6.7.29~6.8.12	中華人民共和国	中国長白山の巨大噴火の年代と環境への影響に関する年輪年代学的研究
西村 康	6.7.31~6.8.10	アメリカ	遺跡探査に関するスマソニアン研究機構と共同研究
杉山 洋	6.8.9~6.8.19	カンボジア	アンコール文化遺産保護に関する共同研究予備調査
町田 章	6.9.11~6.9.15	中華人民共和国	国際共同研究に対する事前打合せ
松井 章	6.9.24~6.10.8	ドイツ イギリス	国際動物考古学会出席及び研究打合せ
杉山 洋	6.9.28~6.10.2	大韓民国	「梵鐘実測図集成 韓国梵鐘編」刊行の打合せ
沢田 正昭	6.10.1~6.10.9	中華人民共和国	敦煌研究院講習会講師出席
肥塚 隆保 村上 隆	6.10.3~6.10.13 6.10.3~6.10.13	ドイツ	ドイツにおける建造物の保存状態の現地調査及び打合せ
猪熊 兼勝	6.10.3~6.10.12	チリ	イースター島発掘調査委員会出席
牛川 喜幸 高瀬 要一 加藤 尤彦	6.10.12~6.10.26 6.10.12~6.10.26 6.10.12~6.10.26	中華人民共和国	伝統的文化財保存技術の調査研究

玉田 芳英 次山 淳	6.10.20~6.12.18 6.10.20~6.12.18	中華人民共和国	漢魏洛陽城永寧寺の発掘調査
橋本 義則	6.11.5~6.11.12	ヴェトナム	仏教及び関連遺跡の調査
小澤 穀	6.11.6~6.11.16	中華人民共和国	交河故城の保存修復の調査
岩永省三	6.11.14~6.11.17	大韓民国	国際青銅器シンポジウム出席
杉山 洋	6.11.14~6.11.18	タイ	タイにおけるクメール陶器の研究
浅川 滋男	6.11.27~6.12.7	中華人民共和国	北魏洛陽城永寧寺発掘調査の視察
猪熊 兼勝	6.12.5~6.12.9	大韓民国	百济初期古墳の研究
工楽 善通	6.12.7~6.12.13	中華人民共和国	草鞋山遺跡の現地調査
田中 琢 河原純之	6.12.8~6.12.14 6.12.8~6.12.20	中華人民共和国	日本都城と中国都城との出土文物による比較研究
町田 章 金子裕之 巽淳一郎 渡辺晃宏 橋本義則 佐川正敏 渡邊康史	6.12.8~6.12.20 6.12.8~6.12.20 6.12.8~6.12.20 6.12.8~6.12.20 6.12.8~6.12.20 6.12.6~6.12.20 6.12.8~6.12.20	中華人民共和国	伝統的文化財保存技術の調査研究
沢田 正昭	7.1.2~7.1.8	アメリカ	スマソニアン研究機構との共同研究に関する研究打合せ
浅川 滋男	7.1.9~7.1.17	タイ	国際会議「The Future of Asia's Past」出席
杉山 洋	7.1.9~7.2.12	タイ	クメール陶器の研究
猪熊 兼勝 森本 晋	7.1.19~7.2.2	ミャンマー連邦	ミャンマー初期仏教遺跡の基礎的調査
沢田 正昭	7.2.15~7.2.24	中華人民共和国	漢代壁画の保存科学的研究に関する共同研究
松沢亜生 佐川正敏	7.2.26~7.3.13 7.2.26~7.3.13	中華人民共和国 香港	中国前期旧石器時代の研究
萩原寿郁 西村 康 杉山 洋	7.2.26~7.3.6 7.2.26~7.3.9 7.2.26~7.3.11	カンボジア タイ	アンコール文化遺産保護共同研究
猪熊 兼勝	7.3.7~7.3.16	チリ	イースター島アフ・トンガリキ遺跡の修復
沢田 正昭	7.3.7~7.3.23	チリ	石造文化財（石像モアイ）の保存科学に関する共同研究
田中 琢 館野和己 白井 熟	7.3.11~7.3.20 7.3.11~7.3.25 7.3.11~7.3.25	ロシア	バシリク文化古墳群に関する調査研究
小林謙一 山崎信二 佃 幹雄	7.3.16~7.3.30 7.3.16~7.3.30 7.3.16~7.3.30	中華人民共和国	日本都城と中国都城との出土文物による比較研究
猪熊 兼勝	7.3.27~7.3.29	大韓民国	在韓国北アジア資料調査

## 外国研究者等招聘・受入一覧

国籍	氏名	所属・職	招聘期間
イギリス	Simon Holledge	ロンドン大学 教授	6.7.27~7.6.28
カンボジア	Ek Buntha	アンコールワット保存事務所 研究員	6.10.4~6.12.28
カンボジア	Kim Sothin	アンコールワット保存事務所 研究員	6.10.4~6.12.28
中華人民共和国	劉嘉麒	中国科学院 地質研究所	6.10.29~6.11.6
ロシア	Olga Vasilievna Dyakova	ロシア科学アカデミーベリア支部 歴史学、考古学、民族学研究所 研究員	6.10.11~6.10.15
ブータン	Gyem Tshering	国立博物館 上級助手	6.11.28~6.12.2
ラオス	Soulapomh Naovarath	情報文化省 博物館 考古学担当	6.11.28~6.12.2
マレーシア	Khamis Bin Hj.Abas	マラッカ文化博物館	6.11.28~6.12.2
マレーシア	Ismail Bin Haji Mansor	サバ博物館	6.11.28~6.12.2
タイ	Jarunee Incherdchai	国立博物館 教育・広報担当	6.11.28~6.12.2
モンゴル	Damdzinsuren Tsedmaa	文化省 博物館担当専門官	6.11.28~6.12.2
マダガスカル	Aldine Revaonatoandro	文化・情報省	6.11.28~6.12.2
ソロモン諸島	Edward Wale	国立博物館 学芸員	6.11.28~6.12.2
大韓民国	金琴坪	文化体育部 文化交流課 主事	6.12.26~7.3.20
中華人民共和国	徐光輝	吉林大学 考古学部 講師	7.1.7~7.3.10
ラオス	Soulapomh Naovarath	情報文化省 博物館・考古学担当	7.1.17~7.3.3
ソロモン諸島	Edward Wale	国立博物館 学芸員	7.1.17~7.3.3
アメリカ	Fransis-A Calabrese	米国中西部考古学センター所長	7.2.15~7.2.24
大韓民国	金惠仙	中央博物館 保存科学研究室 研究員	7.2.17~7.3.30
チリ	Monica Bahamondez	国立文化財保存修復センター 遺跡保存研究室長	7.2.23~7.3.30
チリ	Junia Seguel	国立文化財保存修復センター 考古遺物保存研究室長	7.2.23~7.3.30
ラオス	Vongmany Mounthisone	文化情報省 考古局 博物館保存課長	7.3.1~7.3.30
大韓民国	韓成熙	韩国文化財研究所保存科学研究室 研究員	7.3.6~7.3.15
中華人民共和国	劉慶柱	中国科学院 考古研究所 副所長	7.3.12~7.3.30
中華人民共和国	段鶴崎	中国科学院 考古研究所 副主任	7.3.12~7.3.30
中華人民共和国	孫秉根	中国科学院 考古研究所 研究員	7.3.12~7.3.30
中華人民共和国	蔣忠義	中国科学院 考古研究所 副研究館員	7.3.12~7.3.30
中華人民共和国	錢國祥	中国科学院 考古研究所 助理研究員	7.3.12~7.3.30
中華人民共和国	趙大昌	中国科学院 応用生態研究所 研究員	7.3.19~7.3.27
イギリス	Julie Dawson	フィツウイリアム美術館 保存科学研究室 研究員	7.3.20~7.3.28
イギリス	Celia Withycombe	フィツウイリアム美術館 保存科学研究室 研究員	7.3.20~7.3.28
イギリス	Martin Johnes	ケンブリッジ大学 教授	7.3.24~7.3.26
大韓民国	尹根一	国立文化財研究所 研究官	7.3.26~7.3.31
大韓民国	申大坤	国立中央博物館 学芸研究官	7.3.27~7.3.31
中華人民共和国	肖小勇	新疆文物考古研究所 研究員	7.3.29~7.4.23

## 国際交流彙報

**交河故城保存修復事業** 中国新疆ウイグル自治区所在の都市遺跡・交河故城の保存修復事業は、ユネスコの文化遺産保存日本信託基金により1992年から実施されている。当研究所は、文化庁記念物課などとともに事業開始時からこれに協力しており、1992-93年度には、現況概要調査及びそれに基づく保存修復方針の提言を行うとともに、遺跡内の西北小寺院の写真測量や新疆文物考古研究所員を招聘しての研修などを担当した。

1994年度は、小野が6月19日～7月6日に現地に赴き、西北小寺院実物大復元模型の建設位置と復元形状、遺跡内の歩行者用園路など具体的な保存修復事業案について、新疆文化厅・ユネスコとの協議をおこなった。その際、併せて基準点測量・水準測量等を新疆文物考古研究所員に指導した。また、11月6日～16日には小澤が現地に赴き、西北小寺院実物大復元模型の復元形状について詰めの協議を行うとともに、発掘調査で新たに検出した北部地下寺院実測のための基準点測量を実施した。

事業はその後、洪水対策工事・西北小寺院造構の基底部防護等工事・園路舗装工事・案内板設置工事などが完工し、西北小寺院実物大復元模型の建設も進捗している。なお、事業は当初3年計画であったが、期間を延伸して1995年度も継続することになっている。  
(小野健吉)

**イギリスにおけるアジア文化財関連資料の収集** 1994年7月2日から7月13日まで、英国のブリティッシュ・ミュージアム、ケンブリッジ大学、ヨーク大学、ヨーク考古学トラスト、カーディフ市の南ウェールズ国立博物館、バッソア古代実験農場などを訪問し、アジア関係の考古学文献の所在調査、博物館の展示、普及活動などについて視察し、それぞれの研究者と意見を交換した。  
(松井 翔)

**遺跡探査** 文化庁ースミソニアン研究機構との共同研究の一環として、1994年4月18日から9日間、アメリカ考古学会(SAA(Society for American Archaeology))に参加し、アメリカにおいて探査をした成果を研究発表した。また、1994年7月31日から8月10日までコロラド州キャトルガード遺跡において探査を実施した。

また、1994年5月6日から6月20日まで、トルコで開催された国際考古科学会(Archaeometry '94)に参加し、地中レーダー探査の研究成果について発表をおこなった。  
(西村 康)

**江南庭園調査** 日本芸術文化振興基金の助成による「伝統的文化財保存技術の調査研究」の一環として、1994年10月12日から10月26日まで中国を訪問した。参加者は鈴木嘉吉(前奈良国立文化財研究所所長)、牛川喜幸、高瀬要一、加藤允彦の4名である。今回の調査の主たる目的は、揚子江下流域に所在する明清時代の庭園遺跡を視察し、併せて南京の東南大学との交流を深めることであった。訪問したところは上海・蘇州・無錫・南京・揚州・鎮江・杭州・紹興・寧波の9市、視察箇所は60件余に上る。主目的である庭園遺跡では、蘇州の萬國、無錫の寄暢園、南京の瞻園、揚州の寄噓山荘、杭州の文蘭閣、紹興の蘭亭・沈園、寧波の天一閣などを視察し、中国における庭園遺跡とその修復の実情を知る上で多いに参考となった。併せて多くの古建築・伝統的建築様式による再開発地域・河姆渡遺址などの視察もおこなった。短期間にこれだけの庭園遺跡などを視察できたのも、東南大学建築研究所の協力のたまものである。記して感謝の意を表わしておきたい。

また、11月14日から11月27日までの間、基金による本事業の一環として南京市の東南大学建築研究所蔵康教授・郭潤生教授・張十慶副教授の3名を招聘し、建築造構などの合同視察をおこなったほか、「建築と庭園に関する中日比較」についての研究会を開催し、さらに、京都大学人文科学研究所での研究会に合流して意見交換をおこなうなど交流を深めた。  
(加藤允彦)

**国際考古動物学会** 1994年9月26日から30日まで、ドイツの南端、コンスタンツで開催された国際考古動物学会（International Council for Archaeozoology）に出席し、「日本中世の肉食伝統」についてポスターセッションで発表した。日本の発表は3本であったが、日本の成果がほとんど紹介されておらず、今後も日本の研究を紹介する必要を痛切に感じた。  
（松井 章）

**国際会議 “The Future of Asia's Past”** ニューヨークに本部をおくアジア協会（Asia Society）とカリフォルニアのゲッティ保存研究所（Getty Conservation Institute）、およびバンコクを拠点とするサイアム協会（Siam Society）の共催による国際会議 “The Future of Asia's Past-Preservation of the Architectural Heritage in Asia” が、1995年1月11日から4日間、タイのチェンマイで開催された。「アジアの過去と未来」と題されたこのシンポジウムは、副題のとおり、アジア各地の建築遺産の保存をテーマとするものである。議題の中心となるアジアの国々はもとより、欧米諸国からも多数の専門家があつまり、総勢300人をこえる大会議となった。セッションは、特別なテーマを設定した全体会議（Plenary Session）と、各国の代表的遺跡の実状を報告する分会（Site Management Session）に分けられ、ルアンプラバーン（ラオス）およびアンコール（カンボジア）とともに奈良が分会のトップをきいた。筆者は「奈良」の報告者の一人として、奈良における最新の動向を、指定建造物の修理、町並み保存と景観形成、埋蔵建築遺跡の「復原」事業の3点にわけて概説した。聴衆の反応はきわめて敏感であり、とくに日本の文化財保存のシステムに関心がもたれているような感触があった。英語での質疑応答には難渋したが、4日間の会議と2日間のポスト・ツアーに参加したこと、アジアの建築遺産が直面する諸問題への理解が深まり、予想以上の大きな成果が得られたと思っている。なお、この会議の内容については、「建築史学」24号（1995年）でも報告している。  
（浅川温男）

**山西古建築調査** 日本芸術文化振興基金助成による「伝統的文化財技術の調査研究」の一環として、1994年7月13日から24日まで中国を訪問した。参加者は岡田英男（奈良大学）、平井俊行（京都府教委）、天田起雄、浅川温男の4名である。今回の訪中の目的は、主として山西省の大同・応県・五台山に残る唐～金時代の仏教建築を視察することであった。まず大同では、雲崗石窟、上・下華嚴寺、普化寺を訪れた。下華嚴寺はすでに等級教藏殿（遼・1038年）の修理を終えていたが、上華嚴寺では大雄宝殿（金・1140年）、普化寺でも大雄宝殿（金）の修理がはじまっていた。大同から渾源県懸空寺（大規模な懸造り建築）を経由して、仏教の聖地五台山にはいった。五台山では初めに明・清代仏寺をいくつか見学し、翌日唐代建築として名高い南禪寺大殿（782年）と仏光寺大殿（857年）を訪れた。仏光寺には金代再建の文殊殿（1137年）もあり、多数の柱を省略した特殊な平面と構造に驚かされた。

その後、五台山から一度大同にもどり、日帰りで応県の仏宮寺釈迦塔（遼・1056年）と淨土寺大殿（金・1184年）を視察した。仏宮寺釈迦塔（いわゆる応県木塔）は、中国に残る唯一の木塔であると共に、世界で最も高大な木造建築物でもあり、見る者を圧倒する。岡田英男先生の言葉を拝借するならば、まさしく「法隆寺に勝るとも劣らない世界有数の木造建築」といって過言ではない。ところが、この巨大な木造の塔にも切迫した問題が生じている。三重以上の垂みやねじれ、あるいは自輪・肘木などの部材の破損が甚だしく、根本的な大修理が必要な時期になっているのである。すでに中国文物研究所は、修理のための基礎調査を終えているが、莫大な費用を要することもあり、修理そのものが具体化する動きはみられない。応県木塔の修理を実現するためには、日本をはじめとする先進諸国の国際協力が必要なことを改めて痛感させられた。なお、今回の山西古建築調査には、中国文物研究所の張之平女史が同行され、さまざまな便宜をはかっていただいた。この場をかりて深く感謝したい。また調査の成果としては、平井俊行氏の報告「中国山西省の古代建築の技法の調査に参加して」（『文建協通信』17号：p.3-16、1995年2月）がある。  
（浅川温男）

ロシア・パジリク古墳群出土遺物の保存科学共同研究 ロシア科学アカデミー・シベリア支部歴史学、考古学、民族学研究所（ノボシビルスク所在）と当研究所の間でパジリク古墳群出土遺物に関する保存科学共同研究をおこなった。パジリク古墳群に関しては継続的な発掘調査が進められており、スキタイ文化を知るうえでは重要な発見が相次いでおり、これらの出土遺物の科学的保存処理が計画されていて、日本-ロシア間での保存科学共同研究が進められている。

今回は、昨年度に引き続き出土有機質遺物の保存科学研究と凍結古墳から出土した水浸出土木棺（大型のくり貫き1本作りの木棺）の保存処理を現地でおこなった。この木棺は硬くて緻密な針葉樹（カラマツ材と推定）が利用されており、凍結状態もしくは低温状態で埋蔵していたこともあり、ほとんど腐朽しておらず含水率も150～200%前後と低く極めて保存状態は良好であった。しかし、材は年輪にそって層状の剥離が引き起こっており木棺全体では20～30枚に分離・分割していた。処理方法については、現地でPEG処理法（PEG濃度の設定）や凍結乾燥（予備凍結および乾燥時間の設定など）について実物試料による予備実験をおこない、検討をかねた。その結果、①このように保存状態の極めて良好な遺物でも自然乾燥では遺物は、若干の収縮・変形をおこす。②低濃度のPEGを含浸するだけで収縮・変形を防止できる。などを明らかにすることができた。実際の保存処理は、まず細菌類の繁殖を防止するためホウ酸・ホウ砂の混合溶液で処理した後、高分子PEG（PEG-4000）の低濃度溶液（最大で40%PEG水溶液）を含浸した。含浸終了後、遺物を取り上げ部材ごとに布にくるんで、現段階では徐々に自然乾燥を実施している。また、一部の部材については真空凍結乾燥を実施中である。今後、これらの部材がすべて乾燥した段階で、強度を要する部材については補強用材を用いて接合し、一部の欠損部分は合成高分子材料による充填を行い修復・復元を完成する予定である。また、繊維製品に関しては、布の劣化と染料の退色を防止するため、脱酸素・調湿剤をいれた密閉環境内での保管方法の実験を開始した。このような科学的な保存処理や保管が実施されるのは、パジリク古墳群の遺物ではじめての試みと思われ、今後このような科学的処理が進められ、さらに保存科学研究が両国間で進展してゆくことが期待される。

（沢田正昭、肥塚隆保）

## 研究集会

### —官営工房研究集会—

技術力が貧しい明治の初め、政府は国の費用で官営工場を建て、外国の進んだ技術をとり入れた。とは、小学校の歴史教科書の説明である。1200年前の奈良時代も、似た事情にあり、律令政府は官営工房によって、彼らが必要とした物資を生産した。この官営工房の運営事態、すなわち賃金の支払い方法、休日のあり方、工人の身分、工人の出自などは謎が多い。その一つ、賃金の支払い方法については二説がある。一は、福山敏男博士の研究になるもので、工人は身分によって支払いの形が違うのであり、官人身分の常勤工人は、禄という形で年二回給与を受け、臨時雇いの工人は出来高払いの賃金を受けたとする。この説は、小林行雄博士の『統古代の技術』を通して、考古学者に大きな影響をあたえた。二は、身分に関わりなく、出来高による賃金の支払いを受けたとするもの。お経を写す機関である写経所の研究者が等しく述べる。同じ時代の官営工房にあって、二通りの賃金支払い方法があったのかどうか。この点は、過去2回の研究会にあって最大の焦点である。

今回の、大平聰氏による「写経所帳簿からみた賃金支給システム」は、後者の写経所における賃金支払いシステムに、正面から挑んだ力作であった。写経所では、お経を写す紙の貼り離ぎから始まり、写経生による写経、その後の校正、仕上げの装丁にいたる工程がある。大平氏によると、その全体を通じ、事務官と作業従事者との間で、工人の仕事に対するチェックの体制があった。それは、仕事量に対する自己申告(手実)と製品との突き合わせという方法によっており、それによって写経生ら(工人)は各人の作業量に応じた賃金を受け取ったという。

身分に関わらず写経従事者は出来高払い、という結論自体は、これまでと同じだが、氏の研究の真価は、膨大な正倉院文書の分析を通して、文書に染みのように残るわずかな合点痕跡から作業者と監督との間でかわされた検収のあり様を具体的に、詳細に、描き出したことがある。

自己申告と製品との突き合わせによる検収の体制は、奈良時代後半の百萬塔工房のあり方とも関わる。これが、同時代の官営工房のすべてを通じたものか否か。また、この方法の起源は何か、など新たに検討すべき課題が多い。それは今後のこととして、この報告が官営工房の運営をめぐる論議に新たな視野を開いたことは、疑いがない。成果は近く刊行の予定。

(金子裕之)

### —貴族文化研究会—

メンバーとしては吉川真司(京大文学部)氏と橋本義則・山岸常人で、標記の研究会をもった。

近年、絵画史料が文字史料と並んで歴史研究の有力な素材として活用されている。絵画史料の描写内容は、同時代史料に依りつつ総体的に把握されねばならず、特定の研究に必要な場面のみを部分的に抽出して利用することは危険を伴う。また、絵画史料と文字史料を車の両輪として対等に使うために、絵画に描かれた古代中世の公家・武家・寺家の生活空面を、“モノ”に則して総合的に把握し、政治史・制度史・宗教史・文化史などの研究の基礎的かつ研究者共有の資料としておく必要がある。この研究はそのための基礎作業となるもので、具体的には当面、次の2点を行うこととした。

- ①絵巻物に描かれた総ての“モノ”的名称を特定する作業
- ②その作業のための関連史料及び遺品調査

①は、枕草子絵詞についてこれを完了し、次いで紫式部日記絵詞の作業を進めており、②は、国立歴史民俗博物館の復原展示の調査と内閣文庫・東京国立博物館所蔵史料の調査を行った。(山岸常人)

## —農耕の起源をめぐる国際研究集会—

1994年3月、奈良国立文化財研究所をホストとして、日本学術振興会の外国人研究者招聘プログラムにより、ケンブリッジ大学考古学科教授のマーチン・ジョーンズ博士が来日した。その機会に、博士の専門である植物考古学を中心にして、考古学、農学からみた農耕の起源と拡散をめぐる研究集会を開いた。発表は以下のようである。

「三内丸山遺跡における植物利用」(岡田康博：青森県教育委員会)

「三内丸山遺跡で検出されたイヌビエのプラントオパール」(藤原宏志：宮崎大学)

「遺跡出土種実からみた栽培植物の出現と伝播」(南木陸彦：流通科学大学)

「日本における西欧的植物施行の適応性」(細谷葵：ケンブリッジ大学)

「DNA分析からみた栽培種イネの系統」(佐藤洋一郎：静岡大学)

「日本における農耕社会の形成過程」(都出比呂志：大阪大学)

「DNA分析から見た西ヨーロッパにおけるコムギ栽培の伝播について」

(マーチン・ジョーンズ：ケンブリッジ大学)

青森から九州まで文化財関係者、約100名の参加があり、多方面の発表があり、質疑応答も活発で、5時以降は、研修棟に場所をかえて深夜まで熱心な討議が続いた。研究会は、前半を遺跡での事例報告、後半を理論的なモデルを中心に計画した。ともに考古学と農学の両方からの発表を対比できるように意図したものである。特に印象に残ったのは、チャイルド以来の伝統的考古学からみた農耕の起源と拡散のモデルが植物考古学のさまざまな植物学的分析の発達でどのように修正されてきたかを対比することができたことである。

(松井 章)

## —保存科学研究集会—

埋蔵文化財センター主催による保存科学研究集会が1995年2月10日、平城宮跡資料館講堂で開かれた。今回の研究集会では、出土遺物全般にわたる保存科学における現状と問題点について講演と討議をおこない、保存科学研究および保存処理技術の向上を目的とした。

講演は、まず沢田正昭による「博物館・美術館における保存科学の位置付け」と題する基調講演に続き、特別講演として鶴巻道二（大阪市立大学名誉教授）先生により「平城宮跡の地下水の水質調査」と題する講演がおこなわれた。先生は約20数年間にわたりて、平城宮跡周辺の地下水を継続的に測定・観察してこられた。これらのデータにもとづき、埋蔵遺物の保存状態と環境条件について、特に木質遺物と石質遺物について考察をすすめられ、地下水位以下に埋蔵する木質遺物は有機物を還元剤とする化学変化が進行すると遺物の保存状態が悪くなることを指摘し、水質の監視が重要であることを述べられた。その後、有機質遺物、無機質遺物に関する保存科学的研究成果が9名の演者により発表された。

有機質遺物に関しては、「美々8遺跡出土木製品の保存処理」「出土木材の劣化状況の分析と保存処理」「古墳時代漆製品の材質構造調査」「出土漆器の塗膜構造の変遷と保存処理について」「PEG含浸槽内のPEG水溶液の劣化」について、無機質遺物に関しては「大分県の石像文化財」「さび再考」「高温高圧脱酸素水による金属遺物の脱塩処理」「出土品にみる古代金属材料の多様性」についてそれぞれ発表があった。

講演終了後に総合討議がおこなわれ、各々のテーマについて活発な討議がなされた。なかでも金属の保存処理に興味が集まつた。なお、今回の研究集会には保存科学担当者をはじめ発掘調査担当者など約80名の参加を得た。

(沢田正昭、肥塚隆保、村上 隆)

### —大藤原京研究集会—

「藤原京は、わが国最初の条坊制を伴う都城か？」の真偽をめぐり、藤原京より先行する2つの都宮跡の最新の発掘調査の成果を学びながら、わが国都城の特質についても検討するため、次のように計4回の研究会を計画した。なお、会場には飛鳥藤原宮跡発掘調査部会議室をあて、午後5時過ぎから2時間程度、開催した。

1月26日「大津京・新益京・難波京について」	国立歴史民俗博物館	阿部義平
2月9日「藤原京の範囲について」	奈良国立文化財研究所	黒崎直
2月23日「前期難波宮と京」	財大阪市文化財協会	積山洋
3月9日「大津宮と京」	財滋賀県文化財保護協会	清水ひかる

研究会には、藤原京跡の発掘調査に関わる奈良県立橿原考古学研究所員、橿原市教育委員会職員、明日香村教育委員会職員および奈良国立文化財研究所員など毎回約30名の参加があり、以下のような成果があった。

前期難波宮跡、大津宮跡ともに、その周辺に直線道路遺構や地割遺構の存在は確認できるものの、それらが基盤目状に配置された痕跡を示す資料はない。条坊制を伴う最初の都宮が藤原京であることは、現状ではほぼ間違いないものと思われる。藤原京の条坊が施行された範囲が、岸説よりも広がっていることは誰にも否定できない事実であるが、その範囲が時代により拡大し、あるいは縮小した可能性についての検討をした。

また、わが国の都城の立地などを考える場合、地形を利用した防御線、すなわち山城の自然の羅城などという側面からも検討を加えるべきだ、との指摘があった。  
(黒崎直)

### —全国不動産文化財情報ネットワークのプロトコル—

全国不動産文化財情報システムの整備が着々と進行する中で、充実したデータベースを造り上げてゆくことが最大のシステム運営上の問題点であることは言をまたない。不動産文化財の中でも、遺跡に関する情報は、日常的に増加しているし、行政的にも日々対処してゆく必要がある。したがってそのデータを電子化し、コンピュータで処理することは、誰でもが思いつくことであり、事実、各地方自治体、各地の埋蔵文化財センター等で既に着手しているところも少なくない。その際、自機関で作ったシステムと他の機関のシステムとの互換性がどれ、自由にデータのやりとりができる事が望ましい。さらに、インターネットなどの国際的なネットワークにも加入してデータを共有できるといったことにも関心が及んでくる。その際、どういった形でデータを形成すればいいのか。ファイルの型式はどうするのか。データ入力のソフトウェアはどういうものを使えばいいのか。通信手順は、といったプロトコル上の疑問点について話し合う集会である。近畿圏内にいち早くデータベースに着手している機関に、関東地方で着々とコンピュータ利用を進めている千葉県、静岡県のメンバーを加えての集会であった。

全国不動産データベースの中には供用できるデータと、当面供用には適さないデータ、あるいは将来とも供用にはなじまないデータがあり、それらをどう区別してファイルするのか、あるいは、データをどうネットワークに載せるのか、その際のトラフィックレスポンスは、等々話題は発展した。にわかに結論の出にくい問題もあったが、すくなくとも奈良国立文化財研究所が提唱しているデータ項目に関してデータシートを作り、フロッピーなどの媒体で、センターシステムに渡す。あるいは対応可能な機関はネットワークを介してセンターシステムにデータを送るなどの点で意見の一一致を見た。

(伊東太作)

## 長岡京発見の琴形

埋蔵文化財センター

**倭琴の模造品** 琴の歴史は古い。今日、琴は桐の胴に13本の弦を張った弦楽器を指すが、これは箏と呼ぶ中国の楽器であり、あわせて琴とするのは江戸時代からのこと。奈良時代の琴は6弦であり、7弦の唐琴、12弦の新羅琴と区別するために「倭（和）琴」とよぶ。倭琴の遺品は正倉院宝物に10面ほどがあり、古代琴を研究する上に貴重である。1994年の平城京第252次調査で、左京七条一坊の東一坊大路西側溝から琴形が見つかり、これを機に過去の調査例を見直し、長岡京跡に琴形があることを見いだした。これは報告書で小刀の鞘とされた遺品である。

発見位置は、長岡京左京二条二坊八・九町の東二坊々間小路と交差する東西溝SD1301。太政官厨家木簡が見つかったことで有名な溝である。発掘の日付けは1980年7月5日。

本例はヒノキの一本から表板と側板を削り出す。表板の表面は甲高に作り、ややていねいに調整するが、裏面は調整が雑で削り痕が粗い。琴頭近くに弦孔を6カ所あける。長さ28.6cm、幅3.4cm、高さ1.1cm。年代は伴った木簡から、790（延暦9）年の秋頃である。

古墳時代の琴には板作り琴と、共鳴装置（槽）がある槽作り琴があり、槽作り琴は一本から側板と底板を削り出し（槽の横断面形は口形）、大きめの表板を載せる。他方、倭琴は唐（中国）琴などの影響を受けて、表板と側板を一体で作り底板をはめる（槽の横断面形は円形）。

本例は6弦であること、槽の横断面形が円形を呈することで倭琴の特徴を備える。ただし、底板やこれを留めた痕跡がなく、底板は最初から略したのであろうか。

**たまふりの琴** 琴（箏）の音を聞くことは正月行事と化したが、彈琴は時代によって意味に違いがあり、もとはたまふり（魂振り）や神の言葉を聞く託宣の手段だった。櫻の季節には花見が盛んである。花の強い靈力を見ることで体に入れ、たまふりすることが花見の本来の意味である。聞く喜び、聞く楽しみもやはり同様の行為であった。たまふりは、肉体から遊離した魂を呼び戻して体内に鎮め、衰えた魂を搖り動かして靈力を復活させる呪術で、たましめ、魂結びともいう。これに関わる重要行事に鎮魂祭がある。令制下の宮中では毎年11月、新嘗祭の前に天皇などの健康と長寿を祈ってこれを行った。ここでは、伏せた槽の表を琴の音に合わせて矛で突き響かせ、同時に御衣を納めた箱を振り動かしてたまふりをした。琴のさやかな音がたまふり作用を持つだけではなく、それに合わせた所作によっても、効果を上げたのである。

たまふりのもともとの意味からみて、鎮魂は宮中だけの儀式ではありえない。本琴形はまつり用の模造品であること、790年頃という時代からみて、長岡宮に

出仕した貴族・官人層が鎮魂に用いたのではないか。本例に矛形風の木製品が伴うこととも、その傍証になろう。

**保存の方法** 本例の保存処理は、1989年に開発した高級アルコール含浸法によった。これは、木製造物をメチルアルコールで脱水後、高級アルコール・メチルアルコール溶液(60~70%)を含浸させるもの。歪やヒビ割れなどが多く優れた方法である。本例も仕上がりの状態は、良好である。

(金子裕之、肥塚隆保)



長岡京と平城京の琴形（←長岡京→平城京）

## 飛鳥寺軒瓦拾遺

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

蘇我馬子が昭明2年(587)に発願し、崇峻元年(588)に造営の始まった飛鳥寺は、日本初の七堂伽藍を備えた寺である。この飛鳥寺の軒瓦といえば、創建の素弁蓮華紋軒丸瓦が注目されることが多いが、7世紀後半から8世紀には複弁八弁蓮華紋軒丸瓦と均整唐草紋軒平瓦とを採用する。『飛鳥寺発掘調査報告』(奈文研学報第5冊、1958年。以下『報告』)でXIV-XV・XVI型式とした軒丸瓦とIV型式とした軒平瓦である。これらの軒瓦は、蘇我本宗家滅亡後の飛鳥寺が官寺に準ぜられ、後に平城元興寺に移建されていく過程を物語る。最近、これらの軒瓦の分類について、若干の補訂を行う必要が判明したので報告する。飛鳥寺の軒瓦については、『報告』後、『飛鳥・藤原宮発掘調査概報23』(1993年)で型式を追加した。本稿もこれまでの型式番号を基本的に踏襲する。なお、4桁の型式番号は『平城宮出土軒瓦型式一覧』(1978年)に示した番号である。

**複弁八弁蓮華紋軒丸瓦 XIV型式**(図1、『報告』PL.67-22~25)は、素紋の斜線をもつ。弁はやや扁平。中房は大きいが低く、 $1+4+8$ の蓮子をおく。瓦筋の傷と割れの進み具合を4段階に区分できる。丸瓦の接合は、当初は丸瓦の端面にV字形の切り込みを入れ、凹凸面には斜格子の刻み目、端面には刺突を施すが、後に端面の切り込みを入れなくなり、刻みを施すにとどまるようになる。『報告』ではこの軒丸瓦を「南都元興寺創建の瓦當と同一型式」としたが別範である。

XV型式は『報告』に明示されなかったので、以後、平城元興寺の創建軒丸瓦6201Aをあてる。弁が幅広く、XIV型式よりさらに扁平である。中房は低く、蓮子は $1+8+8$ 。外縁は当初、傾斜の緩い素紋線(XV型式a・6201Aa、図2)だが、外縁を高くし線彫齒紋を彫り加える(XV型式b・6201Ab、図3)。平城元興寺出土のXV型式aは、外縁を高くつまみ出すものが多い。丸瓦先端の凹凸面に粗い斜格子刻み、端面には櫛の刻み目を入れて瓦当と接合する。

XVI型式(図4、『報告』PL.67-21)は、XV型式bに似るが、弁の割り付けが不正確で弁央の筋や間弁がない箇所、弁同士が連接する箇所があり、別範である。外縁は斜線で線彫齒紋をおく。中房蓮子は $1+8+8$ 。積み上げ式の成形台一本作り技法で製作された軒丸瓦である。

**均整唐草紋軒平瓦** 軒平瓦IV型式は大官大寺式の三回反転均整唐草紋軒平瓦。『報告』にはIV型式として、大官大寺所用6661Bを記載する(PL.68-27)が、平城元興寺創建軒平瓦6661Dも存在する。ここでは二つをIV型式B・IV型式Dとよびわける。DはBに似るが、唐草紋の屈曲が弱い。Dには彫り直しがあり、これをDa(図5)・Dbに細分する。DbはDaの唐草紋をよく彫り直したものである。IV型式Bは大半が粘土紐桶巻き作りだが、粘土板桶巻き作りの製品も1点ある。IV型式Daは粘土板桶巻き作りである。

**出土点数** 1956・1957年調査で出土した上記4型式の軒瓦の点数は、軒丸瓦XIV型式194点・XV型式b 14点・XVI型式3点、軒平瓦IV型式22点(B20点・Da2点)である。それ以降の調査でも、軒丸瓦XIV型式は332点と多量に出土するが、軒丸瓦XV型式は6点(a1点、b5点)、軒平瓦IV型式は10点(B8点、Da2点)出土したにすぎず、XVI型式は出土が確認されない。

**まとめ** 既に指摘されているように、平城元興寺創建軒瓦は軒丸瓦XV型式aと軒平瓦IV型式Daである(中井1988)。大官大寺と法灯のつながらない平城元興寺に大官大寺式軒平瓦が採用された背景はどこにあるのだろうか。この組み合わせは、飛鳥寺での軒丸瓦XIV型式と軒平瓦IV型式Bを踏襲したとみてよい。だが、出土点数に明らかなように飛鳥寺では両者は量的につり合わない。

軒丸瓦XIV型式は範型の摩耗と範割れの進行状況を観察でき、丸瓦の接合技法にも変化があるので、かなり長期間の製作を想定しうる。さて、軒丸瓦XIV型式が粘土板巻き付け作りの丸瓦部をもつに対し、軒平瓦IV型式Bの大半は粘土紐巻き作りである。製作技法からも、また胎土・焼成からみても両者はセットでは製作されていない。創建以来の伝統から、軒丸瓦XIV型式は初め組み合う軒平瓦をもたなかつたが、後に大官大寺から軒平瓦IV型式Bを持ち込み組み合わせた、と考えるのが妥当だろう。その時期は、軒平瓦IV型式Bが大官大寺の塔・中門・回廊の所用軒瓦であることから、8世紀初頭前後を遡らない。軒丸瓦XIV型式が軒平瓦IV型式Bと組み合うのは、その製作期間の終わりに近い頃で、製作の始まりは7世紀後半、川原寺から軒丸瓦III型式（川原寺601A）が供給されたのに続く時期あたりであろう。とすれば、軒丸瓦XIV型式は天武朝の飛鳥寺修理を示す軒瓦といえる。官治の寺を制限するなか、その由緒にちなみ飛鳥寺が官寺の例に入れられたのは天武9年（680）である。

軒丸瓦XV型式aと軒平瓦IV型式Daの創出を平城元興寺の創建時とすれば、飛鳥寺から出土するこの組み合わせ、および軒丸瓦XIV型式bは平城元興寺から搬入された修理瓦と理解できる。また、軒丸瓦XVI型式は、軒丸瓦XV型式bを模倣して作られた瓦であろうが、現在までに平城元興寺で出土しない。これを単純に奈良時代における飛鳥寺独自の補足瓦と推測できるか、といえば、飛鳥地域での成形台一本作り軒丸瓦が、わずかに1種類（平城薬師寺から川原寺や山田寺に供給された6143A）である点に問題がある。軒丸瓦XVI型式も平城元興寺からの供給を推測するのが無難であろう。

以上のように、今回取り上げた軒瓦は天武朝から奈良時代にかけての飛鳥寺の歴史を物語るに欠くことのできない瓦である。藤原京外にあった官大寺のうち飛鳥寺が平城京に移され、川原寺に同じ措置がとられなかった理由は、案外これらの軒瓦の顔色に滲んでいるようにも思える。（花谷 浩）

参考文献 中井公 1988年『平城元興寺創建期の軒瓦について』（『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV、pp.435～443）

## 法隆寺所蔵金属製容器の調査(2)

平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

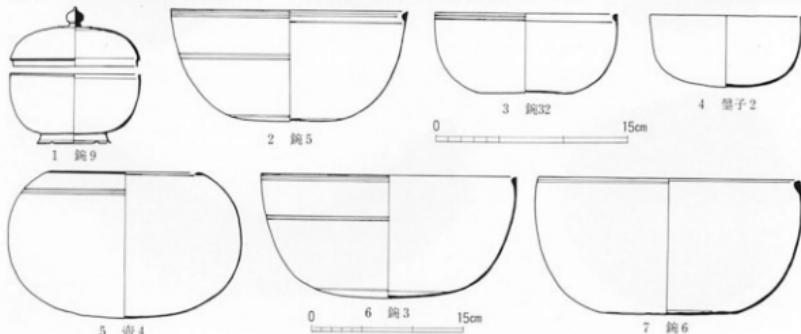
平城宮跡発掘調査部考古第一・二調査室と埋蔵文化財センター遺物処理研究室では、1992年度から法隆寺所蔵の青銅製容器について、考古学的観察と科学的分析の両面から調査を行っている。1993年度には25点、1994年度には36点を調査し、法隆寺における青銅製容器の古代から近世にわたる変遷をはは明らかにすることができた。ここでは前回に引き続き、主に鏡・皿類について報告する。

### 1. 考古学的調査

古代の青銅製容器は、いずれもロクロで厚さ1mm前後に削り、薄手に仕上げるのが特徴である。丸・平底鏡は口縁部内端が肥厚し、体・底部の内・外面に多数の沈線がめぐるもの(2・6)と、口縁外縁に1条の沈線がめぐるもの(3)がある。前者は古墳出土品に類例があり、6世紀末～7世紀前半、後者は法隆寺献納宝物(東京国立博物館蔵)の八重鏡と同類であり、8世紀に入ろう。口縁部がほとんど肥厚しない無文の丸底鏡(4)は、正倉院宝物(加賀第14号)に類似し、8世紀中頃になろう。高台付鏡は大きくみると、鏡身に返りのある半球形の蓋が伴うA類と半球形の鏡身に返りのある笠形の蓋が伴うB類が6世紀末～8世紀前半頃であり、8世紀前半以降は口縁部で外反する鏡身に返りのない外被せ蓋が伴うC類に主流が移る。A類の小型品(1)は前回報告した7世紀後半の鏡4より鏡身・高台とも底く、高台に4カ所切欠きを入れて花弁形につくる点も新要素である。8世紀前半頃に比定できよう。鉄鉢型(5)は丸底で、口縁部内端が肥厚する点などが6世紀前半の百濟・武寧王陵出土品に酷似する。8世紀中頃の東大寺例では底が尖り気味となり、口縁部の肥厚や沈線文もなくなる。皿2-1と2-2(14・15)は正倉院宝物と類似し、8世紀中頃に比定できよう。

中世の青銅製容器はいずれも厚さ3mm前後と古代に比べて厚手とみる。密教系の容器が主である。前回の報告では六器について、平安時代後期～鎌倉時代前期には鏡の体部が外反気味で、托の高台が高いこと、鎌倉時代中・後期には鏡の体部が直立し、托の高台が高くなること(11)、室町時代には托の高台がさらに高くなること(12)を指摘した。今回報告する鏡10・13・14(8～10)は比較的薄手であり、8が平安時代後半頃、9・10が鎌倉時代前期頃と推測する。六器20(13)は天保15年(1844)銘鏡に伴う「○」「◎」の刻印がある。托の高台は一段と高くなる。大型の鏡6(7)は古い要素を残すが、やや厚手であり、平安時代後期か中世初頭頃の擬古作の可能性がある。高台付皿(16・17)は材質の分析から中世に比定。高台の高い皿5(18)は室町時代であろう。

(毛利光俊彦)



第1図 古代の青銅製容器 (1～4は1:4 5～7は1:5)

## 2. 科学的調査

昨年度に引き続き法隆寺所蔵の青銅製容器に対する構造と材質の科学的調査を行った。構造調査はX線ラジオグラフィー、材質調査は非破壊的手法による蛍光X線分析法による。今年度の調査対象はこれまで系統的な調査が行われていない中世から江戸時代のものが多く、古代のものと合わせて金工材料の歴史的変遷を考える上で貴重なデータを蓄積することができた。青銅の基本は、銅と錫の合金である。この基本を忠実に守っているのが古代（6～7世紀）の「佐波理」であることは昨年報告した。20%前後の錫を含んだ銅合金で他の不純物も少ない（壺4、鉢3・5・32）。仕上げは極めて薄い。形態的な変遷との相関で見ていくと、時代が少し下がり8世紀に入ると、錫の量が減る一方、鉛の量が増加していく（盤子2）。さらに中世に入ると、鉛の量が10%を越えることもあり、代わりに錫が数%まで少なくなる（鉢14、皿9）。それに伴い器形も厚くシャープさを欠くようになる。平安時代のものとみられる器物に対しては、まだはっきりとした特徴を掴み切れていない。江戸時代の特徴として挙げられるのが、銅一亜鉛合金である黄銅（おうどう）の登場である（六器20）。これまでにも、黄銅の出現はかなり遅れるとみられてきたが今回の一連の調査においても例外ではなかった。ただし、黄銅は正倉院宝物でも確認されており、人為的に製作された黄銅の始源の問題は今後の大きな課題である。また、鉢9のように、器形の変遷と材質、特に銅、錫鉛の含有量の変化との相関だけではなくてみても合わないものもあり、他の元素を考慮に入れた再検討も必要と考えている。金工技法の中で特に接合の問題に関する情報を引き出せる器物も数点ある。今までのところ古代において使われたことを確認できている銀鍔（銀一銅合金）を認めるに至らず、例えば盤子5底部に残る接合の痕跡から錫が優位に検出された。この点についても今後の検討課題の一つである。わが国における金工品の古代から近世に至るこれだけ多くのまとまった資料を同じ手法で分析した例は初めてであり、この成果の詳細を改めて発表する機会を持ちたい。

（村上 隆）

法隆寺所蔵青銅製容器の非破壊手法による蛍光X線分析の結果

(wt%)

	銅	錫	鉛	銀	亜鉛	ヒ素	ビスマス	金	マンガン	アンチモン	水銀
壺4	74	24	0.4	4.4							
鉢9(蓋)	76	10	13		0.2		0.5				
(本体)	80	15	4.6		0.2				0.4		
鉢5	77	22	0.2	0.5	0.5						
鉢3	78	22		0.2	0.1						
鉢32	80	19	0.1	0.4	0.8						
鉢6	82	14	3.5	1.0	0.1						
盤子2	77	18		3.3	0.2	0.8		0.5	0.1		
鉢13	81	8.8	8.9	0.4	0.2	0.2	0.8				
皿2-1	81	18			0.8		0.4	0.1			
鉢14	75	6.2	11	3.0	0.2	0.3	4.1				
鉢10	83	10	56	0.3	0.4		0.7				
皿9-1	80	2.6	15	0.7	0.1		2.8				
六器13	91	5.6	2.0	0.5	0.1						
六器9	87	5.6	3.2	0.6	0.2		1.1		1.6	0.3	
皿3	84	3.9	9.4	0.3	0.3		1.7				0.5
六器20	66	0.5	15	0.6		31					
皿5	79	2.6	15	0.7	0.1	0.5	1.9			0.5	
六器5	75	8.3	15	0.8	0.2		0.6				



第2図 古代～近世の青銅製容器 (1:4)

## 歌姫西瓦窯等出土の箋書き瓦

平城宮跡発掘調査部

歌姫西瓦窯・音如ヶ谷瓦窯・平城京左京三条二坊六坪（宮跡庭園）から出土した箋書き瓦の記載について、再検討した結果を報告する。歌姫西瓦窯・音如ヶ谷瓦窯から箋書き瓦が出土したことは、既に報告があり（奈良県教育委員会・京都府教育委員会「奈良山 平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報」1973, pp. 8・9、「同-III」1979, pp. 25・26）、その後平城京左京三条二坊六坪（宮跡庭園）で出土した同様の箋書き瓦と比較検討を行った結果（奈文研「平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告」1986。以下、「宮跡庭園報告」と略称。pp. 60・61）。宮跡庭園の箋書き瓦が歌姫西瓦窯から供給されたことが明らかになっている。今回これら3カ所の遺跡から出土した箋書き瓦の記載を再検討し、これらの箋書きが同種のものであることを、記載内容・字画や字体・筆順・記載位置などの特徴の一一致から確認した。

初めに、箋書きの種類と点数を遺跡ごとに整理すると、表のようになる（数字は既報告のものと若干変動がある）。歌姫西瓦窯が720～730年代の操業であるのに対し、音如ヶ谷瓦窯の成立は745年の平城遷都以降に下り、両瓦窯の操業時期は連続しない。しかし、両瓦窯は谷を隔てて100mの至近距離に接する関係の深い遺跡で、音如ヶ谷瓦窯出土の軒瓦のうち歌姫西瓦窯と共通するものは、歌姫西瓦窯産であることが判明している（『奈良山-III』p. 32）から、今回紹介する音如ヶ谷瓦窯出土の箋書き瓦も、筆跡の共通するものは歌姫西瓦窯産の可能性が考えられる。従って、表に示した両瓦窯の箋書きの種類の比率の違いにいかなる意味を読みとるかは、瓦そのものの分析をまって改めて検討する必要がある。

次に、箋書きの種類ごとにその概略を述べる。箋書きは特記した以外全て平瓦凹面に施されている。大 広端を上にして左端（広端寄り、中央、狭端寄りの各事例がほぼ均等にある）に書かれる。字画は細いものが多い。筆順は横画、左払い、右払いの順。字体の崩れたものが多く、第一画を極端に右上がりにするものや、第三画を第一画と第二画の交点から離すものが多い。大きさは2cm程度から5cm程度まで大小がある。なお、歌姫西瓦窯出土のものに、丸瓦凹面の例がある。

夫 広端を上にして左端の狭端寄りに書かれる。字画は細いものと、後述の歌姫西瓦窯の「夫」に通じる太いものとがある。筆順は漢字の「夫」と同じで、横二画、左払い、右払いの順。第一・二画を狭い間隔で直横に平行に書く。漢字ではなく「夫」の横画を一画省いた記号か。

夷 記載位置は「大」と同じ。字画は細い。筆順は横三画、左払い、右払いの順。第一画から第三画までを狭い間隔で平行に書く。宮跡庭園出土の1点は平瓦凸面に書かれており、字画が太く横画相互の間隔が広くかつ短いなど、やや異質である。なお、「夷」は平城宮・京出土の墨書き土器にも類例が2点ある（平城宮SD2700出土の1点—奈文研「平城宮出土墨書き土器集成」1983, 第156号。平城京右京八条一坊のSD920出土の1点—玉田芳英「漆付着土器の研究」奈文研「文化財論叢II」1995, pp. 341～343）。「夷」は「夷」の異体字であり（佐伯有清「刻字土器「夷」の意義」北海道大学埋蔵文化財調査室「サクシユコトニ川遺跡」1986）、また東北・北海道地方の七カ所の遺跡から「夷」の刻書のある土器や瓦が出土してい

	大	夫	夷	泰	キ	X	七	+	不明	計
歌姫西瓦窯	40 33.1%	11 9.1%	3(1) 3.3%	1 0.8%	7(1) 6.6%	2 1.7%	17(13) 24.8%	7(1) 6.6%	17 14.0%	121
音如ヶ谷瓦窯	7 18.9%	2 5.4%	(2) 5.4%				13(6) 51.4%	4 10.8%	3 8.1%	37
宮跡庭園	1 5.0%		1 5.0%		10(4) 70.0%		(1) 5.0%	(3) 15.0%		20

箋書き瓦出土点数一覧

\* - ( ) 内は疑問の残るもの。但し北洋はこれを含めて算出した。  
\* 「不明」にはいずれか解説困難なものを含む。

る(「夫」の事例とその意義については、小口雅史「夫」字  
範(墨)書について『海賊をつなぐ日本史』1993、参照)。

秦 記載位置は不明。字画は細い。第五画までは  
「夫」に酷似する。

七 広端を上にして右端の広端寄りに書かれたもの  
が多い。字画は太いが「キ」よりは細い。10cm  
四方程度の大振りのものと、5cm程度の小振りの  
ものがある。いずれも筆順は横画、縦画の順であ  
るが、縦画を曲げる時に二画に分け三画で書く場  
合もある。第一画と第二画はそれぞれの字画の中  
央で交わり、漢字の「十」の一端にカギを付けた  
ような字体をとるので、漢字の「七」よりはむし  
ろ記号に近いか。

十 記載位置は一定しない。字画は細く深く、3  
cm四方程度の小振りに書かれる。45°回転させ  
て「×」とするものがあり、漢字の「十」ではなく  
記号であろう。なお、宮跡庭園出土の2点はい  
ずれも丸瓦四面の例で、「大」の可能性も捨てき  
れない。歌姫西瓦窯には平瓦凸面狭端の例がある。  
10cm程度の大振りな漢字の「十」のように読みと  
れる事例が多数あるが、これらは字画が太く、ま  
た周囲が欠損しており確実に「十」と判断できる  
事例はなく、「七」の断片の可能性が高い。

キ 広端を上にして広端中央に書くものが多い。  
字画は太く深く、幅5mmに及ぶものもある。筆順  
は、横二画、縦画の順で、両画は直交する。音如  
ヶ谷瓦窯には、90°回転して書く例がある。

× 記載位置は不明。字画は細いもの太いもの  
がある。筆順は、横画、左払い、右払いの順。

以上のうち、「大」「夫」「夫」「秦」は、字体や記載  
位置の類似からみて、「秦」→「夫」→「夫」→「大」  
という関係が想定され、関連する範書きとみられる。  
すなわち「夫」は「秦」から「禾」を除いて  
作られた記号であろう。「夫」から一画省いたもの  
が「夫」。さらに一画省いたものが「大」であり、  
これらは漢字としてではなく記号として用いられ  
たと考えられる。従って、歌姫西瓦窯・音如ヶ谷  
瓦窯の「夫」は夫の異体字ではなく、東北・北海  
道地方で出土する「夫」とは異質とみるべきであ  
ろう。

(渡辺晃宏)

音如ヶ谷「大」 宮跡庭園「大」 歌姫西「大」

音如ヶ谷「夫」 歌姫西「夫」 歌姫西「夫」

宮跡庭園「夫」 音如ヶ谷「夫」 カ 音如ヶ谷「夫」 カ

歌姫西「夫」 歌姫西「夫」 歌姫西「秦」

歌姫西「夫」 歌姫西「夫」 カ 歌姫西「×」

歌姫西「七」 歌姫西「+」 歌姫西「キ」

音如ヶ谷「七」 音如ヶ谷「+」 宮跡庭園「キ」

範書き瓦(部分) ×0.4(「七」の2点のみ×0.3)

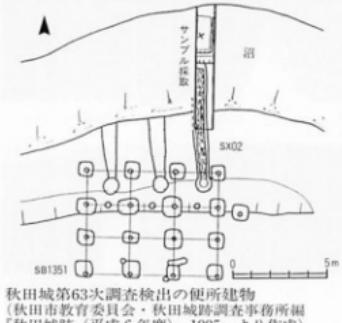
## 動物遺存体の調査(II)

### 埋蔵文化財センター

本年度の動物遺存体の調査は、長崎県教育委員会の行う壱岐、原の辻遺跡、愛媛県埋蔵文化財センターの行った松山市宮前川遺跡北齊院地区が主であった。原の辻遺跡では、哺乳類として、クジラ類、イルカ類、アシカと、イヌ、イノシシ、シカ類が、魚類では、サメ類、マダイ、フグ類、ベラ類などが多く出土している。山陰地方から西北九州にかけての日本海沿岸では、近年までニホンアシカの生息地であったこともあり、弥生時代にも壱岐の周辺に多くのアシカが生息していたことがわかる。陸生哺乳類では、ニホンジカに比較して格段に大きい、大陸に生息するアカシカ相当の角座を持つ前頭骨が存在し、骨角器の素材として搬入されたものと思われる。さらにイヌの骨が300点余り、最小個体数で50個体以上が出土したが、埋葬は見られず、溝中に遺棄、散乱状態のものばかりであった。イヌの骨の一部にも他の食料となった動物の骨と同様に、解体痕が存在したことから、多くのイヌが人々の食用となったことが推測できた。京都大学靈長類研究所の茂原信生氏によると、縄文犬の系統を引く小型のタイプと、北方犬に見られる中型のタイプなど、さまざまなイヌが存在するという。さらに帯広畜産大学の石黒直隆氏に依頼し、出土した犬骨からDNAを抽出することを試みつつある。今後、縄文犬や中世犬のDNAの抽出を試み、さらに朝鮮半島や沿海州の遺跡出土のイヌのDNAの配列が明らかにできると、日本犬の系統も、一層明らかにできるであろう。

宮前川北齊院地区の調査では、全国的にも類例の少ない弥生時代末から古墳時代前期にかけての動物遺存体が出土している。種類としては、シカ、イノシシ、ノウサギ、ネズミ類などの哺乳類と、スッポン、カエル類、サメ類、マダイ、クロダイ、スズキ、コブダイ、ハタ類などが出土した。弥生時代の集落の環濠からの出土例に比較すると、量的には少ないという印象を持った。

便所遺構の調査では、秋田城の第63次調査で検出された3×3間の総柱建物の現地指導を行った。この建物は東西3間(2.4m等間)×南北3間(1.8m+1.8m+2.1m)で南側に庇を持つ構造で、北の3室には、それぞれ、直径0.8m前後の円形の掘り込みがあり、その底から北にひろがる沼地に向かって木樋が埋め込まれていた。木樋の流れ出した溜まりの部分に堆積した土壤のフローテーションを現地で実施し、糞虫、種実類を採取し、この施設が便所であったことを確かめた。また寄生虫、花粉、昆虫、コプロスタノールなどの分析用に土壤サンプルを採取し、それぞれの専門家に分析を依頼し、この施設が便所建物であったことをさらに証明した<sup>1)</sup>。



秋田城第63次調査検出の便所建物  
(秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所編  
『秋田城跡(平成6年度)』1995より作成)

その他の便所遺構としては、広島県教育委員会の行う吉川元春館跡(中世)、石川県鹿島町教育委員会の行う石動山大宮坊(近世)の現地指導を行い、土壤を採取し、それぞれの専門分野の研究者に分析を依頼した。特に大宮坊では、天理大学天理参考館の金原正明氏によって、種実にアワ、ヒエなどが多いことが判明し、僧侶の質素な食生活が裏付けられた。また、吉川元春館跡の便所では帯広畜産大学の中野益男氏の分析でコプロスタノール:コレステロールの比率が男性の排泄物に近く、男性用便所の可能性が強いという結果が出た。

(松井 章)

## 年輪年代学(12)

埋蔵文化財センター

### 中国長白山の巨大噴火年代に関する研究

中国東北部と北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）との国境線上に白頭山（中国では長白山）という巨大な休火山がある。標高は2744mあり、東北アジアの最高峰である。海拔750mあたりから2000m付近にかけては、噴火後に成立した多様な原生林に覆われており、国際自然保護区に指定されている。

白頭山の巨大噴火はおよそ10世紀頃と推定されているが、その正確な年代はわかつていない。この時の巨大噴火による火山灰（白頭山苦小牧火山灰と呼ばれている）は、遠く日本海を渡り東北北部から北海道南部にかけて、その厚さ5cm位積っている。この巨大噴火の実年代が判明すれば、こうした地域の遺跡、遺物の年代判定に役立つばかりでなく、当時、朝鮮半島北部から中国東北部にかけての地域を支配していた渤海という国の滅亡（926年）との因果関係についても検討できることになる。

現地では、火碎流堆植物中に多数の炭化樹幹が埋没している。これらの炭化樹幹の年輪年代が明らかになれば、巨大噴火の年代を確定できることになる。そこで、1993年に中国科学院沈阳応用生態研究所の協力を得て、試行的研究を開始した。この年、現地で現生のマンシュウカラマツ(*Larix olgensis*)を15点、チョウセンマツ(*Pinus koraiensis*)を5点採取し、年輪年代法による各種検討をおこなった。本年度は、文部省科学研究費補助金（国際学術研究）の助成を受け、火碎流堆植物中の炭化樹幹を26点採取し、同様の検討をおこなった。

### 現生標本の検討

年輪年代法が適用できる樹種かどうかは、同年代に形成された年輪パターンの間に有意な相関関係が存在しなければならない。マンシュウカラマツ15点の年輪パターン相互の相関関係は高く、年輪年代法に適用できることが判った。一方、チョウセンマツの場合は、低い相関関係しか得られず、年輪年代法には使えないことが判った。つぎに、マンシュウカラマツ15点の年輪パターンのなかで、相互に相間の高いものを10点選定し、これらの年輪データを同年代の年代位置で総平均して157年分の平均値パターンを作成した。これと、白頭山から直線距離にして約1100km離れた青森県下北半島産のヒノキアスナロ(*Thujopsis dolabrata*)の標準パターンと照合したところ、有意な相関関係が得られた。つまり、マンシュウカラマツの年輪とヒノキアスナロの年輪とが連動している事実が判明したのである。このことは、マンシュウカラマツの炭化樹幹の年輪パターンとヒノキアスナロの暦年標準パターンとが照合できる可能性のあることを示唆している。現在、ヒノキアスナロの暦年標準パターンの作成状況は、924年から1325年までのものができている。白頭山の巨大噴火が10世紀頃とすると、炭化樹幹の年輪に実年代を確定するには、今後ヒノキアスナロの暦年標準パターンの先端を8世紀あたりまで遡らせなければならない。

### 炭化樹幹の検討

採取した炭化樹幹の樹種は、同定の結果マンシュウカラマツが17点、チョウセンマツが9点であった。17点相互間の年輪パターンの照合は9点において成立した。そこで、重複した年代位置で総平均し、379年分の暦年未確定の平均値パターンを作成した。将来、この平均値パターンに暦年が確定すれば、白頭山の巨大噴火の年代が確定することになる。

（光谷 拓実）

## 文化財用X線CTによって甦った銀象嵌鳳凰文様

埋蔵文化財センター

出土鉄器は表面が厚いさびに覆われてしまっている場合が多く、内部の構造や作り方などは肉眼観察ではわからないものがほとんどである。このような遺物のオリジナルの形や内部構造など「見えないもの」をみる手法としてX線ラジオグラフィー（X線透視撮影）が從来から用いられてきた。しかし、実際の遺物の形状が三次元の立体物であるにも関わらず、この手法では得られる結果は、例えばX線フィルムなどにみられるように二次元情報となってしまうため、三次元的イメージを想起した「フィルムを読む技術」が必要となってくる。従って、遺物の内部構造が複雑な場合や、込み入った文様や文字などの場合、解説に困難をきたすことも少なくない。この点を改良し、できるだけわかりやすい三次元イメージを構築することを目的に、文化財用X線CT（X-ray Computed Tomography）は導入された。

このシステムは、X線源に小型加速器を備え、従来のX線管より高エネルギーのX線を得ることができるため、少々厚めの青銅器でも透過することができる。しかし、小型の遺物に対しても対応可能のように、微細構造解析用システムも新たに付帯している。図1に示すように、固定して設置されたX線源と検出器センサーの間に位置するターンテーブル上に測定対象物を載せ、これを回転させて得られた全方位からのX線透過の結果をコンピューター内で1スライスの断層画像として合成する。テーブルの高さを一定のピッチで変化させ、それぞれの高さで得たスライス画像をコンピューター内で重ね合わせて三次元の立体映像として再構築するのである。1スライスの幅が細かいほど精細な画像が得られることになるが、この幅は検出器センサーをはじめとするこのシステム全体の能力と、測定に費やせる時間との相関で決まつくる。

図2は、静岡市駿河山古墳から昭和24年に出土した鉄製の円頭柄頭である。表面は厚いさびに覆われてしまっている。かつてX線ラジオグラフィーにより銀象嵌が施されていることは確認されていたが、文様が複雑なためその全容は解明されていなかった。図3は、この柄頭をX線CTで0.4mmピッチでスライスし、その全スライスを重ねて再構築して得られた表面イメージを4方向から示している。さらに、銀象嵌の銀線部分だけを画像処理によって抽出して得たイメージを図3同様4方向から示したのが図4である。実際は双方とも回転しながら見ることできる三次元動画映像に仕上げてある。また、この銀象嵌で描かれた画像の詳細を見るために、銀象嵌のある面でパノラマ展開を試みた（図5）。表面に生じた厚いさびを機械的に取り去ることもせずに、細い銀線によって表現された6世紀後半の鳳凰の文様を見事に甦らせることに成功したのである。3羽の鳳凰をシンメトリックに大胆に配したこの文様はこれまでに類例のないものである。まったく非破壊的手法でこれだけリアルな情報を引き出せることが可能になった意義は大きい。今後、青銅器をはじめとし、土器などの素材の違う遺物への応用を考えていきたい。

（沢田正昭・村上 隆）

図 2

図 3

図 4

図 5

## 石山寺法輪院の聖教目録

歴史研究室

聖教典籍を数多く伝来している寺院においては、その法流を受け継ぎ、学び、そしてさらに後世の代に伝えていくために、その時代時代における学僧の真摯な存在がある。それらの学僧は、当然のこと著述や注釈などでその見解を明らかにする。しかし、それとともにその法流の教えを伝える聖教典籍の相承に重きを置く。そして多くの場合、自坊蔵書の目録を作成する。石山寺においても同様であって、各時代の蔵書目録が現存する。例えば、平安中期、石山寺の基を築いた淳祐の著作である薫聖教については淳祐自ら認めた「聖教目録（薫聖教61号）」が現存し、また建武2年に作成された三巻本の目録とそれを暦応2年守邊が書寫した目録の存在が、江戸時代になってから書写された各種の薫聖教目録からしられる。それらの薫聖教の目録として、明暦元年写「聖教目録（薫聖教62号）」、江戸中期写「普賢院筆跡聖教目録（寺誌函17号）」、江戸末期写「普賢院筆跡勾聖教建武目録（寺誌函15号）」などがある。石山寺にとり、法流を伝える最も大切な聖教である薫聖教であるから当然であるともいえるが、それ以外の聖教群についても各種の目録が各時代に作成されていて、法流の研鑽に取り組む学僧の姿が偲ばれる。

ところで、石山寺山内の聖教群のうち、現在、深密藏聖教と称されている聖教群は、大正時代に山内各子院に分散していたものが、本坊に取り集められたもの〔年報1991〕であり、明治まで各院家での所蔵状況が今一つ判然としない。そこで、子院の一つである密藏院の目録を紹介したことがある〔年報1993〕。その目録と経箱墨書銘により、現深密藏聖教箱第1函～第122函のうち、密藏院伝米経箱がどれに当たるかがほぼ判明しつつある。そこで今回は子院の一つである法輪院関係の聖教目録を紹介したい。この目録は、聖教の研究書写のための貸借や移動についての書き入れが多く、その分についてすべて翻字すると煩雑となるため、当初書写分と思われる部分につき紹介する。また、略字・異体字の類は概ね常用字体にした。

ところで現在の深密藏聖教箱では、その第9、10、12～14、36、37、43～47、64、68、71、72、76、84、87、92函には、「聖教二十ノ内／明治三庚午年十月新調／法輪院 尊信」と墨書銘があり、明治初年には法輪院聖教は、これらの経箱に収納されていたであろう。ここには、尊信作成の目録のうち、第八と第九を除くほかを収録したが、それと『石山寺の研究 深密藏聖教篇上』収録の深密藏聖教の現状と対照していくと、例えば、翻字した史料の第一の伝法灌頂／結縁灌頂では尊信の伝法灌頂三昧耶戒私等四卷は深密藏聖教第36函24号〔1〕～〔4〕、淨信の同（結縁灌頂乞戒次第）は第36函44号、また寛隆入道御震筆伝法灌頂作法と真乘院僧正孝宥の伝法灌頂護摩用意私は深密藏聖教第37函20号（1）と（2）のように、第37函や第38函中にみられる。また、第四の作法部神道方では、隆尋の骨路作法は第45函8号、順宥の觀内古摩は第64函53号、基信と宥円の出家略作法が第92函の1、2号に当たり、版本の二時食作法は第122函61号に当たり、第64函には他にも該当しそうなものがみられる。第十尊法では、隆尋の荒神供次第が第76函17号に当たる他、第76函に数点みられ、上記の法輪院墨書在銘経箱中にこの法輪院仮目録所載の書目が存在することが確認できるのである。また、第四の宥応の古摩支分は、その法輪院本の現物は第99函20号（1）に存在するが、それをさらに明王院で書写され、その本が第91函7号である。このように、現在は混在してその伝来を明確にしない聖教類が本来どういうグループで伝來したかということを明らかにするため、本史料のごとき目録類を翻字し、さらにデータベース化することは、現在の段階での典籍文書目録を作成する作業と関連し、基礎的作業として継続していく必要があると考える。

（綾村 宏）







## 岡山市近世寺社建築調査(1)

建造物研究室

**調査の概要** 岡山市近世寺社建築調査は、岡山市教育委員会が平成6・7年度の2カ年にわたって行うもので、当研究所が協力することになった。岡山市は、昭和40年代に周辺町村を合併して拡大したため文化財建造物の把握が十分でなく、その調査が必要であった。そこでまず最初に、近世以前の寺社建築を調査することになったものである。最近増加しつつある市町村単位での調査であり、県単位調査に比して調査面積・件数ともに少なくなるため、悉皆調査が可能な点に特徴がある。しかし岡山市の場合は、かなり面積・件数とも多いので、以下のような調査方法をとった。

まず最初に、教育委員会から委嘱されている各地域の文化財モニターによって予備調査を行った。予備調査は、旧市史などに掲載されていない寺社について、寺歴や棟札など史料の有無を中心とする調査票の記入と、写真撮影を行い、絶件数は231件にのぼった。つぎに1次調査として、近世以前であるか、もしくは近代のものであっても施行者あるいは大工に特徴を有すると判明したもの、および予備調査段階で不明なままであった物件を選び出して、史料調査、様式による建立年代の判別、建造物の構造形式の記録、写真撮影を行った。調査は、9月26日より30日までと、10月24日より27日までの2回に渡り163件を行い、1物件に複数棟ある場合が多いので、調査棟数は約400棟になった。ついでこの中から、建立年代が古く貴重なものや、構造・意匠に特徴があつて貴重なもの、あるいは歴史的意義や地域的意義の高いものを選択し、10月27・28日と、11月14日より16日までの2回にわたって、2次調査を行った。調査件数は23件で棟数は36棟になった。2次調査では、調査票の記入・配置図の作成・平面実測・写真撮影を行ったが、とくに小屋裏・棟札の調査や痕跡調査を含み、予備調査と1次調査で調べられたことをより詳細に調査・記録することを目的とし、かつ調査対象の歴史的経過の把握と、文化財としての評価が行われた。

なお、7年度も引き続き1次・2次調査を行い、年度末には調査報告書を刊行する予定である。

**調査の成果** 1次調査の結果、岡山市内の大多数の近世寺社建築を調査したことになる。今回調査した寺社建築の中には、清泰院の池田忠繼や忠雄廟唐門、あるいは東照宮のように江戸初期のものもあるが、これらは既にある程度は知られているものなのでここでは触れない。今回初めて調査されたものでは、最も古いものでも元禄年間と、江戸中期以降のものがほとんどであった。これは、岡山市の中心部にあった備前藩の主要な寺院が戦災で失われてしまったことが影響しているが、そればかりではなく、備前藩では寛文年間に第3代池田光政によって相当数の寺社整理が行われ、約460の寺院と約600の神社しか残されなかつたことが遠因となっている。寛文の寺社整理と戦災によって淘汰された結果、江戸初期に遡るものは他地域にくらべ少ないという特色が形成されたのであろう。

そうした中で、おもに周辺部に残された元禄・享保年間の貴重な遺構を発見できたのは、今回の調査の大きな成果であった。これまでに知られている江戸前期の寺社建築の多くは、中世以来の大寺院

か、藩主の造営になるものがほとんどであったが、今回見つかった17世紀末から18世紀中頃までの寺社建築は、地域の生活により密着した中小の寺社であり、江戸前半期の庶民の生活が伺える点で貴重である。以下、寺院建築と神社建築に分けて概要を報告する。

まず寺院建築についてみると、この地方は古代末期に成立した備前四八ヶ寺と呼ばれる真言宗を中心とする密教系寺院が勢力をもっていた。今回の調査でも明王寺・東新寺・幸福寺など、密教系寺院に大規模で良質なものがみられた。とくに妙法寺は、中世建立の建物の部材を相当数再利用して、18世紀後半に立て替えられており、中世密教寺院の平面や意匠を色濃く残していた。このことにより、年度末には市指定文化財に加えられた。

この地方のもう一つの特徴として、日蓮宗不受不施派の大根拠地であったことをあげなくてはならない。不受不施派の寺院は寛文の寺社整理のとき他の宗派よりも多く廃絶に追い込まれたが、今回の調査では、このとき生き延びたものや、その後再興されたものが相当数見つかった。妙広寺・妙林寺・大林寺・盛隆寺などであるが、これらは地域の精神史の史料として貴重である。

また地域別にみると、児島湾に面する港町であった地区に、特色ある古い寺院建築が相当数みつかった。掌善寺・円蔵院・三藏院などであるが、これらは船主など富裕な町人の寄進により元禄から享保にかけて建てられたもので、装飾性の強い趣味や、非常に新しい構造・意匠の積極的採用など、当時の町人の気風をよく表現していて価値が高い。また、地区に限らず児島湾沿岸では流文や雲文を豊かに使用する傾向が強く、しかも全国的に見ても装飾が多くなる時期が早い。これは、瀬戸内海航路や児島湾内航路により生計を立てるものが多かったこの地域の生活が関係していると考えられ興味深い。

このほか、中世の廟宇をを残す常福寺や民間信仰を伺わせる正法寺、重源ゆかりの浄土寺と境内社の日吉神社も興味深い建物であった。

神社建築では、予想以上に近代になって建て替えられたもののが多かった。これは明治期に、国家神道との関連で神社を建て替える傾向が広くあったことを意味している。とくに村落の氏神である小社は軒並み建て替えられていた。そうした中で、菅野八幡宮・栗村神社・岩熊八幡宮・武部神社といった、17世紀から18世紀にかけて建てられた村落の鎮守が、若干でも残っていたことの意義は大きい。これらを通じて、この地域の近世前半期の様子が窺い知れるからである。

上述の寛文の寺社整理関係では、このとき廢止された小祠を合祀する「寄宮」の一つが置かれた布施神社が重要である。建物としても非常に質の高い建物であり、今後の研究が待たれる。

このほかでは、日本3大稲荷といわれる最上稲荷の靈応殿が18世紀中期の建物でありながら、尾垂木に龍の彫刻を使う。このような装飾は全国的流行でもあるが、隣の津山では17世紀中期にすでにみえるのでその影響も考えられよう。松琴寺内の瑜伽山大権現は、藩主がここで隠遁生活を送るに際して児島の蓮台寺の瑜伽大権現の写しとして建てさせたもので、その成立事情故か装飾技法が特に進んでいる。清山神社は板倉氏が先祖を祭った神社で、武具を納める土蔵がそのまま神社となつたかのような意匠が興味深い。

(藤田盟児)

# 発掘調査支援機械システムの試作研究

埋蔵文化財センター

平成6年度の埋蔵文化財発掘調査等の届出件数は4,000を上回り、要した費用は1,170億円に及ぶ。莫大な人的・経済的エネルギーが投入されており、それにかかる時間もまた膨大であると言えよう。本研究では、このような現状に対処するために、遺跡発掘作業の「迅速化」「省力化」「精密化」を計り、さらに調査の諸情報を定量化して活用することを目的として、発掘調査に有効な機械を新たに考案し、試作を行うものである。平成5年度より当研究所の特別研究として「掘削」と「測定」の両面から研究を進めている。また発掘現場において試作機械の性能検討会を開き、現場関係者の諸批評を仰いだ。以下、これまでの研究の進展について報告する。

## 1. 掘削機械システム

**掘削機械1号機の試作** この1号機はスクレーバーであり、バックホーで表土を除去した後、遺構面までの間に残る5~20cmの土層を機械力で削り取ることを目的として試作した。一人で操作でき、現場まで数人で運搬が可能なことを条件としている。動力源は、5.6馬力のガソリンエンジンである。掘り上げた遺構面の上での走行も想定されるため、走行部には平ベルトを用いて遺構面の保護を計った。掘削刃は幅30mmの平刃を90°位相をずらし、10個並列させて組立て、総幅30mmの回転刃としている。この回転刃は無負荷時毎分約2000回転し、土層を10~15mmずつ掻き取る。掻き取った土は排土カバーの先端からスクレーバー側方に放出される仕組みになっている。重量は約90kgである。

**1号機の掘削実験** スクレーバーを実際の発掘現場で稼動させ、掘削性能を検討するとともに、現場での機動性、使いやすさを調べ、今後の開発の指針を得ることを目的として掘削実験を行った。掘削の際の土の切れ方、掘削後の削られた面の状態、排土の状況および走行性能を観察するとともに、調査員や現場関係者の感想や意見も聴取した。実験の場所は平城、飛鳥藤原の計4ヶ所の現場である。

**実験結果と改良点** この結果、次に示す改良点が明らかとなった。1) 機体重量が大き過ぎ、運搬が難しい。2) 走行装置の性能が不十分である。3) 掘削土中に遺物がある場合でも破壊してしまう。4) 排土の処理が考えられていない。また聴取意見では、同現場に複数台の掘削機械を投入した際の騒音の処理の問題や、動力源の電動化などの指摘があった。

**掘削機械2号機の試作** 2号機の試作では、1号機自体には改良を加えず、1号機での問題点を踏まえ、新規に機械を設計し直す方針を探り、以下を設計の基本とした。1) 機体重量を40kg程度に抑え、現場への搬入を容易にする。2) 走行にはゴムタイヤを用いる。3) 掘削刃を工夫し掘削中に遺物に当っても損傷を最小限にとどめる。4) 動力にはモーターを用いる。2号機では、機能の違う3台の機械を試作した。掘削部の部分試作の形で1機、排土処理方式の違いで2機とし、これを区別するた



1号機

2A号機

2B号機

2C号機

め各々 2 A、 2 B、 2 C と呼ぶ。

**2 A 号機** 動力源をモーターとしたとき、掘削がどの程度可能かを確認するために製作した。3相200V 400W のモーターを用い、掘削刃は無負荷時毎分約1100回転で駆動する。掘削刃は直径30mmの円筒上に、幅350mm、毛足40mmのスチール製ワイヤーブラシを4本90°毎に外向きに溶接した円筒ブラシを用いた。砂利を含む土を掘削する際の掘削抵抗の分散化と掘削中に遺物に当ったとき、これを保護する機能をもつ。重量は23kg。

**2 B 号機** 2 A 号機を基に、モーター750Wに増強して掘削能力を向上させるとともに、掘削刃の後部に排土の吸い込み口を設け、別に設置した工業用電気掃除機をこれに接続し、掘削土を吸引して排除する機構となっている。掘削刃は 2 A と同じ仕様である。重量は37kg。

**2 C 号機** 掘削土を吸引する工業用掃除機を掘削機本体に搭載したものである。本体上部には、掘削土を吸引するための工業用掃除機のモーター部分が2台設置されている。掘削刃部は 2 B と同じであるが、掘削刃後部の排土吸い込み口から吸い込まれた土は、本体後部の掘削土溜に収納される構造になっている。重量は89kg。

**2号機の掘削実験結果** これら3台の試作機械を平城宮造酒司跡の発掘現場で稼動させ、性能の検討を行った。機体重量の問題は、2 A、2 B 号機が40kg以下に納まっており、またゴムタイヤ2輪の装着により機動性は向上した。2 C 号機は重量は約90kgであるが、4輪であるため機動性には問題はなかった。掘削では、平刃からワイヤーブラシに変えた効果として、掘削土中の遺物に当っても損傷することなく掘り残すことができた。また、相当に固い土層でも繰り返し掘削することにより、無理のない掘り下げが可能となった。しかし、掘削した面については、現在の手掘りによる面に比べて荒れしており、遺構の検出には不適との指摘もあった。これら3台の中では、2 A 号機が最も機動性に優れており、現場での有効性が高いことがわかった。掘削土の処理では、大型の工業用掃除機を用いていても、なお掘削土の吸引が追いつかず、掘削土が掘削後の面に残ったり、掘削土がパイプに詰まるなどの不具合が生じた。また、掘削土溜に土がたまるにつれて重量が増し機動性は鈍る。さらにこの溜土の運搬も問題となつた。これは掘削機能と排土機能とがうまく連動しなかつたことが原因であり、排土機能については装置を再検討する必要がある。

今後の試作研究方針 「掘削」では土からの反力をどのように受け止めるかが大きな問題となる。バックホー等の大型掘削機械ではその自重と地面との摩擦が支点となって大きな掘削力を生ずる。しかし、これをそのまま発掘現場に入れれば重量や走行部覆帯との摩擦により遺構面は損傷もしくは破壊されることになる。人力掘削から機械掘削への移行では、「掘削力」とこれを生み出す「重量」と「遺構面の地耐力」との関係を的確に把握することが重要となる。また、人力掘削は遺物を識別できる速さで進む。しかし、機械掘削では人力より速く効率的に土を掘り取ることと、その土の中に混在する遺物や遺構を損傷してはならない、という相反する2つの条件を同時に満たすことも課題となつてゐる。次年度は以下の項目を研究の課題とし、設計・試作・検討の段階を繰り返しながら、発掘調査に有効な機械の開発を目指したい。

1) 2 A 号機の機能及び形状をもつ掘削機械の実用モデルの試作 2) 回転掘削刃の形状、強度等についての実用化に向けた改良 3) 現在採用している回転刃による掘削とは別に、人の手による掘削を模した往復運動刃を検討する。4) 排土処理装置群の考察 (内田昭人)

## 2. 測定機械システム

**自動追尾型三次元データ採取システム** 発掘調査の行程で、検出した遺物の出土状況、出土地点の記録、および検出した遺構の実測作業は欠かすことはできない。しかもその作業には迅速性と正確性が

要求され、検出機構に精通した調査員がこれにあたらなければならない。しかしながら、調査員は遺構・遺物の検出のほか、現場の運営のために作業員の手配と労務管理、発掘器材などの管理など、多くの仕事を抱えている。その上、近年の発掘調査では、少人数の調査員で現場を担当しなければならないことが少なくない。このような状況の中、調査員は他の諸事に追われながら、出土遺物の記録・取りあげ、遺構の検出、解釈・記録などを、迅速かつ正確に行うことが、なかなかままならないというのが現状である。この部分にコンピュータなどを導入することによって省力化を計ることができないか、また、更に測定精度を高めることはできないか、これが從来からの課題であった。これに対し、電子型測距・測角儀（トータルステーション）によって座標をより精密に測定し記録するシステムについては既にいくつかの試みがあり、実用に至っているものもある。しかし、いずれもオペレーターが測定機械を操作し、目標を測定機械のレンズの中心で捉えるという操作が必要条件として与えられており、これにはまだ省力化の余地が十分に残されている。「もう一人調査員が欲しい」という要求に對して、発掘調査行程のうち、記録の部分の負担を軽減し、かつ後のデータ管理の省力化を見越して応えようとしたのがこのシステムである。

**システムの構成** 自動追尾型のトータルステーションをシステムの中心に置き、コンピュータ、周辺機器および、市販のアプリケーションソフトウェア、新たに開発したソフトウェアでこのシステムを構成する。

**ハードウェア** 本システムに導入した自動追尾型トータルステーションは、離れたポイントのプリズムを自動的に捕捉し、その動きを追跡しながら3次元座標を計測するという画期的なものである。さらに、計測したデータをRS-232Cインターフェイスを通じてコンピュータ側に送信する機能も併せて持つものである。これを遺跡・遺物の計測のために新たに開発したソフトウェアによって制御し、またデータベースと連動することによって、現場のデータ収集、管理などの作業を一つのシステムに組み込むものである。必要なコンピュータのタイプとしては、現場での作業性を考えたペンコムタイプのノート型と、研究所内でのデータ処理用のデスクトップ型によって構成する。現場から発生するデータは、追い番号と点のID、遺物・遺構の属性、3次元座標値があるので、ノート型コンピュータの補助記憶装置については、システムやアプリケーションのための容量のほか、データ格納用の容量として100MBは確保しなければならない。現場における1回当たりの計測単位を4,000点とすると、データ部だけで最低400KB、システムに4MB、その他アプリケーションを起動することを考えれば、10MB程度の主記憶装置を必要とする。また、採取したデータを研究所内で、加工・蓄積・出力するための周辺機器として、大容量の記録メディア、高精細のカラーディスプレイ、XYプロッタなどもあれば、作業性を一段と高めることができる。

**ソフトウェア** ソフトウェアは、基本的なものとして、操作を容易にするためのユーザインタフェイスとしてマルチタスクのOS、データ加工用に使用するCADなど市販のアプリケーションソフトウェアを使用する。さらに今回のシステム設計に際し、1) 基準点計測 2) データ取り込み 3) データ出力 4) 既存データとのマッチング 5) データ加工 6) ファイル収納 7) XYプロッター出力などの各機能に応じたアプリケーションを開発した。また、これらを一つのシステムとして結合し、現場や所内における作業を容易にするためのプログラムについても新たに開発した。

**実験結果と改良を要する点** システム全体を開発していくなかで発掘現場において幾度かテストを行った。その結果、いくつかの改良すべき点が指摘されている。これらを参照して、今後発掘現場において、このシステムを有效地に利用するための指針としたい。

**電源の問題** 本システムに導入した自動追尾型トータルステーションは、サーボモーターで自動的に

水平・鉛直方向に駆動する。また、測定するための電磁波を発射しそれを受信しなければならず、そのためにはかなりの電力を消費する。これには大容量の充電池が付属しているが、作業中に充電を要することがよくあった。複数個の電池を常時用意し、現場で充電しながら作業を継続する方法もあるが、現場にAC電源をひいて、それを活用できるならば、安定した作業環境を提供できる。このことから、小型軽量かつ無騒音で、電圧の安定した発電器の使用についても、今後検討すべきである。

無線通信の問題 トータルステーションによって収集されたデータはRS-232Cインターフェイスを通して、無線によってコンピュータ側に送信される。データの送信に電波を使うため、発掘現場に発生している様々な電波との競合（混信）の問題があった。現場でのテストの結果、しばしば本体が交信不能の状態が見られたが、これは重機が出すFM波、トランシーバーとの競合などが原因であると考えられる。RS-232C用の電波は発掘調査区内の一部の範囲において有効であれば十分であるが、混信の問題については、機器の改良が望まれる。

省力化の問題 冒頭でも述べたように、このシステム開発の第一の目的は、現場の省力化である。実験中は本体側にもオペレーターがいて、常にトラブルの処理に当たっていたが、本来、本体側は無人であることが、このシステムのいわば主眼であり、今後、システムのより高い安定性を確保し、真の省力化を目指さなければならぬ。

（伊東太作）

### 3. 標高換算式標尺を用いた実測調査

構造の実測調査における高さの記録は、従来測定点に標尺を立て標高の既知の水糸または眼高からどれだけ下がるかを記し、必要に応じ標高を算出してきた。しかし、標高で記録しておくことが便利であることから、近年では現場で標高を記録する二つの方法をとってきた。一つ目はバーコードの付いた標尺と光波を発する水準器を用いて標高を算出する方法やトータルステーションを用いるもので、測距に若干の時間を要した。二つ目は従来のやり方に加え標高に直して記録する方法で、これも繰り返し行う計算に時間を要した。そこで計算することなく瞬時に標高を読み取る方法を考案した。

**標尺の特徴** 標尺正面の左側には通常の標尺と同様に底面から上に向かって目盛りを記した目盛り盤があり、これに接する右側にはスライドする目盛り盤が装備される。スライドする目盛り盤の目盛りは1m単位で0に戻り、上から下へ数値は大きくなる。この目盛り盤の数字と地の色は2種類とし1mごとに交互に替わる。これは標高の整数部分の値が偶数か奇数かを判読しやすくするためのものである。

**測定の方法** レベルを据えて後視する既知点の標高が69.615m、目盛り盤の読みが1.27ならメートル単位で示す標高の小数部分の値(615)をスライドする目盛り盤の目盛り61.5cmとし、これをスライドさせて目盛り盤の1.270の値と合わせる。これによりスライドする目盛り盤の数値は未知点においても標高の小数部分の値を示す。標高の整数部分の値を記した付箋紙を要所に貼付し、双方の値を読むことにより標高を知ることができる。

**構造** 断面が方形のアルミ管正面の上下に開口部、それぞれの内側にはドラムを設けた。標尺表面をスライドする目盛り盤は開口部から内部に入り、上下のドラムで向きを変えリング状に加工した。開口部から水や土の侵入を防ぐために透明板で開口部を覆った。また、標尺の長さが足りなくなる場合に備え、標尺を1mまたは2m高くする脚（装着式・内蔵式）を装備した。なお、試作品はアルミ管の長さ・断面の大きさ、脚の長さ・構造を変えた5種類を制作した。

（内田和伸）



標高換算式標尺

# 塔の森の石塔の写真測量および実測調査

平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

奈良市高畠町の国指定史跡頭塔の整備では遺跡の北半部を平安時代の姿に復原し、遺跡の中央で最高部には十三重の石塔を設置する計画である。これは頭塔の出土遺材である凝灰岩の六角形屋蓋石塔片が奈良市长谷町の奈良県指定史跡「塔の森」の平安時代の作と考えられている十三重の石塔の2～3層にあたる規模をもつこと、『七大寺巡礼私記』に頭塔を十三重の大墓と記すことなどを根拠としている。塔の森の石塔の石質も凝灰岩で破損が著しく、現在は中央下重台座上に初重塔身を含めて六層の屋蓋石が重ねられ、脇に上重台座破片や他の屋蓋石断片が置かれている。これらを整理すると二重台座十三重の石塔に復原できると考えられている。頭塔の石塔復原にあたり塔の森の石塔を参考にするため、写真測量による図化および図化図面に表現されない部分の実測調査を行った。

**図化のための基準点測量および撮影** 石塔台座の比較的残存状況の良い東面に平行並びに直交する線を投影面の基準と定めた。標定のためのアルミ製標識（20×15mm）を石塔の適宜必要箇所に貼付し、先の投影面を座標軸とした仮の原点からトータルステーションを用い三次元座標を放射状に測定した。測定の精度は±1mmを目標とした。裏面も正面に準じて行ったが、その際正面と同じ点を計測し精度を確かめた。撮影は東面と西面の二面を上下三段撮影とし、撮影に用いたカメラはハッセルブラッドMK/wで、フィルムはコダックプロニーブル黒TRY-Xである。



塔の森の石塔立面図(等高線間隔 2 cm出力図)

**図化** 図化は当研究所解析図化機ライカ社製AC-3を用いた。等高線データの採取間隔は2.5mmに設定した。描画は直接テープルには出力せず、コンピューターのモニター上で行った。これはモニター画面で設定したさまざまな縮尺を1回のキータッチで瞬時に入れ替えることができ作業性が良いためである。描画は主として1:2の縮尺で行い、等高線間隔は2.5mmである。等高線描画はラインモードではなくストリームモードで行った。これは解析図化機で作図した等高線が折れ線状に表現されることを避けるためで、時間を要するが美術工芸品の表現には適した方法である。等高線の重なりなどの修正（編集）は2:1に拡大して行った。描画には15日、編集には20日を要した。なお、図化作業は朝日テクノに依頼した。

**出力** 出力は自動製図機ウイルド社製TA-10を用いた。出力縮尺は1/2.5と1/5、等高線間隔は2.5mmおよび5mmとした。データのファイリングは1層ごとに1ファイルとしてディスクに収納したが、全てのファイルを統合してテーブル出力もデータファイリングも可能である。全データ量は10メガバイトである。

**実測調査** 実測調査では石塔の脇に置かれている遺存状態の良い屋蓋石の表面および裏面の実測などを行った。また、初重塔身や台座側面に刻まれる文様の拓本を探って記録した。

(内田和伸)

## 平城宮東院庭園中央建物の復原設計

平城宮跡発掘調査部

平城宮東院庭園地区では、平成5年度から5箇年計画で庭園および建物の復原整備事業が進められている。平成6年度には、復原建物のうち5年度着工の東面大垣・南面大垣・南門・北東建物が竣工したが、あわせて中央建物の復原設計を行なった。このため坪井清足・岡田英男・伊藤延男・濱島正士の各氏を委員に迎えて平城宮跡復原建物設計専門委員会を開催し、所内での検討を踏まえて設計内容について討議した。実施設計は御建築研究協会（大森健二・鈴木太郎）に委託した。検討内容と復原設計案の概要は以下のとおりである。

**遺構の再検討** 東院庭園中央建物は、平城宮99次調査で検出されたロ字形掘込地業SB8480を中心に、東の池中の南北棟建物SB8466、北の東西廊SA8467、南の東西廊SA8468、4箇の大型掘立柱穴、西の南北堀SA8469など、從来別個に解釈されていた複数の遺構を1棟にまとめたものである。この再検討は、すでに平成元年度開催の平城京展に展出された「東院庭園復原模型」（縮尺1:50）の製作時になされたものであるが、復原建物の設計にあたって発掘遺構・遺構断面の詳細な検討を行なった。

東西廊SA8467・SA8468と南北堀SA8469に、池中の南北棟建物SB8466の西辺柱列を加えると、柱筋を揃えた東西7間、南北4間の平面が構成される。このとき柱間寸法は、東西・南北とも両端間が5尺、中間が10尺を測る。この柱列の1間内側の四隅には大型掘立柱掘形があり、柱筋が揃っている。この柱穴は桁行5間、梁間2間の母屋の四隅の柱であると考え、東院庭園中央建物の本体とした。母屋は四隅以外に掘立柱穴はないが、柱筋上に礎石据付けの痕跡2箇所を検出しており、四隅のほかは礎石立ちの柱と推定した。このとき周囲の柱列は庇あるいは縁が想定されるが、復原案では縁とした。

ロ字形地業SB8480は母屋の柱筋に合致し、西側3間分にあたる。1976年度発掘調査概報の段階では、地業とその上の整地土の土層差を「時期差」とみて前期遺構と判断されていたが、復原案ではこれを「工程差」と解釈し、外周柱列と同時期の遺構と考えた。この南北2間×東西3間の掘込地業は、重い上部構造の存在を示すものと解され、土壁や屏などの建具が置かれていた可能性が大きい。

池中の南北棟建物SB8466は東西柱間が8尺等間、南北の柱間は5尺+10尺+10尺+5尺と中央建物本体に揃うが、東辺南端の柱間にのみ東西廊SC8465の南北柱間8尺に揃えている。これは中央建物本体との関連が強く、なおかつ東西廊の柱間に影響を受ける性格の構造物であったと解される。今回の復原案ではSB8466を中央建物付属の露台、SC8465は池の東対岸へ架かる橋とした。

**出土遺物** 建物関連の出土遺物とし

ては、母屋柱と縁東の柱根、礎灰岩の根巻石がある。

母屋の掘立柱掘形は一辺2m以上あり、その底には礎石を据え、柱底部近くに通した貫の先端を2本の丸太で支える強固な根固めを施す。北東隅の柱穴には柱根が長さ1.1m分残っていた。この柱根は当初、縁東柱根と同様の正八角形断面と見られており、地上では円柱になるものと

東院庭園中央建物関連遺構（1:300）

想定されていたが、今回、より詳細に実測したところ、隣り合う辺長が異なり、1.4尺角の柱で辺の1/4強を面として取る大面取角柱であることが判明した。縁東の攝形の一辺は1m程度で9箇所に柱根が残る。柱根の断面は一辺3.7寸、対辺9寸の正八角形で、柱底部には正八角形に整形するための墨付けが残る。根巻石は母屋北東隅の柱抜き取り穴に投棄されていた。長さが2尺、幅と高さが1尺で、半八角形の欠き込みをもつ。木階の親柱あるいは縁東を挟み込む地覆状の石材と考えられるが、欠き込みは対辺8寸で、対辺9寸の縁東を挟むとすれば、東側に片側5分ずつの欠き込みを施していたと考えられる。

平面の復原 東院庭園中央建物は、母屋の四周に縁がつき、  
出土遺物（大面取角柱・縁東・根巻石）  
東の池上に露台を出す平面に復原することができた。以下に各部の概要を記す。

母屋 4個の大型掘立柱穴で囲まれる部分を、桁行5間×梁間2間の母屋とした。柱間寸法は桁行・梁間とも10尺等間で、基準尺は1尺=29.6cmである。これは奈良時代後期の造営尺の値として妥当であろう。四隅の掘立柱は出土柱根から柱元で1.4尺角の大面取角柱とした。四隅以外の母屋の柱は礎石立ちと考えられるが、掘立柱と同寸の大面取角柱とした。母屋の桁行5間のうち、掘込地業のある西側3間分は土壁や扉で閉鎖された「室」的な空間と考えた。これに対して東側2間分を吹き放しの「堂」的な空間とみれば、この空間構成は法隆寺伝法堂前身建物によく似ている。この類似性から復原設計にあたっては、伝法堂前身建物の構造と比例を参照した。「堂」部分の柱間装置は発掘遺構では確認しえないが、南面と東面は圍池に向かって開放できるよう両開きの妻戸とした。また主動線と考えられる西面に1箇所と北面1箇所に妻戸を設けた。妻戸の開閉方向は古代建築では一定しないが、内開きでは隅角で妻戸がぶつかる不都合があるため、復原案では外開きとした。

縁 母屋外周の柱列は庇の可能性もあるが、復原案では縁とした。縁東の母屋からの出は1.6mに近く、造営尺1尺=29.6cmでは5.3尺となる。縁東は出土柱根から、対辺9寸の正八角形である。縁の構造は伝法堂前身建物に倣い、母屋の柱に添えて立てた東と縁東の上に桁を架け渡して縁板を張る構造である。また主動線と考えられる西側縁に木階を設けた。

露台 建物の東の池中の柱穴列は露台上に復原した。柱根は出土していないが縁東と同寸とした。資子張り、高欄なしで露天の形式は、伝法堂前身建物に倣った。出土した根巻石は木階の親柱を挟むと考えたが、風蝕が少なく、池近くの柱穴跡に遺棄されていたことから、池水につかる位置に用いられた可能性が指摘された。

復原案では、露台北辺の池汀付近で露台を切り込んだ形の木階とした。園池を中心とした遊興施設である中央建物に、このような親水性を高める建築的な「仕掛け」が存在した可能性は高いだろう。第

中央建物平面図（1:200）

44次調査で出土した木製の船のミニチュアは、この園池での遊びの一端を伺わせる。

**構造の復原** 母屋の柱間10尺に対して、柱元で1.4尺角の大面取角柱を用いていることから、柱高は地長押上端から柱頂部まで10尺とした。また建物の規模と庭園建築としての性格から、組物は大斗肘木とし、軒は二軒で、出を6.9尺とした。屋根は切妻造で、小屋組は二重虹梁豪股、地垂木勾配は引通して5.3寸とした。軒高は礎石上端から13.9尺(4.1m)、棟高は同じく24.5尺(7.2m)である。屋根は桧皮葺とし、棟には熨斗を積み、棟端に鬼瓦を据える。

**大面取の意匠** 出土柱根から母屋の柱は、大面取角柱であることが判明したが、奈良時代の遺構には類例がない。また柱を大面取したことにより、意匠上、他の部材の扱いにも検討を要した。

大面取柱における面の幅は、一般に時代が降るほど小さくなるが、現存最古の大面取角柱の遺構である平等院鳳凰堂裳階では柱幅に対して約1/6の面をとる。東院庭園出土の大面取角柱の1/4強という値は、これに先行する奈良時代の比率と位置付けることができるだろう。

また東院庭園南方の第200次調査では、平城京左京三条二坊の二条大路東西溝SD5100の天平年間前半の廐窓扇から、面を取った斗のミニチュア部材が出土している。これは縮尺1/10程の建築模型部材と考えられ、奈良時代に大面取の意匠をもつ建物が存在した可能性を裏付ける遺物である。復原案では、柱以外の部材の面取は、鳳凰堂裳階の細部に大幅倣った。すなわち丸桁・母屋桁・棟木・虹梁・大斗は四方を大面取、肘木・地垂木・飛檻垂木は下面のみを大面取とした。また縁の高欄の架木は、縁東が八角柱であることから、八角形断面とした。

面取斗ミニチュア部材 実測図・復原図  
平城京左京三条二坊 二条大路東西溝SD5100出土

(長尾 充)

中央建物梁間断面図 (1:200)

中央建物東立面図 (1:200)

中央建物桁行断面図  
(部分) (1:150)

中央建物南立面図 (1:200)

## 第一次大極殿復原模型(1/10)の設計

平城宮跡発掘調査部・建造物研究室

1993年度は、100分の1スケールで第一次大極殿院全体の模型を作製したが、1994年度は、大極殿本体の10分の1スケールの模型を設計した。まず、1994年7月6日および8月5日の2度にわたり、坪井清足、伊藤延男、岡田英男、濱島正士の4氏を委員とする平城宮跡復原建物設計専門委員会を開催し、1/10大極殿模型設計の基本方針について議論した。完成した1/100模型をたたき台としつつ、大極殿本体の意匠・構造の再検討をおこなったのである。この2回の専門委員会では、とくに大極殿上層(2階)のヴォリュームと意匠に論点が集中した。復原朱雀門や大極殿院閑門の立面と比較すればあきらかだが、1/100大極殿模型の上層は、初層に対してずいぶん小さく見える。また、開口部では、連子窓の占める面積が大きく、意匠が繊細すぎるため、全体として非常に窮屈な印象を与えている。この2点が委員会に出席した委員および所員のはば共通した感想であり、1/10模型の設計にあたっては、以下のような修正をくわえることになった。

①1/100大極殿模型では、上層を初層入側柱筋から1支(1尺)分だけ外にだし、桁行9間(12尺+13尺+14尺+15尺×3+14尺+13尺+12尺)、梁間3間(12尺+16尺+12尺)とした。1/10模型でも、桁行9間×梁間3間の上層平面は踏襲するが、隅柱をさらに1支分外にだして、上層全体のヴォリュームを、わずかではあるが、大きくする(これ以上大きくすると、構造上の問題が生じる)。

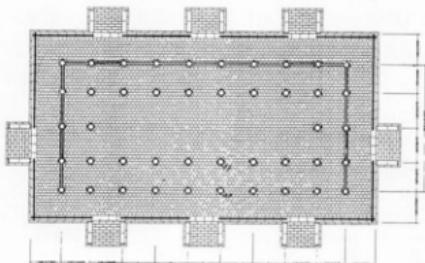


図1 第一次大極殿初層平面図(1:800)

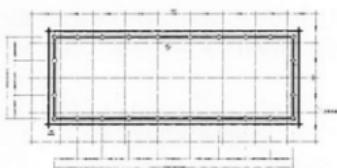


図2 第一次大極殿上層平面図(1:800)

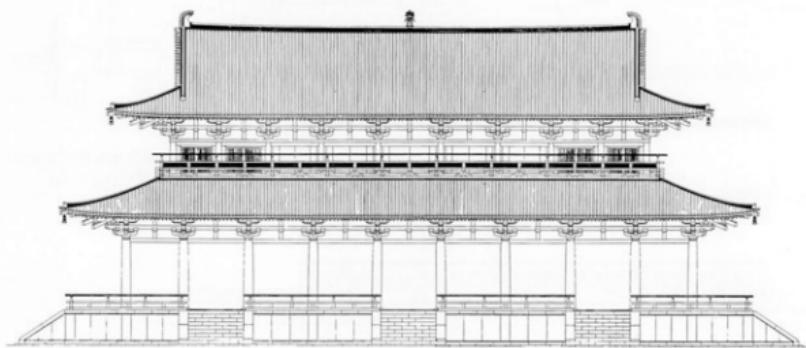


図3 第一次大極殿正面図(1:400)

②これにより、上層の平面は桁行・梁行とも総長が2尺ずつ増すわけだが、この変化には桁行・梁行いずれも中央間を2尺ひろくとすることで対応する。すなわち、桁行の柱間は12尺+13尺+14尺+15尺+17尺+15尺+14尺+13尺+12尺、梁行の柱間は12尺+18尺+12尺とする。

③1/100大極殿模型では上層正面開口部9間のうち、両端3間ずつの計6間を連子窓としているが、1/10模型では両端2間ずつの計4間のみを連子窓とし、他を開き戸とする。

以上の3点が、1/10大極殿模型設計にあたっての基本的な修正方針である。この方針に基づき、1/100大極殿模型の設計を担当した松田敏行氏に、ひきつづき1/10大極殿模型の設計を依頼した。その後、設計を進めるなかで、3度の復原設計小部会をひらき、鈴木嘉吉・岡田英男両氏の指導のもとに、細部の修正をくりかえし、1994年度末までにまとまったのが図示した設計案である。すでに模型の製作ははじまっているが、製作の過程において、さらに細部の微修正をはかり、1995年度末に模型は完成する予定である。なお、復原設計の基準寸法は、1/100大極殿院模型とおなじく、1尺=29.54cmとした。

(浅川滋男)

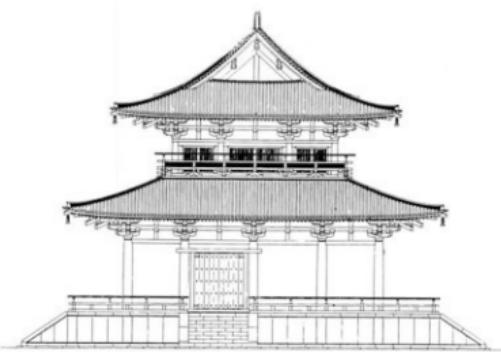


図4 第一次大極殿側面図（1:400）

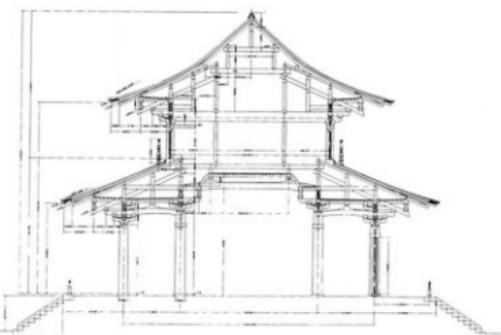


図5 第一次大極殿梁行断面図（1:400）

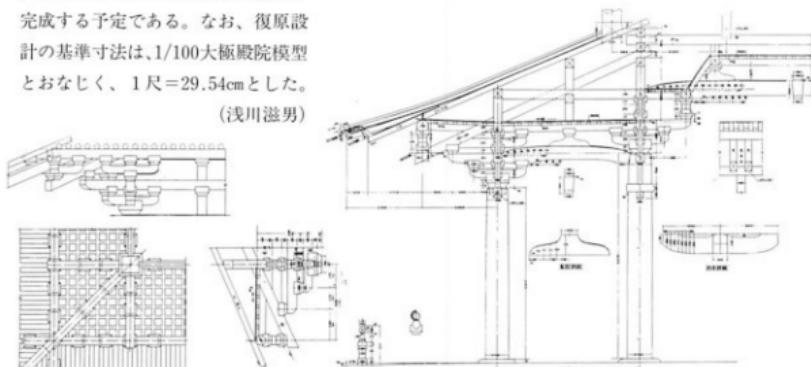


図6 第一次大極殿詳細図（左：軒まわり、右：初層主要部）（1:160）

## 1994年度平城宮跡・平城京跡出土木簡

### 平城宮跡発掘調査部

1994年度の調査では、平城宮跡調査の1カ所と平城京跡の1カ所から、計875点の木簡が出土した。概要是『平城宮発掘調査出土木簡概報』(31)で報告するので、ここでは主要なもののみを報告する。小字門および東一坊大路(第248-13次調査) 小字門南の東一坊大路西側溝から17点(うち削屑14点)、二条大路南側溝の東一坊大路東側溝との合流点付近から1点出土した。

平城京左京七条一坊十六坪(第252・253次調査) 平城京左京七条一坊十六坪の調査で木簡が出土したのは、六条大路北側溝と東一坊大路西側溝である。六条大路北側溝からは3点出土した。一方、東一坊大路西側溝では奈良時代の堆積層から、木簡が総計854点(うち削屑496点)出土した。木簡に記された年紀は、天平2年から宝亀7年にわたる。その他「道」字の木印があるが、捺すと左文字。

木簡の中には、官司関係のものが多く、「皇后宮職解」(5)や、中務省から衛門府に宛てた移(6)、「諸司」からの文書を貼り継いだ巻子に用いられた題籤軸(9)などがある。また衛門府(6)(7)(8)や右兵衛府など、衛府にかかわるもののが目立つ。

(6)は門の警備にあたる「列」の歴名であるが、「中大伴門」の門号は注目される。弘仁陰陽寮式土牛条逸文に見える「大伴門」は、朱雀門に相当する。したがって「中大伴門」は朱雀門に関連し、平城宮内の門の門号とみられるが、「中」から想起されるのが、『続日本紀』天平神護2年5月戊午条の「中壬生門」である。この門が壬生門なのか、その一つ内側の門か説が分かれますが、類例の出現により、「中+宮城門」という形で、宮城門の内側にある中門(養老令では宮門)相当門を表す可能性が強くなつたであろう。そうであれば「中大伴門」は朱雀門の北側の、第一次朝堂院南門にあたる。こう推定できれば、平安宮では朱雀門の北側にあたる朝集殿院南門が、大伴門から派生した「応天門」という名で呼ばれるようになることも、より理解しやすくなつた。そして中門の警護は衛門府と衛士府が担当したから(宮衛令集解宮閣門条所引古記説)、「中大伴門」を守る「三龍列」は門部ないしは衛士であろう。同木簡に見える「曾雅門」については、蘇我氏との関連が想起されるが不詳。

(2)から(5)までは、ほぼ同形の2点分の琴形に墨書のあるものである。(2)と(3)が上板で、(4)と(5)は底板。(2)(3)はともに下端にのみ、目玉状の丸を墨で描いた部分が残存するが、本来は上端にもあり、底板から斜めに立ち上がり、前後の側板となっていたとみられる。これらとは別に逆台形の左右の側板が出土しており、鋸歯状模様を墨線で描く。それらを組み合わせると、船のような形になる。そうすると(2)(3)下端の墨円は、舳先ないしは舳部分に描かれていることになるが、『吉備大臣入唐絵巻』に見える吉備真備の乗る遣唐使船の舳先には、眼が描かれている。二つの墨円はそれに類似するが、墨円部分を折り曲げるために(5)に刃でつけた筋の跡からすると、文字や墨円は内側になる可能性がある。

なお(2)(3)(5)の墨書は内容的に習書であるが、共通する字がある。また(2)は他の習書とは趣を異にするが、四点ともに同筆・同材とみられる。いずれの文字も、琴形の板の中に上下はおさまり、左右もほぼおさまるが、(2)の右端にある墨付きは、(2)の三字目の「道」のしんにょうの左下に続くものとみられることからすると、少なくとも(2)と(5)は、字を書いてから板を切ったことになる。祭祀に用いたとみられる琴形に文字、それも多くの習書を記した意味はわからない。

このように内容的に注目される木簡が多いが、大路の側溝から出土したことから、これらを一括史料として扱えるか、また廃棄場所はどこかという問題が残る。平安京では、京内に左右衛門府町・左右兵衛府町などがあったことからすると、平城京内の同種の施設からの廃棄、あるいは側溝上流にあたる平城宮からの廃棄という可能性も考えられよう。

(館野和己)



## 「ロマンティア藤原京'95」に伴う特別展示

### 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

藤原京遷都1300年を記念する橿原市主催の「ロマンティア藤原京'95」博が、1995年3月29日から5月21日までの54日間、藤原宮大極殿跡周辺を主会場として開催された。期間中、天候不順によりたびたび降雨にみまわれたものの、目標の35万人を大きく超える約63万人の入場者があった。藤原宮・京跡の発掘調査にたずさわる当調査部においても、これまでの調査研究の成果を広く一般に公開し、特別史跡藤原宮跡の顕彰をはかる好機ととらえ、協賛特別展の開催や藤原京1000分の1復元模型（橿原市製作）の監修などで、このイベントに参加協力した。以下、特別展の概要を紹介する。

当調査部では、従来より資料室を設け、藤原宮・京関係の調査成果を公開展示してきたところである。今回はこれに加え、最新の発掘データーを駆使して、さまざまな角度から藤原京の実像に迫ろうと、特別展「1300年前の首都・これが藤原京だ！」を企画した。会場には、講堂を一部臨時に改造し、これに当てる所とした。

展示にあたっては、会場の中央に「藤原宮南面中門（朱雀門）10分の1復元模型」を置き、その周囲に以下の11のコーナーを設けた。①南面中門の復原、②初めての都作り、③都の大きさをくらべる、④藤原京のモデル、⑤藤原京のひろがり、⑥条坊と人びとの暮らし、⑦藤原宮・京を平城宮・京とくらべる、⑧都に咲いた二つの蓮一薬師寺と大官大寺一、⑨都市問題の始まりートイレはどこだ!、⑩都のハイテク技術、⑪死後のすみか、がそれである。今回の展示では、とくに常設展示において説明が不足している「中国都城との比較」や「藤原京の範囲」「トイレ遺構の調査」「金属・漆・ガラスの加工技術」「埋葬地」などについて、最新の研究成果を重点的に紹介するよう努めた。

展示品の中心となる「藤原宮南面中門10分の1復元模型」は平城宮朱雀門の復原模型を利用し、建物本体はそのままに、門の両脇にとりつく築地塀を一本柱の土塀に作り替え、藤原宮の宮城門とした。そのほか「藤原京跡出土の土器・富本銭・木簡・土馬」「本薬師寺・大官大寺出土の軒瓦・飾り金具類」「藤原京右京七条一坊トイレ遺構の土層はぎ取り」「飛鳥池遺跡のガラス・金属・漆工房関係出土品」「咸奈大村骨蔵器（模造）」などを展示し、あわせて特別展の解説パンフレットを刊行した。なお期間中、延べ30,131人の入館者（大会本部調べ）があった。

（黒崎直）



南面中門復元模型の展示

## 飛鳥資料館の特別展示

飛鳥資料館

飛鳥地域では、さまざまな形でほとんど一年中どこかで考古学の発掘調査がおこなわれている。村の文化財保存課の手によるもの、県の橿原考古学研究所が担当するもの、奈良国立文化財研究所の実施するものと、調査を担当する機関もいろいろある。

新聞記事を丹念に読んでいれば、発掘の概要が伝えられている場合も多いが、実際に調査中の遺跡をすべて見てまわるのは、専門家にとってさえ容易なわざではない。また遺跡の持つ意味が、何度かの発掘調査をくりかえし、調査の図面、写真、遺物の整理がすすんで、ようやくはっきりとしてくるというような場合もすくなくはない。

過去一年あるいは数年間の発掘をふりかえって、調査の概要と調査の結果わかってきたことを分かりやすくまとめて一覧可能な形で紹介することも、地域の資料館に求められる大切な役割の一つといえるだろう。

当資料館は1993年6月からの増築・改装工事のため、これまで定期的に開いていた春、秋の特別展も取り止めとなっていた。1994年7月に建物自体は完成をみたが、コンクリート部分はまだ十分に乾燥しきっておらず本格的な使用にはもうしばらくの時間がかかり、展示ケースなど内部施設も整っていない。しかし将来の特別展の方向を考える上で、まず新展示室の機能を確認しておく必要もあり、小規模な秋の企画展を試みた。飛鳥地域で発掘を担当している各機関の協力を得て、明日香村、そして橿原市的一部で最近調査がおこなわれていた主要な遺跡を写真・図面を中心に紹介し、関連遺物も可能な範囲で展示した。今回の展示で取り上げた遺跡は、飛鳥寺、坂田寺、本薬師寺、奥山久米寺、豊浦寺、伝板蓋宮、酒船石周辺遺跡、西橋遺跡、石神遺跡、雷丘東方遺跡、雷丘北方遺跡、山田道周辺遺跡である。

(岩本圭輔)



## 平城宮第一次大極殿院地区復原整備のための基礎調査

### 平城宮跡発掘調査部

1989年度から進めてきた基礎調査の最終年度（6年目）であり、これまでの調査の取りまとめにあたる作業をおこなった。本調査の目的は、第一次大極殿院地区の復原整備計画を立案する上で必要となる基礎的な調査をおこない、資料を集めるとともに復原計画に伴う問題点を検討することにある。調査内容は二つの柱からなる。

第一は、遺構から復原できる建物の位置・規模・構造・意匠を推定し、検討を加え、より制度の高い復原案を作り上げる作業である。第二は、第一次大極殿院を復原するために解決しなければならない問題と、復原した後に生じる問題を予測し、その対応策を検討する作業である。

第一の作業では、1993年度に第一次大極殿院全体の1/100模型を製作し、検討を加えたのに続き、今年度と次1995年度の二ヶ年をかけて大極殿建物の1/10模型を製作するとともに、実施案の前提となる詳細な検討をおこなっている。

第二の作業はさらに二つに分かれる。その一は、復原する第一次大極殿院建物群の及ぼす景観上の影響をコンピューターグラフィックスを用いて分析するために1993年度に実施した復原建物の入力データを利用してアニメーションを作成した。その二は、1978年度に策定した「平城宮跡保存整備構想」のなかに第一次大極殿院の復原を位置づけ、公開・管理・運営上の問題点、および事業プログラム（案）についての検討をおこない、報告書としてまとめた。

（高瀬要一）

**アニメーションの作成** 昨年度の成果である第一次大極殿院復原建物の詳細なデータを活用して、放映時間6分10秒の「再現・平城宮大極殿」と題したCGアニメーションを作成した。アニメーションの製作にあたっては、第一次大極殿院が主になるものとはいえ、平城宮における位置関係などがわかるように、今年度、新たに朱雀門・第一次朝堂院地区などのデータも加え、和銅遷都時の中枢部の様子を再現した。往時の臨場感が再現できるように、人の目の高さを念頭に置いた構成とともに、一部平城宮の現況を交えることにより現地とのつながりをもたらした。また、現地の実写に復原大極殿を重ねたり、部材が組み上がっていく様子も映像化した。

このように、これまでの調査で蓄積された詳細なデータは、復原建物の検討材料になる一方で、実写と組みあわせることにより、様々な地点からの復原建物の見え方を視覚的に捉えることを可能にするものである。

（小林謙一）

## 平城宮跡・藤原宮跡の整備

庶務部・平城宮跡発掘調査部・建造物研究室

**朱雀門復原整備** 朱雀門は昨年度から復原工事を開始し、昨年度において、素屋根、資材保管棟、木材保管庫などの仮設物の建設を完了し、また、全体量の約7割の木本材を購入した。化粧材は内地産檜、野物はヒバ、桺などである。

今年度においては、残りの木材を購入するとともに、木材の加工・組立に着手した。表面の仕上げは奈良時代の工法であるヤリガンナ仕上げとした。12月3日には立柱式のはこびとなり、年度末までに初重の柱18本が立った。また、初重の組物の加工を終えた。  
(村田健一)

**遊水池・水路の整備** 東院の整備に関連して、遊水池と水路の整備を行った。これらは、平成5年度の委託調査「第一次大極殿院地区復原整備のための基礎調査その2(水路・水系調査)」の成果に基づいて実施したものである。遊水池は、第二次朝堂院地区と東院地区の間に、南北に二段連続するかたちで造成した。最大貯水量は、北の遊水池が約3400m<sup>3</sup>、南が約3600m<sup>3</sup>である。また、水路については、小子部門の北方から門の西および南を通ってさらに宮南部の東辺を近鉄線までまっすぐ伸びる既存水路の線形改良・水路幅改良などの改修を実施した。これにより、常態的に見られた小子部門付近の溢水状況が解消したほか、降雨時に右岸に溢水していた小子部門以南の水路の状況も改善された。さらに、近鉄線以南の宮東辺でも水路の改修を行った。  
(小野健吉)

**造酒司井戸および東駐車場の整備** 遺構展示館は現在のところ平城宮跡の東側の利用拠点となっており、この東に隣接する東駐車場は遺構展示館等周辺施設へのエントランスのみならず、整備中の東院庭園地区への導入路としても機能する重要な施設である。ここは造酒司跡を中心とした区域で、造酒司の区画を表示するために南側および西側の築地堀跡を歩行者・自転車用通路とし自然色舗装を施した。区域の中央部南北に東院庭園地区に向かうための宮内道路幅員6.0mを設けた。道路心は再検討がなされた小子門心の国土方眼座標系に合わせ、道路の構造は自動車交通の可能なものとし自然色舗装を施した。この道路の両側には乗用車で8~24台駐車可能な区画を設けインターロッキング舗装を施し、その周囲には植栽帯を配した。これは駐車場用の舗装面が広がることを避け、植栽により景観を和らげることを目的としたものであり、南に下がる地形の高低差をこの植栽帯で解消した。第241次調査で検出した六角形の井戸屋形を伴うと考えられている石数の井戸およびそれに伴う石組排水溝についてはレプリカを制作していたが、これを埋め戻した遺構上に設置して、展示することになり、レプリカの退色と劣化を避けるため、遺構の井戸屋形と相似形の柱配置をもつ六角形の覆屋(鉄骨平屋建、建築面積約176m<sup>2</sup>)を建設した。屋根頂部にトップライトを設けたが、夜間景観にも配慮し、柱の最上部には天井を照らす間接照明器具を施し、見学用デッキの床下にはレプリカを照らす照明器具も設けた。また、覆屋と遺構展示館をつなぐ歩道を設けた。この区域全体での駐車可能台数は115台で、今年度施工分は覆屋の南まで約3.600m<sup>2</sup>であった。  
(内田和伸)

### 東院庭園の復原建物

平城宮跡東院庭園地区の復原整備では、建物の復原が計画されている。平成6年度には、平成5年度工事分の東面大垣、南面大垣、南門、北東建物が竣工し、中央建物の復原設計をおこなった。中央建物の復原検討については別項とし、以下に竣工建物の概要を記す。

**南面大垣** 東院地区の南を限る築地大垣である。小子門東から東院南東隅まで約200m分の復原が計画されているが、平成6年度は小子門東から里道敷地まで69m、6mの里道敷地をはさんで東院南門まで27m、南門から東43mの合計139mが竣工した。築地は基底幅が2.7m（9尺）、高さが3.5mで、東下がりの敷地にしたがって勾配を持つ。構造は既存の復原大垣と同様に築地が鉄骨造、桁以上の小屋組が木造である。築地は鉄骨の骨組みに竹木舞下地を施し、土壁中塗仕上げで版築の表現とした。屋根勾配は4.5/10で、軒の出は大垣心から2.5m（8.5尺）、棟高は5.6mである。屋根瓦は軒丸瓦6308B、軒平瓦6663Aを復原、模造して用いた。

**穴門** 南面大垣の南門東に開く小門である。間口は4.5mで、築地高さ3.5mに対して、3.1mを開口とし、門の上にも積土を持つ構造とした。門柱は直径42cm（1.4尺）、内法高は2.5m（8.5尺）で、幅1.4m（4.8尺）の扉2枚を建て込む。

**南門** 第243・245-1次調査で検出されたSB16000Cである（年報1993）。桁行5間、梁間2間で、柱間は桁行中央が13尺、両端間と梁間は10尺である。これを五間三戸の單層切妻造の門に復原した。造営基準尺は1尺=30.0cmとして設計した。基壇は東西20.4m、南北9.3m、基壇高さは門内外の造成地盤高の差により北側で約60cm、南側で80cmである。柱の高さは4.0m（13.3尺）、直径48cm（1.6尺）、軒高4.5m、棟高7.2mである。小屋組は三棟造で妻飾は二重虹梁幕股とする。組物は平三斗で、軒は二軒、出が7.2尺である。各部材の寸法は、法隆寺東大門の比例を参照した。屋根瓦は軒丸瓦6133D、軒平瓦6704A、鬼瓦VIAを復原、模造して用いた。

**東面大垣** 東院地区の東を限る大垣である。整備計画115mのうち、平成6年度は北端から84m分が竣工した。第245-2次調査で、築地の基底幅は9尺、東外側に4尺の大走りと東雨落溝が検出されている。構造および復原寸法は、南面大垣とまったく同じである。敷地の南下がり勾配は、築地基底と屋根の2段階で調整した。

**北東建物** 第110次調査で検出されたSB9081である（年報1979）。桁行3間、梁間2間の礎石建、瓦葺の東西棟である。柱間寸法は桁行が11尺、梁間が10尺、復原造営基準尺は1尺=29.6cmである。円柱座付の礎石が出土しており、その円柱座径から柱の底径は1.4尺に復原した。柱高さは3.3m（11尺）で、軒高3.5m、棟高6.6mである。構造と寸法は法隆寺食堂を参照して復原を試みた。園池の北に建つ亭的な性格の建物であったとの解釈から、東西の妻面のみを壁とし、南北を吹き放しとした。小屋組は妻を二重虹梁幕股、内部を又首組とした。組物は大斗肘木で、軒は二軒、出が5.7尺である。屋根瓦は軒丸瓦6282B、軒平瓦6721C、鬼瓦VAを復原、模造して用いた。

**構造補強** 南門および北東建物では、柱足元と壁体、屋根面に構造補強を施している。

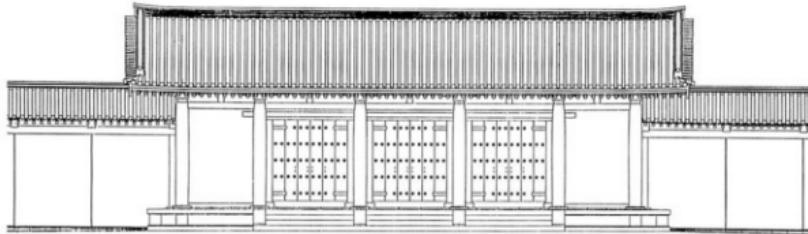
柱足元の補強には、鉄筋コンクリート基礎上に立てた高さ1.1mのステンレスアンカー（幅8cm）を用いた。これを、礎石を貫通して柱に70cm差し込み、柱側面からボルトを差し通して固定している。

壁体の補強には、木質系積層壁とステンレスパネル補強の2種の手法を試みた。木質系積層壁は、各柱間の地覆と頑貫のあいだに木製枠を組み入れ、60cmピッチの格子に厚板を落し込む。厚板は左右を格子に実じゃくり、上下をダボで締ぐ。またステンレスパネル補強は、木質系積層壁と同様の木製格子に、角盆形のステンレスパネルをはめ込み、四辺を釘止めする。いずれもこの上に、ラス下地をはり、下地モルタルにしつくい塗で仕上げた。木質系積層壁は南門の両妻壁、ステンレスパネル補強

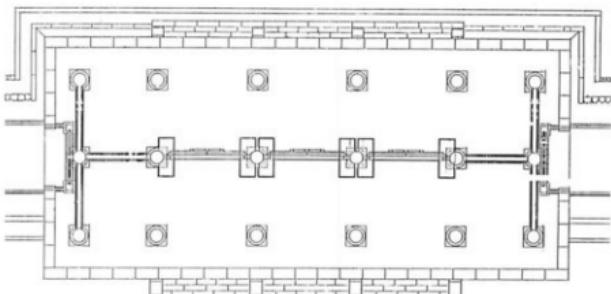
は南門の棟通り両端間と北東建物の妻壁・小壁に用いている。

屋根面の補強は、裏板と野地板の間に鉄骨フレームを挿入した。フレームは棟木と柱通りの母屋桁の位置で支持している。この鉄骨は桔木の役割を果たし、水平力に耐えるとともに、軒の垂れに抵抗する。

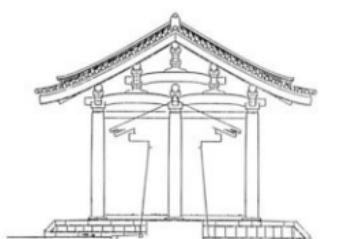
(長尾 充)



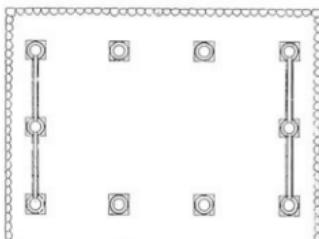
南門正面図 1:200



南門平面図 1:200



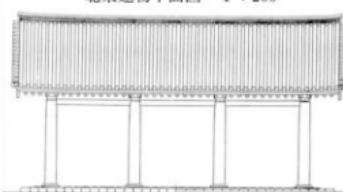
南門側立面図 1:200



北東建物平面図 1:200



北東建物側立面図 1:200



北東建物正・背立面図 1:200

## 調査研究彙報および公開講演会

**重要文化財建造物の継手・仕口資料の整理及び活用のための研究** 昭和30年代に文化財保護委員会(現文化庁)建造物課が重要文化財建造物の継手・仕口の資料(写真及び図面)を全国規模で収集している。昭和61年に財團法人文化財建造物保存技術協会がこれを整理し、「文化財建造物伝統技法集成—継手及び仕口一」を発行している。しかし、その後、保存修理に伴う調査によって新たに多くの資料が作成されたが、組織的な資料収集もなく今日に至っている。継手・仕口の資料はわが国の建築技術の歴史を知る上でも極めて重要なものであり、常にその整備に努めるべきである。

今後、文化庁等関係機関と協議しながら資料の収集、整備、活用を組織的に行う予定であるが、本年はその準備として既存の資料の目録を作成するとともにデータベースを構築した。  
(村田健一)

**鳥取県橋津の藩倉に関する調査** 1995年3月6日から8日までの3日間、鳥取県羽合町教育委員会の依頼により、橋津に残る池田藩時代の藩倉を実測調査した。橋津の藩倉は、池田光仲が岡山から因幡・伯耆両国に移封された寛永9年には、すでに存在していた可能性が大きく、文化5年の絵図には、15棟の大倉庫が描かれている。今回の調査は、天保14年の棟札が残る「古御蔵」(現在は梨組合の倉庫)を中心とするものだが、ほかにも絵図にみえる「三十間毫、武、三」および「片山」の一部が、それぞれ個人所有の倉庫および農協倉庫に転用されていることが判明した。このような城外の交通要衝の地に設けられた集中式倉庫群は、橋津のほか、秋田市、盛岡市、熊本市などのほんのわずかな地域にしか残っていない。このなかで、棟札を残すのは橋津の「古御蔵」のみであり、その史料価値はきわめて高いといえよう。この調査成果については、すでに日本建築学会大会で発表し、正式な報告書も1995年内に公刊する予定である。  
(浅川滋男)

**名勝旧大乗院庭園の整備** 今年度から国庫補助を受けて始まった名勝旧大乗院庭園の整備事業の事業主体である管理団体、即日本ナショナルトラストの依頼を受け、整備方針の策定をおこなった。また、今年度の事業として旧大乗院の縮尺1/500の地図の編集・庭園部分の1/100実測図作成協力などをおこなった。次年度からは、大乗院庭園の本格的な発掘調査が実施されるとともに、調査成果に則って主として江戸時代の庭園遺構の整備が順次実施される予定である。  
(加藤允彦)

**薬師寺典籍文書調査** 東大史料編纂所との共同調査で、第22、25~27函の整理分類・調書作成と、第20函の写真撮影を行った。うち第22函については調書作成を完了し、それ以外は作業を継続中である。調査終了分からDB化し、現在第11函以降を入力中である。94年7月。  
(綾村、佃、寺崎、渡辺)

**醍醐寺文書調査** 醍醐寺文書の写真撮影を継続中であるが、今年度分としては第18函につき行った。94年8月。  
(綾村 宏、佃 幹雄、寺崎保広)

**留守家文書の調査** 東京国立博物館文化庁分室において新指定の留守家文書の写真撮影を行った。94年3月。  
(綾村 宏、佃 幹雄)

**その他の文書調査** 文化庁美術工芸課の依頼により西大寺版板木の調査に協力(94年10月)、滋賀県教育委員会の依頼により永源寺文書調査に指導協力、京都府教育委員会の依頼により興聖寺一切教調査に協力、静岡県教育委員会の依頼により清見寺歴史資料調査に協力した。  
(歴史研究室)

**山田寺の整備** 文化庁の支出委任を受けて平成5年度から実施している特別史跡山田寺跡の整備事業は、造構保護盛土工事のはか、法面保護張芝・排水工・吉野川分水の移設工などの基礎的な土木工事をおこなった。これらの工事の実施に当たって必要な設計条件を決定するために、発掘調査を実施するとともに、これまでの発掘調査成果を分析し整備方針の検討をおこなった。  
(加藤允彦)

**式部省と兵部省の構造** 平城宮の南面東門である壬生門に入った北側の一帯は、1985年度から継続的に発掘調査を実施し、奈良時代後半には、東に式部省、西に兵部省が対称的に配置されたことが判明している。そうした発掘成果に基づき、両省の建物配置や構造的な特質について整理するとともに、新たに生じた問題点や未解決の課題を紹介した。両省の構造は基本的に共通しており、広場を囲んで正殿など五棟がコの字形に並ぶ開放的な南区と、並立する三棟が相互に区画された、閉鎖的な北区からなる。建物は、全て礎石建ちである。しかし、建物規模は、概して式部省の方が大きく、基壇外装や床構造にも違いがみられる。これらが、両省の機能・格式や実際の利用形態とどう関わっていたのか、また、奈良時代前半の前身官衙との関係、とくに兵部省の位置や構造がどうであったのか、今後解明する必要がある。ともあれ、こうした省クラスの中央官庁の全貌が判明した意義は大きく、とくに平城宮の官衙としては、初めて左右対称の均整な配置を確認した点が特筆される。  
（小澤 毅）

**式部省・兵部省対等化への道** 平城宮の式部省と兵部省が、壬生門内の東西に対象の官衙として配置されるのは、奈良時代後半のことである。これは、式部省：文官担当、兵部省：武官担当として、両省が令の規定通りに官人の人事を分掌するようになるのが、奈良時代中葉まで下ることと符号する。それ以前は両省はけっして対等ではなく、人事は基本的に式部省が掌握していた。奈良時代前半は、兵部省の武官の人事権が確立し両省が対等化していく過渡期であり、その過程を勤務評定制度の確立過程とも関連づけながら概観し、発掘調査の成果を史料的に位置づけた。奈良時代前半における式部省の格付けの高さは、平城宮遷都以来永く式部卿を務めた長屋王の存在とともに密接に関わり、長屋王が式部卿を辞した頃から式部省の権限の縮小が図られ、式部卿と兵部卿を藤原宇合・麻呂の兄弟で分掌した長屋王没後の天平初期に至って初めて、両省は対等の官司としての位置づけを得た。745年の平城遷都後とされる壬生門北側における両省の新築との時間的すれば今後の検討課題である。（渡辺晃宏）

**日本庭園の近代** 一京都・庭と画家とのかかわりを中心に— 明治時代に登場した写実的風景式庭園は、近世以前の日本庭園とは一線を画するものであった。写意性を排し、写実的にかつ実物大で庭景を作り上げるその手法には、ヨーロッパの風景式庭園の影響もかいま見られるが、単なる模倣に終わらず日本庭園の新しいタイプとして成立したのは、日本の庭園文化・技術の蓄積によるものであるといえよう。本講演では、写実的風景式庭園の京都における嚆矢というべき無隣庵庭園（山縣有朋別邸）のデザイン上の特色を要約するとともに、施工を担当したそのデザインの本質を吸収した小川治兵衛（植治）が、その後この新タイプの庭園の展開に果たした役割を指摘した。また、畠中庵（竹内栢鳳別邸）、芦花浅水荘（山本春擧別邸）など、画家による明治・大正時代の京都周辺の庭園を取り上げ、これらがおおむね写実的風景式庭園の系譜上にあるとともに同時代の庭園デザインに少なからず影響を与えたことを指摘した。  
（小野健吉）

**考古資料の視覚化** 物理学や工学での視覚化は、極短・極長時間、極小・極大規模の直接観察が困難な現象をわかりやすく提示することに意義がある。基礎となる少数の法則を厳密に適用した非経験的計算によって実際の現象を再現・表現し結果をわかりやすく視覚化して、理論の再検討や修正を可能としている。一般的な記述を図で表現することも視覚化である。CG・CADは古代遺跡景観の復元などの分野で考古学に応用されつつあるが、価格や習熟期間に問題があり、非経験的手法の利用には至っていない。また、通常の整理作業一環の道具としての視覚化も求められている。データ・データベースの視覚化により現実存在をわかりやすく提示し、さらに進んで考古現実への創成への方向性を探る必要がある。はじめは外挿により復元されていた世界がしたいに具体的なデータによって正しい方向へ修正されていく。そのためには計算機内に実現する個々の事物の生成エンジンを構築し、各要素の働き、複合の仕方などを詳しく分析・検討し理論づけが必須と指摘した。  
（森本 晋）

# 飛鳥地域の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1994年度には、飛鳥地域で水落遺跡・山田寺・川原寺・橘寺・山田道・甘檜丘東麓など7件の調査を実施した（調査一覧参照）。以下、このうち水落遺跡・山田寺・川原寺・甘檜丘東麓の調査概要を報告する。

## 1 水落遺跡の調査（第7次）

緩斜面を貼石で化粧した特異な正方形基壇建物SB200を中心とする水落遺跡は、1972年に発見され、1976年に国史跡に指定された。1981～86年の史跡整備とともに2～6次調査の結果、SB200は地下に礎石を埋設した4間四方の純柱建物で、建物の中央には漆塗木箱をのせた台石を据え、これを中心に基壇内に敷設した木樋暗渠による導・排水施設をもつことが明らかになった。すなわち、東方から導水した水の一部をラッパ状銅管で給水し、利用した水は木箱を経て、再び木樋暗渠で西方に排水。余水は木箱を迂回した木樋暗渠で北方へ排水する。また、建物の中央からは、木樋とは別に小銅管が北へ延びる。地下の礎石は相互に列石で固定され、微動だにしない上部構造が想定される。SB200の北と南には、同様の基壇化粧をもつ長大な掘立柱建物（SB180・280）があり、全体が一つの掘込地業内に造成されている。以上のような外観・構造・機能の特徴および出土土器の年代観から、水落遺跡は中大兄皇子が齊明天皇6（660）年に建てた漏刻台と判明した。

水落遺跡は『日本書紀』に散見する飛鳥寺西方の榎木広場の西北を占める。飛鳥寺西方では小規模な調査が何度かなされ、飛鳥川に向けて下降する緩斜面に、階段状に石敷広場が展開すると推定できる。しかし、調査は断片的で全貌解明には至っていない。

一方、水落遺跡の北に接して石神遺跡がある。1981年から昨年度まで継続的に実施した石神遺跡の調査は総面積約12000m<sup>2</sup>に達し、飛鳥寺の西北方において、長大な掘立柱建物と周囲の石敷・石組溝などで構成される遺構群が、7世紀を通して展開することが明らかになった。遺構はA・B・C・Dの4時期に大別され、最も整備されたA-3期（齐明朝）には、長大な掘立柱建物で囲んだ長方形区画が東西に整然と並び、西区画では南3分の1の位置に正殿（四面庇付建物SB1900）を置く。南限は飛鳥寺寺域北限堀の北約11mの位置で平行する東西堀で水落遺跡と区画するが、水落遺跡から北に延びる木樋の通過点では堀がとぎれて通路となっていることなどから、少なくともA-3期には、両遺跡が密接な関連をもっていたことがわかる。

以上の成果を踏まえ、飛鳥幼稚園敷地の調査終了を期に、石神遺跡の調査を中断。本年度からは水落遺跡の史跡指定地周辺から南へ調査を進め、飛鳥寺西方地域全体のなかで水落・石神両遺跡の性格を検討することとなった。調査地は史跡指定地の東南にある南北に長い水田で、約1900m<sup>2</sup>の敷地を3年度に分けて調査する予定である。本年度は敷地の北端に南北20m、東西30mの調査区を設定した。検出した遺構には、弥生時代の土坑・古墳時代の竪穴住居・7世紀の掘立柱建物・石組溝・掘込地業・木樋暗渠・石敷・平安時代の井戸・土坑・小柱穴・素掘溝などがある。以下、7世紀代の遺構を中心に概述する。

**遺構** 水落遺跡の遺構はSB200の時期（A期）と、それを埋め立てた後の時期（B期）とに大別できるが、本調査区では、SB200などを包括する掘込地業に先行する南北石組溝SD3400を検出した。幅0.6m、深さ0.25mで、人頭大の玉石を1～2段に積んで側石とする。底には灰色砂が堆積し、A期の遺構SD3409・SD3410・SK3406で壊されている。造営方位は北で東に約40°傾く。

A期の遺構を包括する掘込地業は、第4次調査で検出した南端の東延長部分と、SB200の南北中軸線から東22.8mの位置で東端SX3430とを確認した。古墳時代の土器を含む自然河川状の砂質土・砂礫土を深さ2.1m掘り込んで、底から砂礫土・砂質土・粘質土を互層に積み上げる。南端の掘り込みは、深さ1mほどで、小さな段のある二段掘りであったが、今回検出した東端は急傾斜で底に至る。掘込地業の東南隅はSD3410と重なっているが、南端もSB200の東西中軸から22.8m南にあるので、地業は正方形であった可能性が高い。地業土の最上層は掘り込み外縁の外に延びて、厚さ20cmの整地土となる。整地土上面は、西の掘立柱建物SB180の床面とほぼ同じ高さにある。

掘込地業の東南隅に建てられた掘立柱建物SB3440は、柱穴 4 個を検出した。完掘した東南隅の柱掘形は一辺 1.5m、深さ 2.0m で、褐色粘質土と灰色砂質土の互層で埋める。掘形底には方 60cm、高さ 50cm の花崗岩切石が据わり、黄色粘土で埋めた柱抜取穴が切石の中央上面まで及ぶ。柱間は東西 1.9m、南北 2.0m 弱で、従前の調査で SB180 の東に想定した SB240 と南側柱筋は揃うが、南北方向の柱間が一致せず、別の建物配置を復元せざるを得ない。つまり、SB240 の西妻と想定した柱穴 3 個は、SB180 の東庇と見るべきで、その東に 3 間 × 3 間あるいは 2 間 × 2 間の総柱建物 SB3440 が復元できる。

斜行石組溝SD3410は、掘込地業の東南隅をかすめて、北で東に35~45°傾いて敷設される。調査区内で長さ12.5m分を検出し、さらに東北・西南へと延びる。幅2.2m、深さ0.6mの掘形溝内に、0.5~1.0m大の花崗岩を側石に使って、内法幅0.6m、深さ0.5mの石組溝とする。北端側石の天端は、SB180の床面よりも高く、開渠であったことがわかる。SD3410は掘込地業と重複するが、それはA期内の施工時期差と判断できる。石神遺跡ではこの溝の延長は検出されていないので、礎石建物SB200の中心に向けて東から延びる2本の木桶暗渠、および掘立柱建物SB280の南側柱に沿った木桶暗渠の水源となる可能性が高い。

石敷SX3391は調査区東方にわずかに残る。東端に東に面を揃えて人頭大の石を並べた石列SX3390



### 水落遺跡第7次調査遺構配置図（1:300）

があり、石敷中に約70cm離れて別の石列がある。SX3990は調査区北端から約11m南でとぎれ、SX3391も幅を狭めてなくなってしまう。しかし、調査区南方の石敷SX3394は、SX3390の南延長より東に伸びないので、石敷SX3391とSX3394とは本来一体のもので、南北20m、東西7m以上にわたり石を敷き詰めていたと考えられる。石列SX3390は北で西へ1°40'余り傾くが、この方位は飛鳥寺西方一帯の石敷造構の方位と近似する。

礫敷SX3392は拳大の石を乱雜に敷いており、虫食い状に点々と残る。石敷SX3391の東に、石列上面とはほぼ同じ高さで広がっていたらしい。地山の砂礫と区別しがたいが、一層だけで比較的面が揃うので、礫敷と考えた。南北20m以上、東西は石列の東4mまで確認できる。

調査区南端で検出した木樋暗渠SD3370は、東で南へ約11°傾いて敷設されている。長さ31m分を検出した。西半の木樋は抜き取られているが、幅1.4m、深さ0.7mの掘形溝の底に、長樋円形の花崗岩玉石が1.5~3.3mの間隔で並ぶ。木樋を据えた枕石である。枕石は木樋方向と直交して長軸を揃え、上面中央がわずかにU字形にくぼむものが多い。石の間隔から見て、木樋は枕石3個に対して1本の材を敷設したと考えられる。東半では外法幅0.4m、深さ0.3mの木樋が残っているが、すべて粘土化して細部構造は明らかではない。木樋直上には、底に一段低い石敷面を残す土坑SK3382のほか、平安時代の土器を含む大小の土坑状のくぼみがある。SK3382内の石敷はSX3394が広く覆っていた時に、木樋が腐って陥没したもので、その他のくぼみは石敷が抜き取られた後に陥没したものと思われる。

まとめ 以上、今回の調査では、水落遺跡の東南隅の状況が明らかになった。とくに、掘込地業の東端を確認したことにより、SB200を中心とする水落遺跡の建物群は、全体が正方形のプランで設計されたことが明らかになった。その東南隅で検出したSB3440は、全体の設計計画から2間×2間の純柱建物の可能性が想定できる。また、飛鳥川から取水した水は斜行石組溝SD3410によって、水落遺跡の東に集められ、そこから木樋暗渠で西へ導水した可能性が考えられる。これらの遺構に先行する南北石組溝SD3400の造営方位は、石神遺跡A-1期にはじまる遺構群と等しい。調査当初、本調査区では、従来、水落遺跡の南限塀と考えていたSA295が東に伸びると予想していた。しかし、その延長はなく、SA295はSD3400とともに石神遺跡A-1期に属する遺構の可能性が強い。

## 2 山田寺の調査（第9次）

1976年以来、8次にわたって伽藍中枢部や南門・大垣など、山田寺跡の調査を実施してきた。その成果を受け、特別史跡の追加指定や土地公有化事業が進められ、史跡整備の必要性が高まった。今回の調査は、整備事業の実施設計にあたり、未解明であった寺域東南隅の状況を知るために実施した。寺域東辺については、第4次（1982年）と第8次（1990年）調査で、東面大垣とそれにともなう石組溝などを、南辺については、第7次（1989年）調査で南門とそれによりつく南面大垣とその前を流れる東西溝などを確認した。この成果から、寺域東南隅の位置は予想できるが、東に急に高くなる現地形が、本来のものなのか、後の堆積の結果なのか速断できない。調査は寺域東南隅の位置・地形および大垣構造・変遷の解明を目的とした。調査地周辺は、西へ堆壇状に下がる水田で、寺域東南隅推定地はほぼ真西に流れる小川で分断されている。東南隅を直接検出するのは困難なので、やや北にずらして東西7m、南北10mの範囲で遺構を検出した。

遺構 検出した遺構には、東面大垣SA500、その東を流れる2条の南北溝SD530・SD531、および瓦列をともなう土壘状遺構SX535がある。

東面大垣SA500の規模は、第4次調査で判明している。今回の調査では、上層の土壘状遺構を保存するために、1カ所だけ掘り下げて柱穴を確認した。東西1.4m、南北1.3m、深さ2.1mの柱掘形の底面から約70cmほど浮いた状態で、礎板が据わっていた。礎板は長さ93.5cm、幅22.5cm、厚さ13cmのヒノ

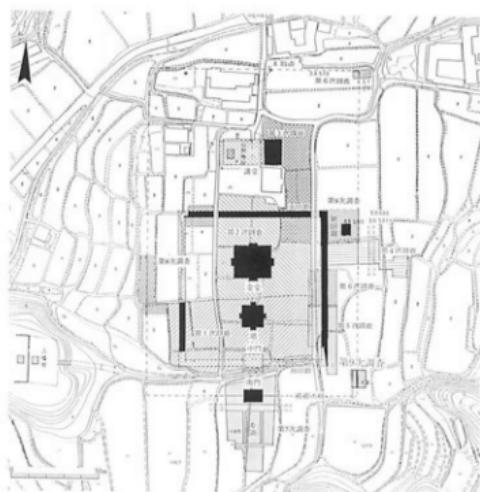
き材で、ほぼ中央にある穴(直径7.5cm)を中心に径20cmの柱の圧痕つく。礎板が掘形底面から浮いているのは、攝立柱塀が創建当時のものではなく、ある時期に改修されたことを示す。SA500は、花崗岩の地山岩盤を削り残した高まりの上に、砂質土と粘質土を積み上げた幅約2.0mの基壇をともなう。基壇の東には、瓦や垂木などの建築部材が散乱し、東面大垣は瓦を葺いた一本柱塀で、東側に倒壊したことが判明した。

東面大垣の東で確認した南北溝のうち、西にあるSD530は幅1.2m以上、深さ0.4mの素掘溝で、大垣心から東3.65mに西肩がある。東の南北溝SD531は、SD530の東半に重複して掘られた幅0.9m、深さ0.3mの素掘溝である。第4次調査で検出したSD531の北延長部では石組をともなったが、本調査区では石の抜き取り痕跡すらなかった。別の溝の可能性も残るが、SD530との先後関係も共通するので、上記のように理解しておく。

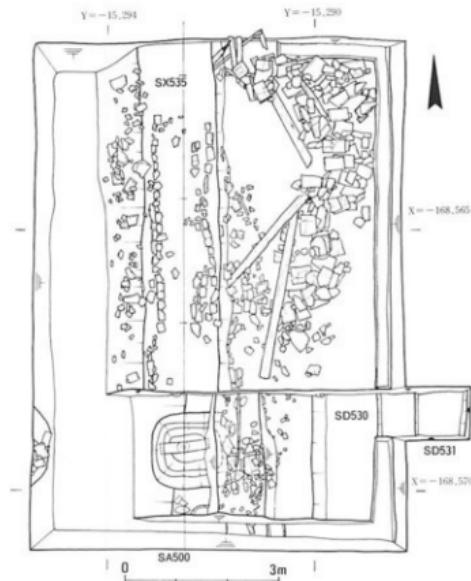
瓦列をともなう土壙状遺構SX535は、東面大垣SA500の倒壊後、倒壊した建築部材などを埋め込んで整地した上に、大垣基壇も包み込んで盛り上げたもので、基底幅3m、上端幅1.2m、高さ70cmの規模をもつ。盛土は瓦を交えながら粘質土・砂質土を互層に積み、最上部には1.2mの間隔で南北に走る瓦列が残る。整地土中から延喜通宝が出土した。

**遺物** 出土遺物には、瓦、土器、金属製品、建築部材、石製品、錢貨などがある。

東面大垣倒壊とともに瓦群の構成から、一本柱塀には当初、石川麻呂～天武朝の造営期に作った凸面斜格子叩き目の粘土板桶巻き平瓦と玉緑式丸瓦とを葺き、奈良時代以降の改作や修理時に、凸面縦位繩叩き目一枚作り平瓦と行基葺式丸瓦を補足したことがわかる。さらに、布



山田寺第9次調査位置図 (1:3,000)



山田寺第9次調査遺構図 (1:100)

目が粗い凸面縦位繩叩き目の平瓦と玉縁式丸瓦が少数あり、10世紀頃にも若干の瓦を補足したらしい。落瓦には軒平瓦もあるので、この塀には軒瓦も葺いたと考えられる。平瓦凹面に残る葺足痕跡と前述の垂木の長さから、東面大垣SA500は、軒丸瓦・軒平瓦各1枚に対し、丸瓦2本と平瓦3枚の割合で葺いた瓦屋根に復元できる。

出土した建築部材には垂木・斗・棟木がある。垂木は北端で2本出土し、現存径約8cm、長さは66cmと118cmである。端部を枘に作り、枘部分に円い穴をあける。短い材は枘の足元を斜めに切っており、垂木の押み部分に該当する。斗の平面は約30cmの方形で、東回廊出土の巻斗の寸法にほぼ等しい。棟木は断面円形で、上面にほぼ一定方向にはつた痕跡がある。垂木を納めるための簡略な仕事と思われるが、はつりは前後が揃わず、前記の垂木とセットとするには疑問を残す。

まとめ 今回の調査で確認した東面大垣SA500の柱穴は、従前の調査成果にもとづいて、寺域東南隅から北3間目の柱と推定できる。その基盤面は回廊東南隅よりも約1m低い。これは第4次調査で確認したように、創建時に回廊から南北溝SD530にむけ、東に下降する形で整地したことを示す。しかし、東面大垣は低い基壇上に建つて、回廊と大垣との間の雨水などは、東面大垣の西側に沿って南へ排水したことになる。大垣の東にある南北溝SD530・SD531の主な役目は、東の斜面上方からの水を境内地に入れないことにあるのだろう。

東面大垣が瓦葺きで、瓦の差し替えを何度も受けたこと。その倒壊年代が10世紀前半頃であることなどが、今回の調査で判明した。大垣倒壊後、その廃材を埋め込むように整地した上に、大垣と同じ位置に土壘状の高まりを積み上げるが、それは再び東からの崩壊土で埋没する。この崩壊土は、東回廊を倒壊させたものと同じ可能性があり、そうであるならば、土壘状の高まりは構築後まもない10世紀末頃に、寺域東辺の施設とともに廃絶したことになる。

### 3 川原寺の調査（1993-2次調査）

本調査は、史跡川原寺跡の指定地南を通る県道多武峰見瀬線の歩道改修と電柱撤去などの周辺整備工事による現状変更にともなう事前調査である。調査地点・調査面積・工事内容は以下の通りである。I区：南門南方（6.7m<sup>2</sup>）、電灯線埋設工事。II区：南門・南面大垣（49.4m<sup>2</sup>）、歩道改修工事。

III区：寺域南西部（16.8m<sup>2</sup>）、明日香村公共下水道。IV区：南面大垣（10m<sup>2</sup>）、電灯線埋設工事。これらの調査で、川原寺南門と南面大垣について、新たな知見が得られた。

遺構 II-1区で川原寺南門の南西部と石敷参道・南面大垣を検出した。南門は1925年に内務省が、1957-58年に奈良国立文化財研究所が調査しており、本調査区も一部が旧調査区と重複する。

南門の基壇は、ほぼ平坦にした花崗岩岩盤の上に、厚さ40cmほどの灰青色砂質土層で整地した後、築成している。掘込地業は岩盤を30cmほど掘り込むが、基壇全体にはおよばず、棟通りに幅2.6m以上にわたって行う。基壇南辺の掘込地業は部分的で、中央間付近では整地土の上に直接、黄褐色の基壇土を積んでいる。基壇の南辺と西辺は、人頭大あるいはそれよりもやや大きめの玉石列で化粧する。玉石の並べ方はやや粗雑で、西辺玉石列中には大型矩形塊の断片も混じっていた。西辺玉石列は、西南隅から北へ約3m延びて西へ折れ曲がる。

南門基壇上では、礎石抜き取り穴3個と瓦敷を検出した。礎石抜き取り穴は南側柱列の西側2個と西妻柱の礎石とに該当する。抜き取り穴の底面には、花崗岩礎石・根石の表面が付着しており、その下に礎石掘え付け掘形の埋土を認めた。瓦敷は基壇南辺近く、とくに南側柱の中央間付近でみとめられ、基壇南辺の玉石列とよくなじんでいる。瓦敷中には平安時代後期の軒丸瓦なども含む。

南門基壇南の雨落溝は、調査区東端では幅約60cm、深さ25cmで、西端では浅く細くなって途切れる。雨落溝の北肩は、基壇南辺の玉石列が側石を兼ね、南肩は素掘りだが、石敷参道を横切る部分では南

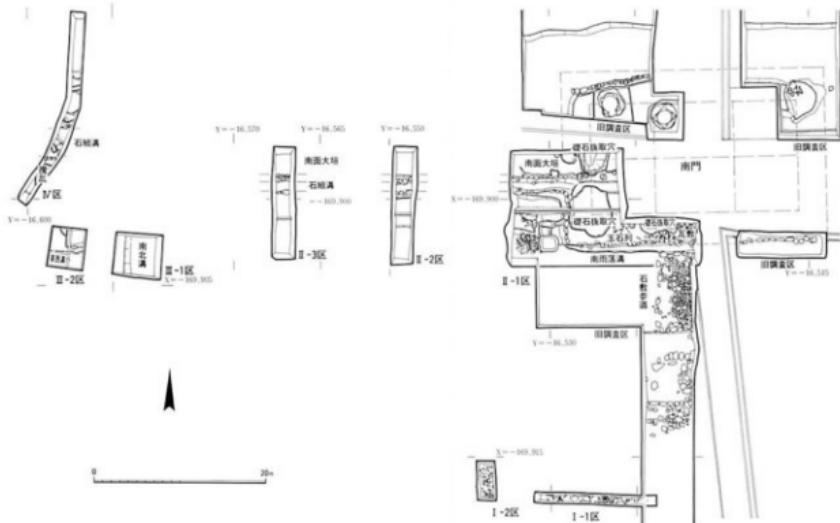
肩にも側石を立てる。この側石は大型で、石敷参道の北縁石を兼ねる。雨落溝の埋土は3層に分かれ、中層には大量の炭粒を含む。瓦・土器のほか、金銅製環瑣が出土した。土器は10世紀前半代までのものを含む。基壇の西側には、玉石列に沿って鍵の手に折れ曲がる幅1.5mほどの素掘溝がある。攪乱が著しいが、上層の灰色砂層、下層の灰色粘土層とともに大量的瓦が堆積していた。

南門の南には石敷参道がとりつく。今回は南門南の雨落溝の南側石を兼ねる北縁石と、その南の石敷1石分を検出したにとどまる。

南門の西にとりつく南面大垣は、築地本体は削平されているが、葛石列と掘込地業を確認した。葛石列は川原石以外に瓦や磚が混じる。葛石列の東端約0.6mは、南門基壇にくいこみ、それに接して一辺40cm程の柱掘形がある。築地の添柱であろう。その北1.2m、さらにその西1.2mにも径30cmほどの柱穴がある。これらは南門脇の潜り戸に関する可能性がある。掘込地業は葛石南辺から南1.3mで、南縁を確認した。幅2.7m以上、現状での深さは0.6mである。

このほかII-2・3区、IV区においても、南面大垣の一部を確認した。II-2・3区では、築地基底南縁と、その南にある東西石組溝を検出した。II-3区では、築地南縁に沿って平瓦片を10枚程並べた瓦列がある。東西石組溝は、側石の内法で幅50~60cm、深さ30cmをはかり、底石はない。築地の掘込地業の南縁は、石組溝を越えてさらに南にある。IV区では築地塀本体は完全に破壊されていたが、南面大垣の北雨落溝と思われる東西石組溝を検出した。両側を花崗岩川原石で護岸しており、内法幅は約1.5mある。

まとめ 1957年の調査では、南門基壇南辺の玉石列を創建当初のものとした。しかし、今回の調査で、玉石列中に塙を転用していること、玉石列の裏込めにも瓦片が混じること、玉石列と共存する基壇上の瓦敷が平安時代に降ること、南雨落溝から10世紀に降る土器が出土していることなどが明らかになった。したがって、南門基壇の玉石列には、後世の手が加わっており、玉石列の方向から、南門が伽



川原寺1993-2次調査遺構図 (1:600)

藍中軸線に対して若干振れています。この前見解には、再考の余地がある。

II-1区で検出した南面大垣の築地葛石列や、II-3区で検出した瓦列の方向は、国土方眼とほぼ一致する。南門とのとりつき位置では、葛石列に接して添柱と思われる柱穴があり、その北1.2mにも対になる柱穴がある。

後者を築地心とみると、

築地基底幅は2.4m前後に復元できる。ここで南門が伽藍中軸線に対して振れているとすれば、南門の西妻柱は築地心より南にずれることになり、むしろ南門建物自体は伽藍方位に正しく立っていると見たほうが、南面大垣との関係を理解しやすい。

#### 4 甘樅丘東麓の調査（藤原宮第75-2次）

本調査は、飛鳥国営公園整備事業の一環である駐車場建設とともに事前調査として実施した。調査地は、甘樅丘の東南麓に刻まれた小支谷の一つで、その谷の出口にあたる。調査地からの視界は東北に開け、約500m先に飛鳥寺を望むことができる。

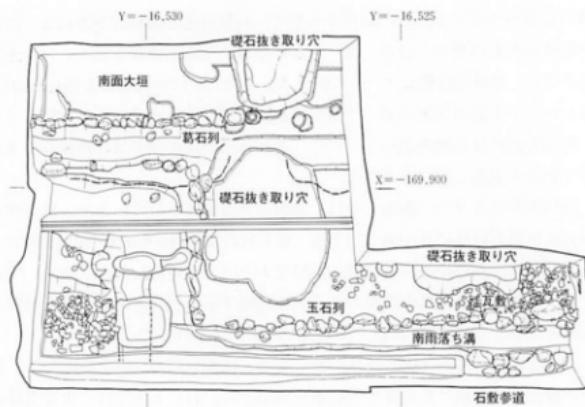
谷筋に対して直交するように、南北30m、東西12mの範囲で設けた調査区の基本層序は、上から表土、果樹園造成時の客土、耕作土となり、調査区の南北両側では地表下約1.4mで、風化した黄褐色の岩盤に達する。一段低い調査区東半および谷の中央部では、平安～鎌倉時代の遺物を含む灰褐色砂質土が厚く堆積する。この灰褐色砂質土の下の整地土上面で、7世紀後葉の遺構を検出した。

遺構および遺物包含層 本調査で検出した遺物包含層および遺構は、切り土埋立て整地層2面、土石流による埋没層1面、焼土層1面、石組溝1条、素掘溝、土坑などである。これらは、平安～鎌倉時代、7世紀後葉、7世紀中葉の3時期に大別できる。以下、7世紀代の遺構の概要を記す。

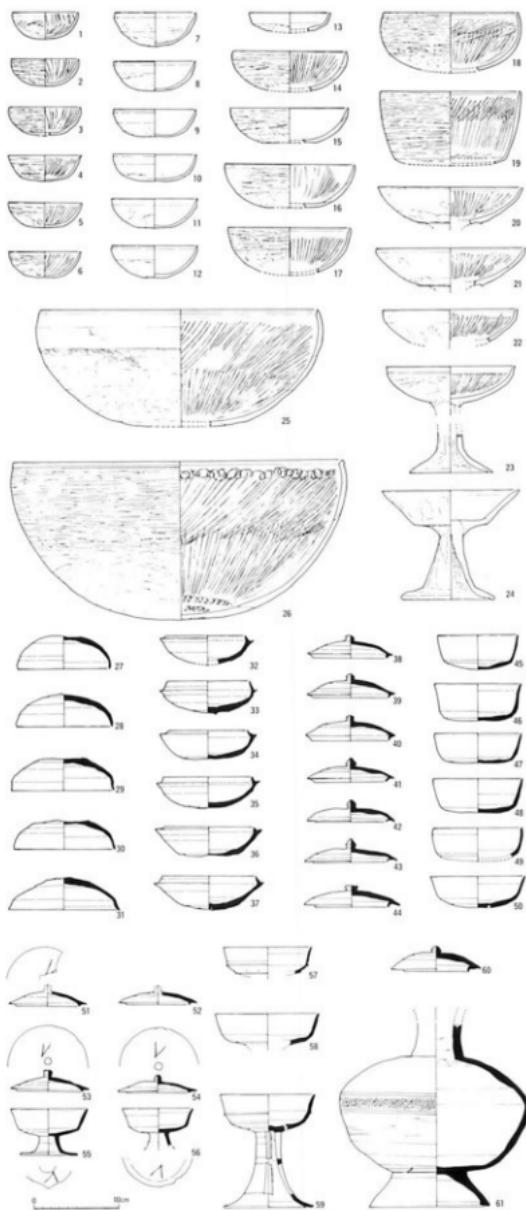
7世紀後葉の遺構には、土石流による埋没層を間にはさみ、前後2時期の切り土埋立て整地層と、この整地層にともなう溝がある。下層の切り土埋立て整地層SX030は、調査区のほぼ全面にわたり、岩盤を切り崩した黄褐色粘質土によって谷の中央部を埋立てている。この上面で2条の溝を検出した。調査区のほぼ中央にある東西溝SD032は、幅1.5～2m、深さ30～40cmで、長さ約9m分を検出した。埋土から飛鳥IVの土器が多量に出土した。SD032の北では平行する東西石組溝SD033は、調査区の東壁付近だけに残っており、幅0.8～1mで、側石3石分約1.4mを検出した。これよりも上流部分は、土石流SX036が破壊したらしい。

土石流SX036は、調査区西辺中央から東隅に向けて、幅約7.5mで東流する。埋土はグライ化した青灰粘土を主体とし、多量の粗粒砂を含む。層中には石や多量の土器・木材などを含む。

上層の切り土埋立て整地層SX031は、調査区北東部で認められた。土石流SX036による谷の埋没後、その下流部分を、SX030と同様に地山の岩盤を切り崩して整地している。SX031の上面では、調査区北半で東西溝SD034を検出した。埋土から飛鳥IV・Vの土器が多量に出土した。



川原寺南門遺構図（II-1区）(1:100)



燒土層SX037出土土器実測図 土師器（1～26）、須恵器（27～61）（1:6）

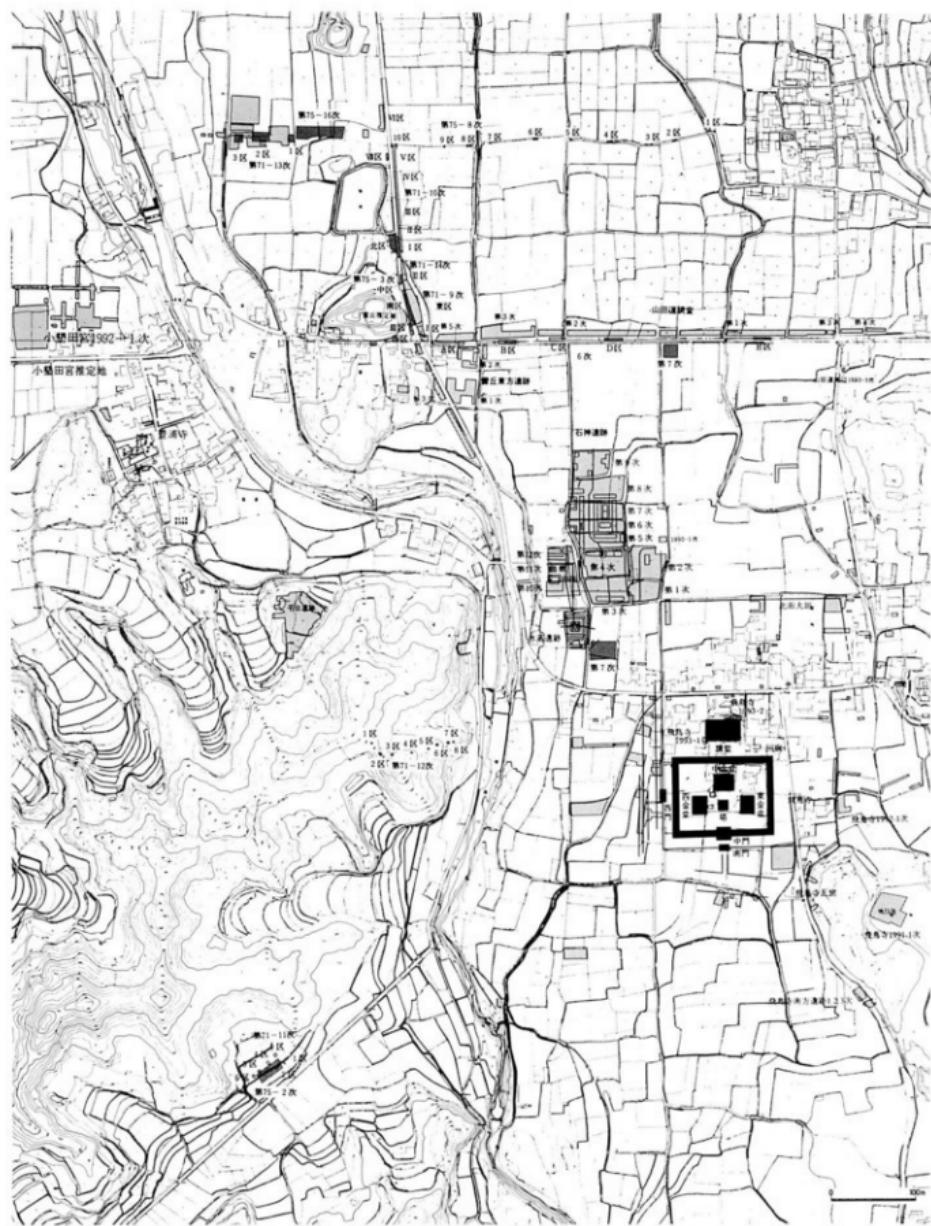


第75-2次調査遺構図 (1:200)

SX037から出土した土器は、きわめて良好な一括資料で、山田寺南門前面の整地土下で検出したSD619および整地土出土の土器群に近く、飛鳥Iの新しい段階に相当する。『日本書紀』には、蘇我大臣蝦夷・入鹿が甘樅丘に家・城柵・兵庫を作ったこと、皇極4(645)年の乙巳の変(大化改新)にこれが焼失したことが見える。焼土層SX037から出土した土器の年代観は、この『日本書紀』の記述とよく合致する。

7世紀中葉の遺構には、調査区北端の岩盤上面で、谷の斜面全体を覆うように広がる焼土層SX037がある。斜面では、焼土・焼けた壁土・炭化木材・土器片が、黄褐色の岩盤風化土とともに包含層を形成し、その厚さは2~20cmにおよぶ。この堆積は現地表下約4mの谷底まで達するが、谷底部では土壤がグライ化して、炭化木材に加えて多量の草木灰や土器片を含む青灰色砂質土となる。斜面の焼土層と青灰色砂質土層で出土した土器片が接合するので、これらは一連の堆積と考えられる。まとめ 今回の調査で、甘樅丘東南麓の土地利用の状況が明らかになった。7世紀後葉から藤原宮期には、2度にわたり丘を切り崩して、大規模に谷を埋立てている。これによって旧地形が改変され、本来西から東に開く谷筋が、東南方向に開口するようになったと推定される。また、多量の遺物から、調査区西方の平坦地、もしくは南・北方の尾根付近に何らかの施設があったものと推定される。

7世紀中葉の焼土層SX037は、調査区北方の尾根上に存在した施設の焼失にともなうものと推定できる。焼土層(上原真人)



飛鳥寺・水落・雷北方・甘檜東麓遺跡調査位置図 (1:6,000)

# 藤原宮跡・藤原京跡の発掘調査

## 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1994年度には、藤原宮跡内で11件、京跡内で11件の調査を実施した（調査一覧参照）。宮跡内の調査はすべて事前調査である。東方官衙地区では、藤原宮遷都1300年祭のための道路拡張と住宅建替にともなう事前調査を行った。西方官衙地区では、南方で四分町の団地造成にともなう大規模な事前調査のほか、住宅建替や道路拡幅にともなう小規模な事前調査を行い、北方では宅地造成や歩道拡幅にともなう小規模な事前調査を行った。京跡内では、本薬師寺の計画調査を継続して実施した。このほかに市道飛驒一本之木線建設にともなう大規模な事前調査を行ったが、ほかはいずれも道路建設・住宅建設などにともなう小規模な事前調査である。

### 1 藤原宮跡の調査

#### 東方官衙地区の調査（第75-9、13次）

市道拡幅に伴う事前調査であり、調査地は東方官衙地区・東二坊大路・左京四条三坊東北坪にまたがる東西190mあまりの細長いものになった。東二坊大路に関連する遺構の検出が期待された。

**遺構** 検出した遺構は、藤原宮東面外濠、東面大垣、東面内濠、東二坊大路とその側溝、先行条坊側溝などである。まずSD170が、藤原宮の東面外濠である。出土した木製品遺については後述する。SA175は東面大垣でSD170の心から西へ20mの位置にある。SD2300は内濠でSA175の西へ12.5mにある。濠内からは偏行唐草文軒平瓦や軒丸瓦ほか木簡1点と削り屑2点などが出土した。東二条大路関連の遺構としては、東から順にSD8310、2281、3031、3035の4本の溝を検出した。SD8310は、幅1.5m、深さ0.3mで、溝内には炭化物を含む灰色砂が堆積し、焼けゴケのある木屑や土器片が出土した。その位置と砂の堆積、松明の一部とみられる焼けた木屑の出土などによって、東側溝であることはほぼ明らかである。問題となるのは西側溝であり、SD2281はSD8310の西約10.5mで検出した。これは第27次調査で東二坊大路西側溝とされたが、第32次調査で平安初期の土器が含まれることが明らかになり藤原京廃絶以後の溝とされた。この溝は東西2本分の堆積があり、東から西へと流れが移っており、東肩には護岸用の玉石もある。これに対してSD3031は、SD2281のさらに西6.1mの位置にあり、第32次調査ではこれを東二坊大路西側溝とした。ところがさらにこの西6mの位置にSD3035があり、第32次調査では堆積した土器が「飛鳥III」を主体とすることから宮造當前にあてたのであるが、その後の検討によって「飛鳥IV」的な土器を含むことが判明し、SD3031と一連の溝である可能性がてきた。したがって東二坊大路西側溝としては、SD3031とSD3035が候補となりうるのである。SD3031を西側溝とすると、東西側溝間の距離16.6mとなり、これまでの成果とあまり隔たらないが、SD3035を西側溝とすると、東西側溝間距離は22.6mとなり、これまで検出された大路路面幅によりかなり大きく、むしろ平城京での大路推定値の7丈(21m)に近くなる。ここではSD8310とSD3031を東西側溝に当て、SD3035に関しては今後の課題としておきたい。建築遺構は、左京四条三坊西北坪でSB8311とSA8312を検出ましたが、ともに検出範囲が狭く十分に性格を把握するまでには至らなかった。宮内ではSA8313を検出している。これは柱間が2.1m等間であり、第29次調査の東西塀SA2810と平行しており、一体の建物となる可能性もある。また、先行条坊の側溝としては、東二坊坊間路SF2115の西側溝SD2844と東側溝SD2845を検出した。ともに顕著な遺物はなかったが、SF2115の路面幅は約6.5mと確定した。

**遺物** 遺物には土器、瓦塙および木製品がある。土器は藤原宮期の須恵器・土師器と、下層の弥生式土器・土師器などがあるが量的には少ない。瓦塙は内濠SD2300に集中しており、軒瓦はすべてここか

Y=-17,100

Y=-17,000

Y=-17,000

Y=-17,070

Y=-17,000

Y=-17,000



Y=-16,400



Y=-17,000

Y=-17,000

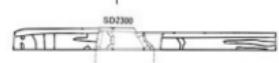
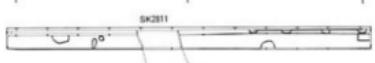
Y=-17,000

Y=-17,000

Y=-16,390

Y=-16,300

Y=-16,300



Y=-16,400

Y=-16,390

Y=-16,340

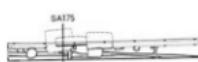
Y=-16,300

Y=-16,300

Y=-16,310

Y=-16,300

Y=-16,300



Y=-16,400

外壁大間



Y=-16,300

Y=-16,250

Y=-16,200

Y=-16,200

Y=-16,240

Y=-16,200

Y=-16,200

Y=-16,400

第76次調査造構図 (1:300)

ら見つかった。軒丸瓦には6279B、6278Fの2型式2点があり、軒平瓦には6643C、6646D、6647A、6647Bの3型式2種計7点がある。木製品は、棒状品と木筒、曲物などが出土している。外濠SD170で多量に出土した棒状品は、長さ17~18cmから22~23cm、幅0.5~0.6cmほどのものが多い。濠の堆積は暗灰土、灰色粘土、灰色砂土、暗灰粘土に分かれ、灰色砂土、灰色粘土から1cmあたり2,000個を超す寄生虫卵を検出した。その鑑定結果については概報で詳述している。この寄生虫卵の出現密度から見て、外濠には多くの糞便が流れ込んでいた可能性が強く、したがってこれら棒状品は糞便にともなう籌木（糞へら）と思われる。木筒は、外濠SD170と内濠SD175から見つかった。主要な釦文を掲げる。

御取鉢口石 039 (197) ×29×5

・領首天下達……字下急

・急可罷处在故日中之……□被賜莫 011 (125+65) ×27×4

この2点は外濠SD170の木筒で、前者は付札である。

縣主里 □直若万呂 031 115×21×6

内濠出土。付札である。

このほかには、曲物の底板などが数点ある程度である。

このほかの調査成果として、藤原宮の東西規模について新たな知見を得た。これまで藤原宮の東西大垣間の距離については926.6m程度に復元していた。しかし、以前の測量の誤りが発見されたので改めて計算を行った。

第34次調査で検出した宮西南隅の心と第66-11次調査で検出した宮西面大垣の心から、西南大垣の振れを求める、0°30'57"北で西に振れをもつ。藤原宮の大垣が正方形と仮定して、東西の振れを求め、今回調査の東面大垣心と、第66-11次調査の西面大垣心の距離を座標上で求めると、927m 28cmとなる。これは『藤原宮』(飛鳥資料館図録13)の値より1m 70cmほど大きい数字である。

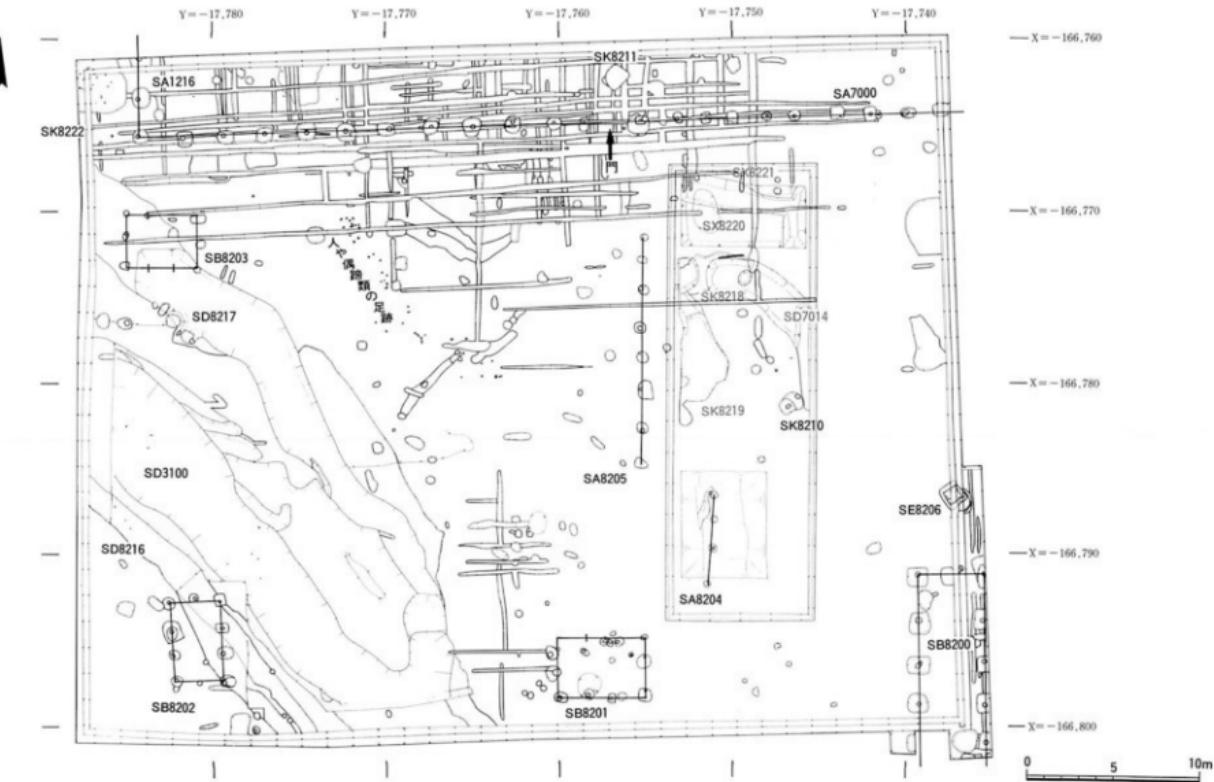
このほか高殿町で住宅改築にともなう小規模な第75-9次調査を行ったが、藤原宮の遺構は検出できず、中世後期の池状施設の一部を検出したのみである。

#### 西方官衙地区の調査（第75-1・5・6・7・12・14・18次、第76・77次）

最初に宮内西南部の四分町周辺で行った第75-1・5・6・18次と第76・77次調査を述べ、ついで西北部で行われた第75-7・12・14・15次調査について述べる。これまでの調査同様に藤原宮期の遺構密度は希薄で、建物の方位などから推定して、藤原宮期と思われる遺構は、建物6棟や区画塀などにとどまる。

第76次調査は、四分町において予定している住宅改良事業用地の造成に伴う事前調査である。調査区は、宮西面南門の北東部すなわち宮内先行条坊の五条西二坊東南坪に位置する。第6、8、9、63-8次調査で、東南坪の北半に掘立柱塀で囲まれた区画があることが知られているが、その南西塀を検出し、一部に門が想定される個所も発見された。この区画は、先行条坊造構に規制された配置をとるので藤原宮期直前の建設と見られているが、藤原宮期まで存続していたかどうかは、なお検討を要する。さらに、区画外で掘立柱建物を4棟検出している。

**遺構** 藤原宮期とその直前の遺構としては、掘立柱建物4棟(SB8200~8203)、掘立柱塀4条(SA1216・7000・8204・8205)がある。SB8200は、桁行5間以上(柱間約2.1m)、梁間2間(柱間約2.4m)の南北棟で、柱掘形は一辺1m強と大きい。このほかの3棟は小規模で、SB8201は、桁行3間梁間2間の東西棟で、柱間は1.5~1.8mである。SB8202は、桁行3間梁間2間の南北棟で、柱間は1.5mで、北で若干西に振れるのが特徴である。SB8203は、東西2間(約4m)南北2間(約3m)で柱間が不揃いである。つぎに、区画塀としては、第63-8次調査でその東半がみつかっていたSA7000の西半



藤原宮第75-18次調査造構図 (1:300)

が21間分検出できた。さらにこれが西北隅で北に曲がり第6次調査でみつかっていたSA1216につながることが判明した。SA7000は、柱間が1.5~2.4mで西寄りの掘形平面は、東のものに比べて大きくかつ深い。SA1216は、2間分を検出し、柱間は2.1mである。SA8204は、柱間が1.5~2.1mの南北塀(3間)で、掘形は浅く北で東に振れる特徴をもつ。SA8205は、柱間が1.5~2.4mの南北塀(7間)である。

本調査によって判明した区画の規模を整理すると、東西幅が87.5~88m、南北幅が58.2~58.8mである。南辺の塀SA7000は東西41間ある。西から12間目が幅3.8mと広く、12間目の柱がSA8205の延長上にあることから、ここが門だった可能性がある。北辺の塀SA1215は41か42間、西辺の塀SA1216は推定25間である。区画の東西幅87.5~88mは、藤原京の地割りの基準値である750大尺の1/3の250大尺である。区画の南北幅58.2~58.8mは、完数尺が得られないが、先行条坊五条大路北側溝と五条々間路南側溝の間の敷地のはば1/2にあたる。その後この区画内の建物配置が大きく改変されたとか、区画塀を切る新しい建物が建てられることはないので、この区画の年代の下限の決定を困難にしている。

第77次調査は、やはり四分町の住宅改良事業の造成にともなう事前調査である。調査区は、先行条坊の六条西二坊北東坪の西北隅に位置し、第7・69次調査で検出されていた先行条坊西二坊々間路の東側溝SD3318の北部分を検出した。幅約50cm、検出面からの深さ20cmで、位置は第51・54-9次調査で検出されたものと一致している。ほかには藤原宮期と比定できる遺構はなかった。

第75-6次調査は、第77次と同じ坪の南方で行われた小規模な事前調査である。主な遺構は、小規模な掘立柱建物SB8340と東西溝SD8335である。SB8340は、桁行3間梁行2間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行・梁間ともに1.8m前後でばらつきがあり、径約10cmほどの柱痕跡が残る。藤原宮期直前から藤原宮期にかけての遺構と考えられる。東西溝SD8335は、幅約1m、深さ約0.1mの浅い溝で、7世紀後半の土器が少量出土した。

第75-18次調査は、第77-6次調査地のやや東で行われた小規模な事前調査である。主な遺構には、掘立柱建物SB8390と、井戸SE8391、8392がある。SB8390は、桁行5間以上梁行1間の南北棟建物で、桁行柱間は約1.8m、梁行柱間は約3.3mである。柱抜取穴から出土した高杯や方位から宮期かその直前期のものと考えられるが、北でやや西に振れる特徴をもつ。SE8391は、掘形直径約1mで検出面からの深さ50cmの井戸である。底に小石を敷き、その上に曲物を据えていた。埋土が類似することからSB8390と同時に廃棄されたことが分かる。両者の間には第75-6次で検出された東西溝SD8335が通っており、これらが一体の施設であった可能性は高い。SE8392も、掘形直径約3mで検出面からの深さ約1.8mの井戸であるが、「飛鳥IV」の須恵器が出土しており、一体の施設であると思われる。

このほかには、第75-1次調査では、西面外濠SD260が10世紀代には埋められ水田になっていたことが確認された。第75-5次調査では、藤原宮期の遺構と確定できるものは検出できなかった。

藤原宮期以前の成果としては、第76次調査で飛鳥・藤原地域で最古の部類に属する蒸籠組井戸SE8206が見つかっている。また、弥生時代後期の方形周溝墓SX8220・8221は、第69-12・71-1次調査などで検出された方形周溝墓群のなかで最も集落に近接している。第75-6次調査で検出された井戸SE8332からは、おもに弥生中期前半の土器に伴って木製の鍼・笄柄・腰掛・容器、用途不明の鹿角製品、さらにクマネズミ属頭骨・穿孔されたイノシシの下顎骨などが出土した。寄生虫卵・植物遺体分析の結果、この井戸はなんらかの寄生虫卵汚染か動物糞便の堆積物があったこと、周囲の環境はオナモミ属やヨモギ属が繁茂したやや乾燥した状態から、水田が近接して広く分布するよう変化したこと、森林はコナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林であったがしだいに減少したこと、トネリコなどの湿地林が近くにあったことなどが推定された。

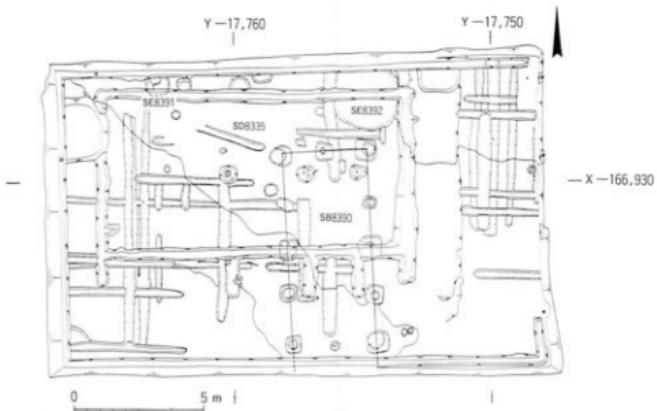
つぎに、宮内の西北部で行われた第75-7・12・14次調査について述べる。

第75-12次調査では、藤原宮期と推定される掘立柱南北塙SA8270を検出した。柱間は2~2.1m(7 尺)で6間分を検出しが、方位は北で東に振れている。

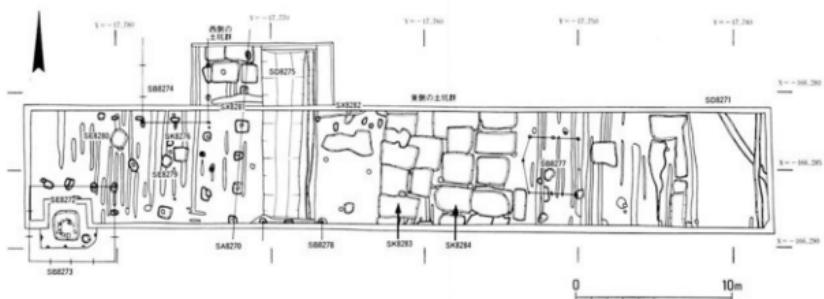
第75-14次調査では、藤原宮期と推定される南北棟建物SB8380の南妻を検出した。梁行2間で、柱間は6尺等間であると思われる。

藤原宮期以外の成果としては、第75-7次調査で中世前期の土豪の居館と考えられている環濠内部の井戸SE8350から、承安4年(1174)の年記を墨書した曲物が出土し、建設年代の上限を示唆している。その北で行われた第75-12次調査では、12世紀中頃から14世紀までの間に属する掘立柱建物2棟、環濠1条、井戸1基、土坑数基を検出している。このうちのSB8273は石組井戸SE8272を覆う井戸屋形である。これらの施設は、上記の居館と同時に存在した可能性が高く、青・白磁と宋銭なども出土している。このほかにも、古墳時代の斜行溝SD8271や、環濠居館廃絶後の集落墓の可能性のある土坑群も検出している。

(藤田盟児)



藤原宮第75-18次調査遺構図 (1:200)



藤原宮第75-12次調査遺構図

## 2 藤原京の発掘調査

### 左京七条一・二坊の調査（藤原宮第75次）

本調査は市道飛驒一本之本線建設に先立つ事前調査で、昨年度に実施した第74次調査区の西延長にあたる。調査地は、藤原京左京七条二坊東南坪の西端と西南坪、左京七条一坊東南坪に該当する。調査面積は約2200m<sup>2</sup>で、農道や現水路との関係で、東・中央・西の三地区に分けて調査を実施した。

**遺構** 検出した遺構には、古墳時代～藤原宮期の流路、古墳～飛鳥時代の掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条、井戸1基とそれにつく溝2条、藤原宮期の東二坊坊間路、掘立柱建物3棟、井戸3基、中世の居館跡などがある。なお、西区（左京七条一坊東南坪）は、飛鳥川右岸に点在する雷丘・小山・宝泉寺山などに連なる残丘の一つである。調査の結果、古墳～飛鳥時代には現状よりも高く急傾斜をなし、裾に広がる平坦地には掘立柱建物などが残っていたが、藤原宮期に大規模な切土・盛土を行い、残丘を広げてやや高い平坦地を造成したことが判明した。その整地土は、6世紀中頃の須恵器片を含む黄褐色土層や、埴輪片を含む有機土層が斜面に沿って縞状に堆積し、かつての残丘上には古墳があつた可能性が高い。以下、7世紀の遺構を中心に概述する。

東区西端（左京七条二坊西南坪）で、南東から北西に向かって流れる2条の旧河川を検出した。西流路SD313は、幅8m以上、深さ1m以上で、埋土には遺物をほとんど含まない。東流路SD310は、古墳時代末期～飛鳥時代（SD310A）には幅3～5m、深さ0.6mで、両岸を杭で護岸する。埋土から、飛鳥Iを含むそれ以前の土器類、護岸の堰板に転用した机天板、木鉢、横刃の脉柄などが出土した。藤原宮期のSD310Bは、暗灰粘土が幅8mにわたって広がる。藤原宮期の土器片・瓦・馬の顎骨などが出土した。SD310Bの中央から東北に向けて、杭と堰板で護岸した溝SD312がとりつく。

中央区では、2間×2間の掘立柱建物SB320、井戸SE315とその東西にとりつく溝SD314・317とを検出した。SB320の主軸は、北で約45度西に振れる。SE315の西にとりつくSD317の水口の両側には、花崗岩玉石を立ててある。SD317は西へ延び、約20mで北へ曲折して南北溝SD319に連なる。SD319は底に玉石を敷き、両側にも石を立てて石組溝で、幅20cmである。SE315・SD317から飛鳥I～IIの土器が出士した。

西区下層では、4間×2間の掘立柱建物SB360と掘立柱塀SA361とを検出した。SA361は5間で9m、柱間は不等である。SB360・SA361とも、主軸は北で約45度西に振れる。周囲には方位を失くす溝がいくつかあるが、建物とは直接結びつかない。SB360の柱掘形を覆う焼土塊から、6世紀中頃（TK85）の須恵器高杯片が出土している。

東区で東二坊坊間路SF300の西側溝SD302を検出した。SD302は深さ70～80cm、幅0.9～1.0mで、南でやや狭まる傾向がある。長さ9.3m分を検出し、さらに南北に延びる。溝底には黄灰砂が堆積し、短期間は水が流れたようだ。その上の暗灰粘土層は、流れがよどんだことを思わせる。溝内からは少量の瓦・埠・土器片・木片が出土した。東側溝は存在しなかったが、推定位置近くに掘立柱塀SA301が存在する。SA301は柱間2.0～2.1mで5間分を検出した。SD302とSA301とは、心々で東西約8.5mを測る。SA301の東、藤原京左京七条二坊東南坪内には、井戸SE304がある。

SD302の西、左京七条二坊西南坪内においては、上述したSD310B・SD312以外に、東区で井戸SE305・309、中央区で掘立柱建物SB325を検出した。SE305から完形平瓦を含む瓦片、飛鳥Vの土器、角材・木製匙（杓子）・瓢箪などが出土した。SE309から飛鳥Vの土器、瓦片、籠・斎串などが出土した。

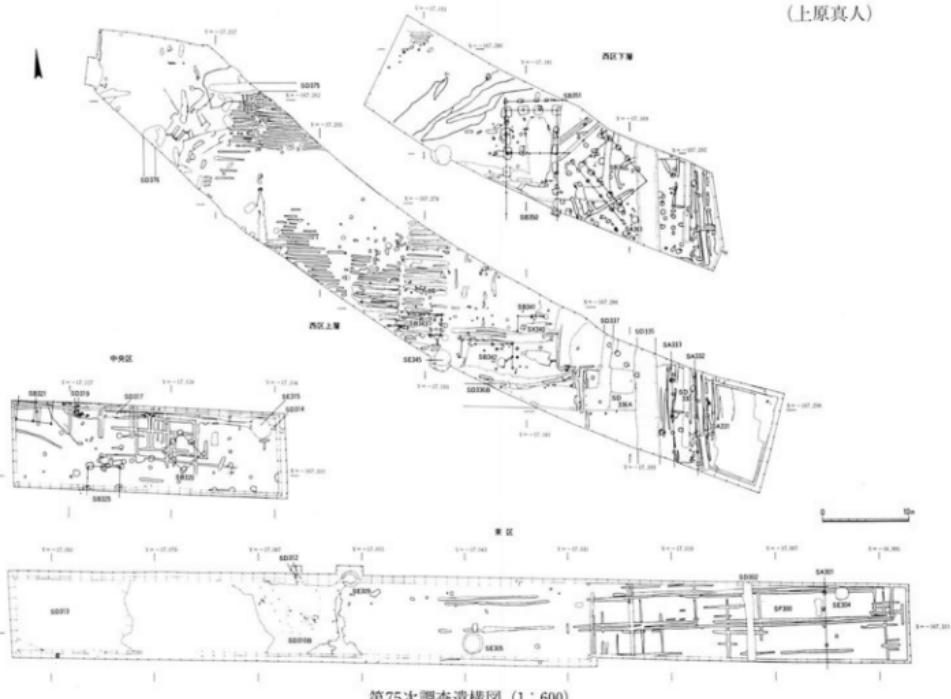
東一坊大路は中央区と西区の間を通るが、農道・水路の関係で調査できなかった。その東の左京七条一坊東南坪内（西区）には、掘立柱建物SB350・351がある。これらはかつて急傾斜だった残丘を切

り崩し造成した東南向きの緩斜面上に建っていた。一辺1m以上の大型柱掘形をもつ掘立柱建物SB350は、3間×5間以上の南北棟で、いくつかの柱掘形は柱筋方向に長い長方形を呈する。SB351はSB350廃絶後の東西棟建物で、3間×3間以上である。柱掘形は一辺40~60cmと小規模である。

まとめ 宮に近接するにもかかわらず、左京七条二坊西南坪では、中央部の溜まり状によどんだ流路とそれととりつく溝、東部の井戸2基、西部の掘立柱建物1棟のほかに、藤原宮期の顯著な遺構は存在しない。坪の中央部は古くからの流路のために低湿地状を呈し、居住に適さなかった可能性もあるが、東部に井戸以外の遺構がないことは、隣接する七条二坊東南坪や七条三坊など、第74次調査区の様相と大きく異なる。また、第74次調査区では瓦片がほとんど出土していないのに、西南坪では井戸の埋土から完形平瓦が出土したのをはじめ、瓦片が比較的多数出土しているのがめだつ。調査地の南、左京八条二坊は紀寺の寺域にある。あるいは、紀寺付属の菟院などが一部北に延びていた可能性も考慮できるだろう。

左京七条一坊東南坪では、藤原宮期に飛鳥川右岸に点在する残丘の一つを切り崩して整地し、造成地に大規模な掘立柱建物を建てる。検出した梁行3間、桁行5間以上の南北棟を、東南坪の脇殿と解するならば、正殿は調査地の北、現在の春日神社南の高まり付近に想定できるかもしれない。東南坪の造成地は、中世に居館として再利用される。その整地土からは、8世紀後半の土器類が比較的まとまって出土しており、中世居館に先立つ奈良時代にも、この造成地を再利用した可能性もある。中世居館の本体は削平されて残っていないが、方形にめぐる周濠からかなり大規模な施設が想定できる。

(上原真人)



第75次調査遺構図 (1:600)

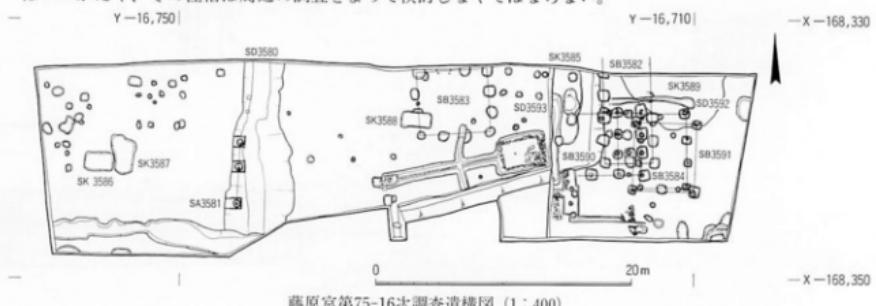
## 左京十一条三坊の調査（第75-16次 雷丘北方第5次）

雷丘北方遺跡は、これまで4次にわたる調査が行われ、7世紀後半から8世紀後半に大規模な官殿もしくは官衙遺構が存在したことが明らかになった。これは、正殿の東西南に長大な建物をコ字型に配置し、周囲を掘立柱塀で区画したもので、正殿と南殿の建て替えを境にA・B期に大別されている。今回の調査は、区画塀の東で行われ、区画外の状況を明らかにすることを目的とした。

**遺構** 西方から続く整地土を調査区の西南隅で検出し、調査区中央部から東にも整地土を確認した。検出遺構は、南北に流れる大きな溝SD3580と、それが埋められた後に作られた掘立柱塀SA3481、その東の5棟の建物群と幾つかの土坑で、切り合いから7世紀に3時期、8世紀以降に2時期の計5時期の変遷が認められた。7世紀前半頃の遺構としては、南北大溝1条と建物3棟、大土坑1基がある。大溝SD3580は幅約4深さ0.65mの素掘りの溝で、建物SB3582は6尺等間で、南北5間以上東西2間の南北棟で、南妻は確認したが北は調査区外に延びて確認できなかった。建物SB3583は桁行梁行とも3間で、南北約16尺東西約18尺と長方形平面をしており、北でやや西に振れる方位をもっている。SB3582の柱穴を壊して大土坑SK3489があり、その埋土に建物SB3584の柱穴が掘られていた。したがって7世紀前半で2時期に分かれる。建物SB3584は柱間約7尺で南北3間東西2間の南北棟である。SB3582とSB3583の間にある大土坑SK3585は、どちらの時期に属するか不明である。つぎに、西方の中心施設A期に対応する7世紀後半頃の遺構は、土坑3基と塀1条と少ない。中心施設建設時の整地土上で土坑SK3586・3587を検出したほか、大溝SD3580の埋土上で塀SA3581を検出した。SA3581は2間分しか検出されず柱間寸法は確定できなかった。このほか土坑SK3588がある。8世紀のB期に対応する遺構としては建物2棟と土坑1基を検出した。建物SB3590は西半が削平されているが、南北3間で柱間5.5尺、東西2間以上で柱間7尺の総柱建物である。柱の根固めに平城宮式軒平瓦6691-Aを用いていた。その西の溝状土坑SK3593もこの建物に関連する可能性がある。建物SB3590を切るSB3591は、南北18尺東西16尺の長方形平面をしており四隅に柱をもつ槽状の建物かと思われるが、下限は不明である。

**遺物** 全体に整地土から多量の土器・瓦が出土した。

**まとめ** これまでの調査で判明した大規模な中心施設は7世紀後半に建設されているが、その東方に前段階の施設があったことが判明した。7世紀前半には少なくとも3棟の建物と南北大溝SD3580があり、大溝は建物群の西限をなす可能性がある。またこれが2時期になることも判明した。中心施設が存続したとされる7世紀後半から8世紀にかけては3時期の遺構が検出されたが、遺構密度が希薄で、しかもやや東方に離れた位置に集中している。したがって中心施設と明確な関連性をもつ遺構とはいがいがたく、その性格は周辺の調査をもって検討しなくてはならない。



藤原宮第75-16次調査遺構図 (1:400)

### 本薬師寺の調査（1994-1・2次）

本薬師寺では継続的に学術調査が行われているが、今年度は寺地推定地西北での事前調査と、金堂前庭での学術調査を行った。

1994-1次調査は、住宅新築にともなう事前調査である。藤原宮直前もしくは本薬師寺造営頃の遺構としては、調査区の西半の東西溝SD251がある。溝幅は1m～1.2mで、ほぼ東西方に沿い、飛鳥IV～V・の土器が出土した。宮期の遺構としては、この溝を切る東西1間南北1間の建物SB250がある。柱間寸法は東西12尺、南北11尺と非常に広く、中央の棟通りに8尺間隔で2個の柱穴が並ぶ特異な建物である。

1994-2次調査は、金堂前庭の南半で行った。本薬師寺では前年度までに中門の東部（1992-1次）と東塔の南西部（1993-3次）の調査を行っており、このとき中門と金堂を結ぶ南北石敷参道と東西両塔を結ぶ東西石敷参道のそれぞれの端が確認されている。今年度は、両参道交叉部の調査を行い、合わせて金堂前庭の南東部の全体状況を明らかにすることを目的として行った。

**遺構** 本薬師寺造営以前の遺構として、西三坊間路の東側溝SD152と西側溝SD151を南北参道下で検出した。造営時の整地土で覆われており、幅1～1.2m、深さ45～50cmで、2時期あることを確認した。東側溝SD152の東側7.5尺の位置には南北掘立柱塗SA300がある。柱間7尺で5間分を検出した。西側溝SD151の西には掘立柱建物SB301があり、南北5間で柱間7尺、東西方向は調査区外に出て不明である。南北参道SF150は、そのほとんどにおいて石が抜き取られていたが、東西参道との交叉部南東隅において側石を2個確認し、これにより参道の東限が確定した。推定東西幅は4.5mである。東西参道SF222は石敷の残りが良好で、南側石の一部が残る。北側石抜き取りと合わせると幅は3.4mを測る。南北参道よりもやや大振りな川原石を敷き詰めており、この石の大きさの違いに注目すると、交叉部では南北参道を優先して舗装している。しかし両者を区画する明瞭な側石はないので、

連続して施工された

と思われる。瓦溜り

SK276とSK278は東

西参道の石敷を壊し

ており、SK276から

は建築部材が2点出

土した。この瓦溜りの下から隅丸方形の

掘形をもつ土坑

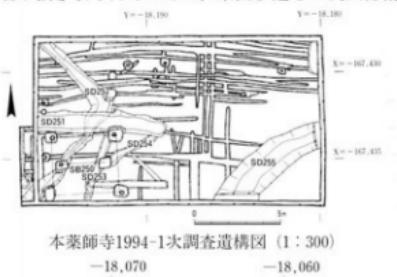
SK276とSK278を検

出したが、両方に建

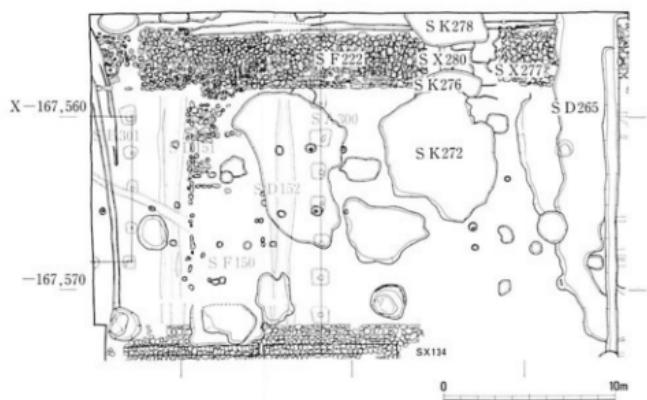
築部材を加工して作

られた礎板が据えら

れ旗竿を立てるため



本薬師寺1994-1次調査遺構図（1:300）



本薬師寺1994-2次調査遺構図（1:300）

の施設とみられる。南北大溝SD265は、幅3~5m、深さ40cm以上で参道を壙している。前回調査で検出した東塔南の東西溝SD207と一緒に、東塔を囲む濠を形成する。中には10世紀後半から11世紀始めに大量の瓦が捨てられている。このほかに大小4基の瓦溜まりがあるが、そのうち瓦溜りSK272は、10世紀前半頃のものである。

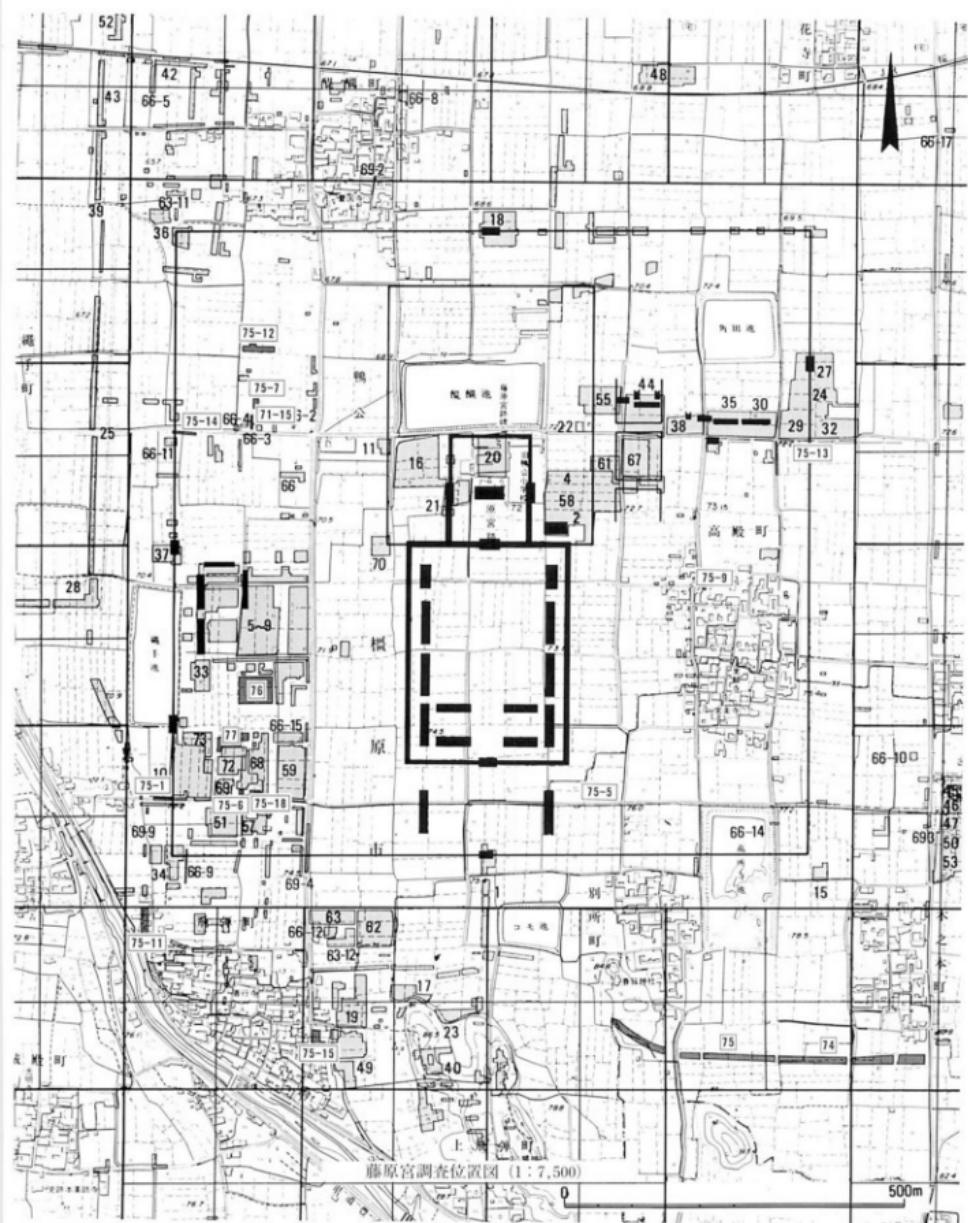
**遺物** 多量の瓦・土器と数点の金属器が出土した。先行条坊側溝SD151とSD152から出土した土器は飛鳥IVのものであった。土坑SX280から出土した部材は、年輪年代測定から695年±1~2年に伐採されたことが判明し、これと土坑SX277から出土した部材は、ともに断面寸法が幅約6.7寸高さ約8.5寸の通り肘木であった。瓦溜りSK276から出土した部材の1点は床板掛けで、法隆寺伝法堂と同じ形式である。もう1点は、朽損が甚だしく明確には判明しなかった。

**まとめ** 十文字に交わる石敷の参道を確認し、平城薬師寺では明らかにされていない金堂と東西両塔に囲まれる空闊地の状況を知ることができた。また、寺造営直前の条坊側溝はすでに中門調査時に確認しているが、今回それに伴う堀と建物を検出し、条坊施行時期と寺造営時期の問題に新たな資料を提供した。さらに、東塔の周囲に溝が巡らされる時期があるらしいことが判明した。出土した2点の通り肘木は、創建時の部材と思われる。

(藤田豊児)

調査地区	遺跡・次数	調査期間	面積 (m <sup>2</sup> )	備考	調査要因
5 AWG-A	藤原宮 第75次	94.4.4~94.8.8	2,200	左京七条一・二坊	市道建設
5 AJL-F	藤原宮 第75-1次	94.4.4~94.4.21	100	宮西面外濠	道路拡幅
5 AKG-L・M	藤原宮 第75-2次	94.5.9~94.6.30	360	甘樅丘東麓	駐車場建設
5 AMH-D・E・	藤原宮 第75-3次	94.6.14~94.7.13	500	左京十二条三坊	道路拡幅
5 BNG-E	藤原宮 第75-4次	94.6.14~94.6.22	16	左京八条四坊	住宅建設
5 AH-P・H・	藤原宮 第75-5次	94.6.28~94.7.18	630	宮内	水道管布設替
5 AJG-U	藤原宮 第75-6次	94.7.14~94.8.2	84	宮西方官衙地区	团地建替
5 AJF-Q	藤原宮 第75-7次	94.7.19~94.8.5	160	宮西方官衙地区	作業小屋建設
5 AMC-Q・R	藤原宮 第75-8次	94.8.1~94.8.10	69	左京十一条四・五坊	下水道掘坑
5 AJC-P	藤原宮 第75-9次	94.9.14~94.9.22	15	宮内	住宅建替
5 AJC-B	藤原宮 第75-10次	94.10.3~94.10.11	50	左京五条三坊	住宅建替
5 AJM-C・D	藤原宮 第75-11次	94.10.3~94.11.1	528	右京七条二坊	バイパス建設
5 AJE-U	藤原宮 第75-12次	94.10.11~	436	宮西方官衙地区	宅地造成
5 AJB	藤原宮 第75-13次	94.11.10~	384	宮内	道路拡張
5 AJK-C	藤原宮 第75-14次	95.1.23~95.1.27	70	宮内	歩道拡張
5 AWH	藤原宮 第75-15次	94.12.12~95.2.1	300	右京七条一坊	住宅建設
5 AMH-J	藤原宮 第75-16次	95.1.9~95.4.8	710	左京十二条三坊	県道新設
5 BNG	藤原宮 第75-17次	95.2.13~95.2.15	10	左京八条四坊	住宅建替
5 AJG	藤原宮 第75-18次	95.3.7~95.3.27	200	宮西方官衙地区	团地造成
5 AJG-S・R	藤原宮 第76次	94.8.1~94.10.5	2,050	宮西方官衙地区	团地造成
5 SJL-E	藤原宮 第77次	94.12.1~95.2.6	900	宮西方官衙地区	团地造成
5 BMY-L・K	本薬師寺 1994-1	94.9.21~94.10.6	170	右京八条三坊	住宅新築
5 BMY-N	本薬師寺 1994-2	95.2.3~	558	右京八条三坊	計画調査
5 BYD-A・F	山田寺 第9次	94.11.7~94.12.7	80		計画調査
5 AMD-P	山田道 第7次	94.4.18~94.5.24	255		ポケットパーク設置
5 AME-P・Q	水落遺跡 第7次	94.8.1~94.12.15	600		調査計画

1994年 飛鳥地域・藤原宮・京跡発掘調査一覧



藤原宮調査位置図 (1:7,500)

## 平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

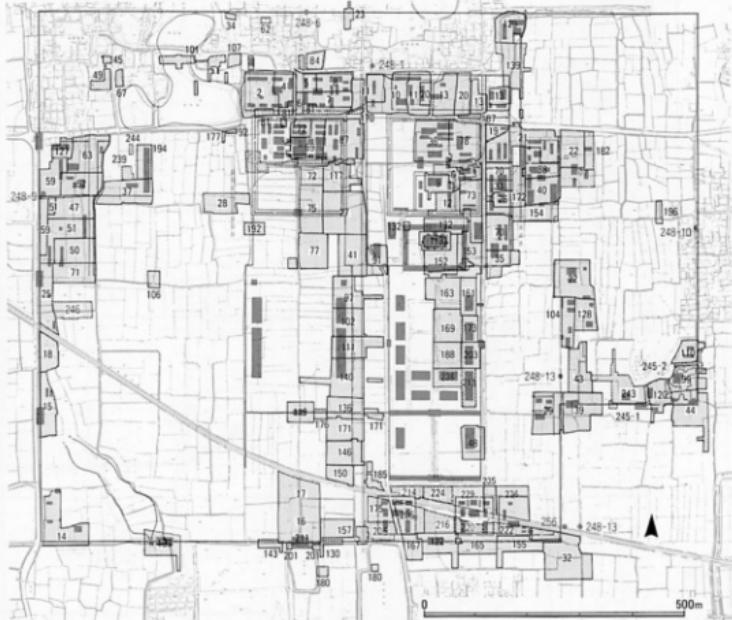
1994年度に平城宮跡発掘調査部が実施した発掘調査は平城宮跡7件、平城京20跡件、京内寺院等2件である。以下に主要な調査の概要を報告する。

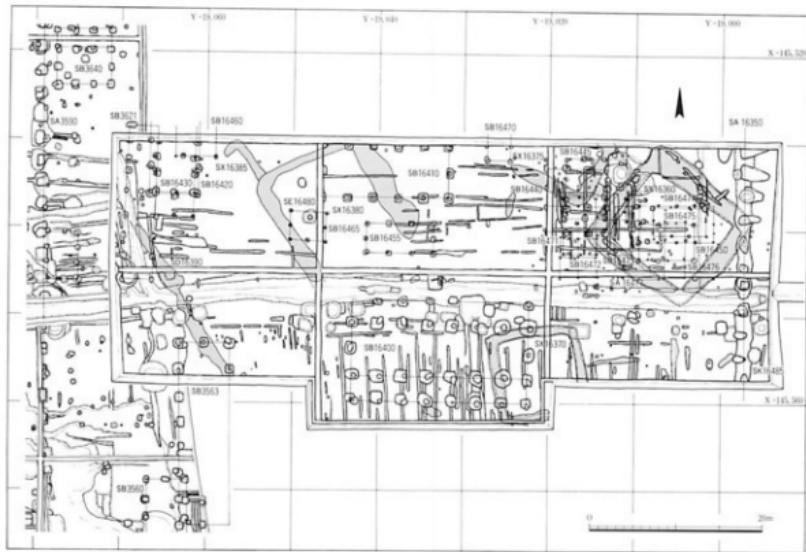
## 1 平城宮跡の調査

### 右馬寮の調査（第246次）

佐伯門の北東部、平城宮跡資料館や収蔵庫の建つ一帯は1968~1980年度にかけてほぼ全城の調査を完了し、西面中門である佐伯門から西面北門にかけた広い地区が官馬の調習・飼養を職掌とする馬寮であり、その北半部に正序部分、南半部には馬房、馬場など飼育・調習の空間を設けていたことが判明している。今回の調査区は佐伯門の南東部、宮内道路の南側である。

調査区東端で検出した柱間9間の南北塀SA16350は幅2m前後、深さ0.9~1.4mの布掘りの掘り込み地業を伴う。これは上記馬寮の南北塀SA5950の南の延長上にあたり当該官衙の東を限る施設と考えられる。また、SA5950と柱間および柱根が同規模であることから馬寮と同一の規格で設計されたものと考えられる。東限の南北塀SA16350から西へ120尺の位置を建物心とする掘立柱東西棟建物SB16400は南北両面に扉があり、桁行7間(10尺×7)、梁間4間(10尺×4)の規模を有する。これは馬寮の正殿SB6450と同一規模で位置関係も近似し、SA16350から100大尺という完数性の高い位置にあることから当該官衙の正殿と考えられる。この柱掘形は明らかに重複しており、同位置で建て替えられた





第246次調査構造平面図（1：600、左は第25次調査区、アミは弥生時代の遺構）

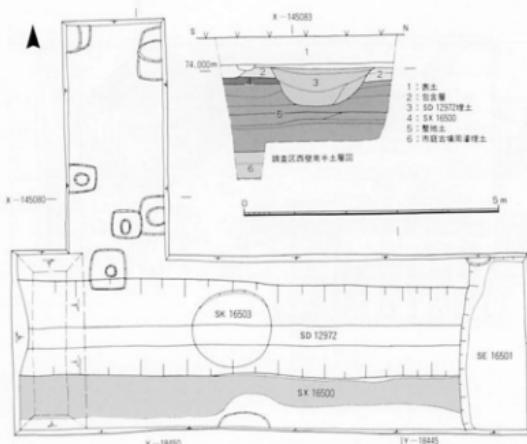
可能性が高い。掘立柱南北棟建物SB3563では第25次調査で西側柱列を検出し、南北塀と認識していたものであるが、今回東側柱列の一部と北妻を検出し、北妻の位置が正殿SB16400の棟通りに一致することが判明した。正殿の東側にこれに対応する建物は存在しないが、西脇殿に相当するものとみられる。掘立柱南北棟建物SB3621も第25次調査で西側柱列を検出し、南北塀と認識していたものであるが、桁行8間（または7間）、梁間1間の建物と判明した。掘立柱東西棟建物SB16410は正殿と軸線が一致しないが、後殿としての性格が想定される。ただし、正殿と併存した確証はなく、ある時期の中心建物の可能性もある。正殿の北には掘立柱東西棟建物SB16455、北西には掘立柱南北棟建物SB16420・SB16430、北東には掘立柱東西棟建物SB16440を配す。掘立柱南北棟建物SB16445はSB16440を建て替えたものであろう。他に掘立柱建物SB16450、SB16460、SB16465、SB16470があり、平安時代に降る可能性がある。平安時代以後の遺構として建物6棟、塀1条、井戸3基、土坑数十基、溝數十条を検出した。また、弥生時代の遺構として方形周溝墓5基のほか、溝と土坑がある。完掘した方形周溝墓SX16360の溝の最下部から弥生時代前期の壺形土器が出土した。

律令官制では馬寮は左馬寮と右馬寮に分かれており、それが奈良時代の末に主馬寮に一本化されたが平安時代初頭に再び左右の馬寮が置かれた。平安宮では西面南門の内側南北にそれぞれ右馬寮、左馬寮が置かれ広い面積を有していた。平城宮でも平安宮と同様に両馬寮が南北に置かれていたとし、佐伯門北東部の馬寮を左馬寮にあてるすれば、調査地区が右馬寮の北半部にあたり正殿等の正庁部分が置かれていたことと理解でき、佐伯門の東北部の左馬寮との類似性が増す。今回の調査では遺物から当該官衙名の特定はできなかったが、佐伯門の北東部、佐伯門から西面北門に至る区画を左馬寮、佐伯門の南東部、佐伯門から西面南門である玉手門に至る区画を右馬寮と推断するに至った。

#### 内裏北外郭北方の調査（第248-1次）

住宅改築に伴う事前調査である。調査区は内膳司と推定されている内裏北外郭の北方でこの官衙の

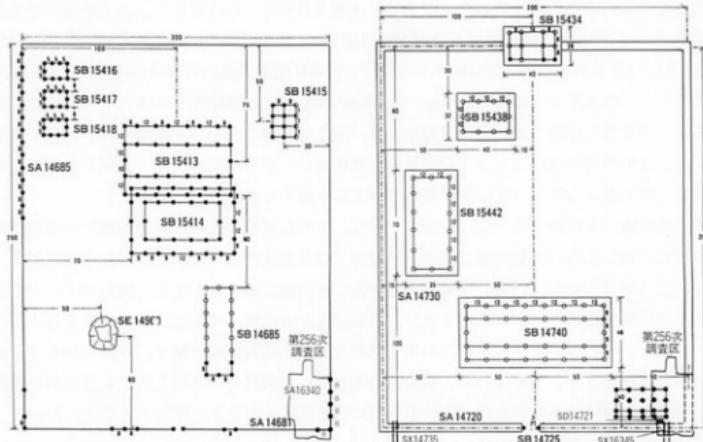
西面築地のさらに西方に位置する。検出した遺構は瓦溜り、東西溝1条および柱穴と近世・近代の井戸である。瓦溜りSX16500からは大量の丸・平瓦と軒丸瓦6304C1点、軒平瓦6664F1点、6664K6点、6721C1点および面戸瓦1点が出土した。これらは築地の落下瓦とみられ、築地本体は確認できなかったものの、この位置に築地が存在していた可能性が高いことが判明した。これによって、内裏北外郭と第一次大極殿北外郭の両官衙の北面をつなぐ閉塞施設が想定されるようになった。



第248-1次調査発掘遺構図、西壁土層図（1：100）

#### 式部省東官衙の調査（第256次）

平城宮跡南辺の東隅を南北に流れる用水路の改修工事に伴う事前調査である。近鉄線の南第222次調査区と第32次補足調査区に挟まれる区域である。遺構は調査区中央の用水路で大きく削平をうけ、その南端の用水による破損は著しい。隣接する近鉄線の北側西方で行った第236次調査などから一帯の様子が明らかになり、今回の調査区は式部省東官衙と仮称される区域の東南隅にあたり、下層遺構が奈



式部省東官衙における建物配置の変化（左：下層、右：上層 1：1,000）（単位：尺）

良時代前半の式部省、上層遺構が奈良時代後半の神祇官と推定されている。遺構は大きくA期、B期の2時期に分かれ、A期は第236次調査のB期、B期は第236次調査のC期にそれぞれ相当する。

**A期** 下層遺構に伴う第1次整地層の上面で、下層官衙の南面を限る掘立柱東西塀SA14681の東端1間分（柱間約2.4m）およびこの東側の柱穴から北へ延びる掘立柱南北塀SA16340を4間分（柱間約2.4m）検出した。これにより下層官衙の東南隅が確定し、南面東西塀SA14681の規模は59.2m（200尺）と判明した。

**B期** 上層遺構に伴う第2次整地層の上面で遺構を検出した。北側石組み雨落溝SD14721と南面築地塀SA14720の下の石組み暗渠SX16345（調査区外に延びる）によって、下層遺構の南面東西塀SA14681の位置を踏襲した上層官衙の南面築地塀SA14720が想定されるが、築地積土は失われ掘込地業も明確ではなかった。他にこの時期の遺構には第222次調査で検出している掘立柱東西棟建物で南廂と床座を伴うSB14750があり、今回その東妻を検出し身舎が梁間2間、桁行4間であることが確定した。SB14750の北側にはその雨落溝があり、北廂の出は1.5mを計る。

今回の調査で下層官衙の規模は確定したが、上層官衙の東面築地塀の遺構は検出されず、位置や方向を間接的に推定できる資料すら得られなかつた。上層官衙の東限の検出が今後の課題である。

#### 小子門および東一坊大路の調査（第248-13次）

平城宮東院地域の水路の護岸改修工事に伴う事前調査である。まず、小子門の西側では水路の東壁に直径30cm弱の柱根を伴う柱穴が検出された。小子門の棟通りは東院南面の築地大垣心と一致することが知られているが、この柱穴は門の棟通りにあたる位置で、築地大垣に先行する下層の掘立柱塀のものである。一方、小子門の西から南へ延びる東面大垣の位置はおおよその推定が可能であるが、正確な位置は未確定であった。今回の調査では、検出した柱穴と水路が東に向きを変える屈曲部との間で水路の西側法面に黄橙色の築地の掘り込み地業が認められたことと、掘り込み地業の東端は水路の東端を南北に走ることが判明した。このことから東面大垣心は水路内の西よりの位置と考えられ、柱穴は大垣屈曲部の心にあたるものではなく、わずかに東に位置することになる。第39次調査ではこの柱穴の東隣りにあたる、南面の築地大垣下層の柱根を伴う柱穴が検出されており双方の柱間は約9尺

となる。ところで東面大垣の築地の掘り込み地業の認められた水路西側法面では地業の積土の下に柱穴は一切認められなかつた。したがって、小子門南の東面大垣については先行する掘立柱塀がなく、当初から築地大垣が造営されたことが明らかとなる大きな成果を得た。次に、水路が再び南流する地点の南で近鉄線までの間では、東一坊大路の東西両側溝の確認を目的とした6ヶ所のトレンチを設けた。北側の第1・第2トレンチの間では東一坊大路東側溝にあたる南北溝SD5030の西肩を39mにわたって検出したが、その大半を現水路および近代の水路跡が破壊しており、その溝心を確定することはできなかつた。最も南の第6トレンチでは東一坊大路西側溝にあたる南北溝SD4951を検出。その規模は溝幅5.3m、深さ0.8mであることがわかつた。なお、注目すべき遺物には小子門の南で出土した軒丸瓦6304Lがある。



平城宮小子門付近の復原（1:800）

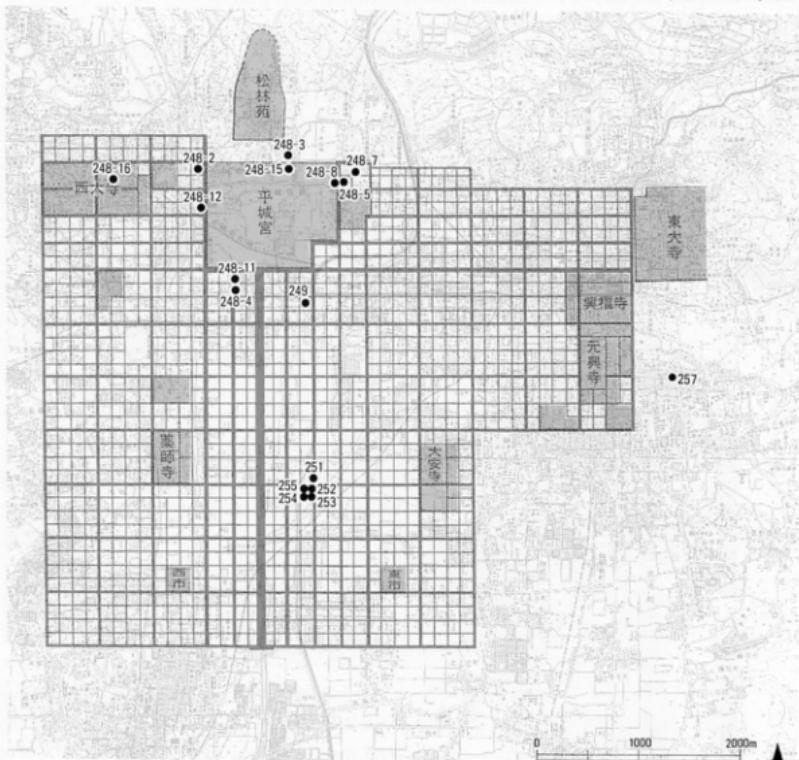
## 2 平城京跡の調査

### 左京三条一坊十四坪の調査（第249次）

共同住宅の建設に伴う事前調査である。調査区は左京三条一坊十四坪の北東隅にあたり、同坪の西辺で行った第46次調査から同坪は園池をもつ1坪（以上）占地になる可能性が高いことが指摘されている。検出した遺構は掘立柱建物12棟、掘立柱塀8条、土器埋納遺構1基、土坑2基等で、これらはいずれも奈良時代のものと考えられ、遺構の重複関係、出土遺物等から4時期に区分される。

**A期（奈良時代初め）** 調査区中央東寄りの2間の南北塀SA5668と2間以上の東西塀SA5669のほかに顯著な遺構は認められない。

**B期（奈良時代前半）** 敷地内を掘立柱塀で区画し、その中に南北棟建物2棟が南北に並ぶ。北側の掘立柱建物SB5631は梁間2間、桁行7間で東に廂が付く。この建物の南側の3間分には棟通りに間仕切り用の柱穴が残り、北側4間とは用途が異なっていたと考えられる。南側3間の西側には3間分の南北塀SA5636があり、これは目隠し塀もしくは西側の廂と考えられる。また、南側の掘立柱建物SB5637は西廂を伴うが、建物の北西部のみの検出であるため規模は不明であった。SB5631の北側では掘立柱東西塀SA5641を東西4間分、掘立柱南北塀SA5642を南北2間分検出した。これらはL字またはT字形に



1994年度 平城京・京内寺院等の発掘調査位置図（1:50,000）

つながる場所であろう。SA5641の柱間は9尺であるが、SA5641の東から2間目が8尺と狭いことから、ここが通路になる可能性がある。

**C期(奈良時代後半)** B期の南北棟2棟を東に寄せて建て替えた配置をとる。北側の掘立柱建物SB5630は梁間2間、桁行7間で東廂を伴う。南側の掘立柱建物SB5638は西北部の一角のみの検出で礎石建物の可能性もある。掘立柱建物SB5632は東妻のみの検出。他に掘立柱東西棟建物SB5665の東妻、掘立柱南北棟建物SB5640の東南部を検出した。築地等の痕跡はないが、SB5663は東西1間(7尺)で東西の築地に開く門の可能性がある。土器埋納遺構SX5670はSB5630とSB5638の中間にあり、須恵器壺A(奈良時代前半)に須恵器皿Cを反転させて蓋としたもので、土器内外の土壤資料の分析から銅刀子、墨挺、筆管とともに胎盤を納めた陶衣壺と判明した。

**D期(奈良時代末)** 掘立柱南北棟建物SB5634の他、小規模な掘立柱建物が点在する。また、土坑SX5645からは坩埚片、炉壁、鉱滓等の鋳造関係の遺物が出土した。

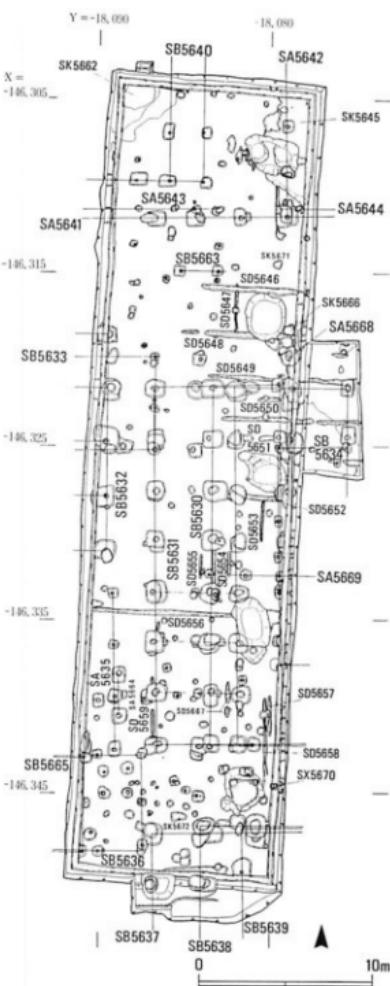
今回の調査から奈良時代の中頃をはさむB、C期は敷地内を堀等で区画し、建物を整然と配置した様相が明らかになった。坪の中心部等が未調査であるが、坪の北東部は主要施設の置かれた区画の一つであったと推定される。

#### 頭塔の調査(第257次)

今年度頭塔では発掘調査は実施していないが、復原工事に伴う北面第3~6段の石積の解体工事で得られた知見を報告する。まず、北面石積第4段の基底石は完全に埋まっているか、第3段のテラス面からわずかに頭を出しているに過ぎないが、

前面が平幅50~60cmと大きさの揃った石を選び、

石積の前面を真っ直ぐに揃えた丁寧な施工をしていることがわかった。これはこれまでに実施した東面第3・5段および北面第3段の断ち割り調査でも同じような状況を確認しており、同様の施工を行っていると考えられる。また、北面第5段中央付近に据えられた、表面に円形の突起のある大型の石材は從来からその解釈が難しかったが、その裏側に円形の窪みを発見した。これは表面の突起とほぼ同位置にあり、裏面の窪みの方がわずかに大きい。表面だけでなく見えない裏面までも周縁部以外は盤で平滑に仕上げられていることから、他所からの転用材である可能性が高くなつた。しかし、その本来の用途やそれが頭塔のこの位置に据えられた意味はいぜん不明である。



第249次調査区構造平面図(1:300)

### 左京七条一坊十六坪の調査（第252・253・254・255次）

大型小売店舗新築に伴う事前調査である。敷地は左京七条一坊十六坪の大部分と六条一坊十三坪、七条一坊十五坪、七条二坊一坪の一部にあたる。敷地面積は約31,500m<sup>2</sup>で、このうち七条一坊十六坪を中心とした約14,055m<sup>2</sup>を5次に分けて調査した。第251次調査（別項で報告）は東一坊大路上に調査区（約255m<sup>2</sup>）を設けた。第252次調査では十六坪の東北部を中心とした調査区（約3,900m<sup>2</sup>）で六条大路、東一坊大路の確認のためのトレンチを延ばした。第253次調査では十六坪の東南部を中心とした調査区（約3,730m<sup>2</sup>）、第254次調査では十六坪の西南部を中心とした調査区（約3,700m<sup>2</sup>）、第255次調査では十六坪の西北部を中心とした調査区（約2,500m<sup>2</sup>）をそれぞれ設けた。その結果、十六坪周囲の条坊関係造構、十六坪のはば全容および十五坪の北辺部の様相等が判明した。なお、十六坪内は東北部、東南部、西南部、西北部で様相が異なるため、この順に分けて記述する。

#### 条坊関係造構

六条大路の南北両側溝を検出したことにより、六条大路の幅員がはじめて判明した。溝心々距離



左京七条一坊十六坪調査位置図 (1:1,000)

14.1~14.6mで14.2mとすると40大尺に復原でき、他の大路より狭いことがわかった。六条大路北側溝は幅4~6m、深さ0.8mである。六条大路南側溝は幅4m、深さ0.7mで、溝はほとんど埋没した時点で幅0.7m、深さ0.3mに掘り直している。東一坊大路もその両側溝を検出した。東一坊大路東側溝は幅約3m、深さ0.3mで小規模であることから主として道路の排水を処理したものであろう。一方、東一坊大路西側溝は幅約7.6~8.3m、深さ1.2~1.6mで規模が大きかった。堆積層は奈良時代前半、奈良時代後半、平安時代前半、平安時代後半、平安時代末期の5層に区分でき、溝の廃絶は平安時代末である。奈良時代後半に堆積が進み、平安時代初頭には幅は当初と変わらないものの、深さ50cmになっていた。その後さらに堆積が進み、深さ30cmになった時、平安時代前期の堆積層の上面から幅2.5~3.4m、深さ0.3~0.6mの蛇行した溝を掘削する。平安時代後期に蛇行溝が埋没し、幅約8m、深さ0.2mの深い溝となり、両岸に入江状の入り込み部分が数ヶ所できる。これは第252次調査の南端部で検出した堰とともに溝を水田の用水として利用した時のものと考えられる。さて、七条条間北小路でも南北両側溝を検出し、その規模は七条条間北小路北側溝で幅1.8~2.5m、深さ0.4~0.6m、七条条間北小路南側溝で幅1.4~2m、深さ0.3~0.4m、溝心々距離で約7m、路面幅は5m前後であった。平城京では1町375大尺（450小尺）四方で条坊を計画し、この計画線上に道路心を置くが、六条大路心から375大尺南に位置するのは七条条間北小路の北側溝である。藤原京では条坊計画線上に小路側溝を置き、坪によって両側溝の内のどちらを置くか一定しない方式があった可能性が指摘されているが、平城京でもこの方式を採ったか検討を要する。東一坊坊間東小路でも両側溝を検出したが、西側溝はその東肩のみであったが、溝心々距離で約7mと推定できる。東一坊坊間東小路東側溝は幅1.3~2.9m、深さ約0.3m、東一坊坊間東小路西側溝は推定で幅1.4m、深さ0.4mである。側溝に架かる橋として、東一坊大路西側溝にはSX218・SX314があり、東一坊坊間東小路東側溝にはSX445がある。側溝に伴う遺構としては東一坊大路西側溝の底で検出した曲物の埋設遺構SX216がある。これは大小の曲物を上下二段に据えたもので、流水を浄化して用いるためのものであろう。

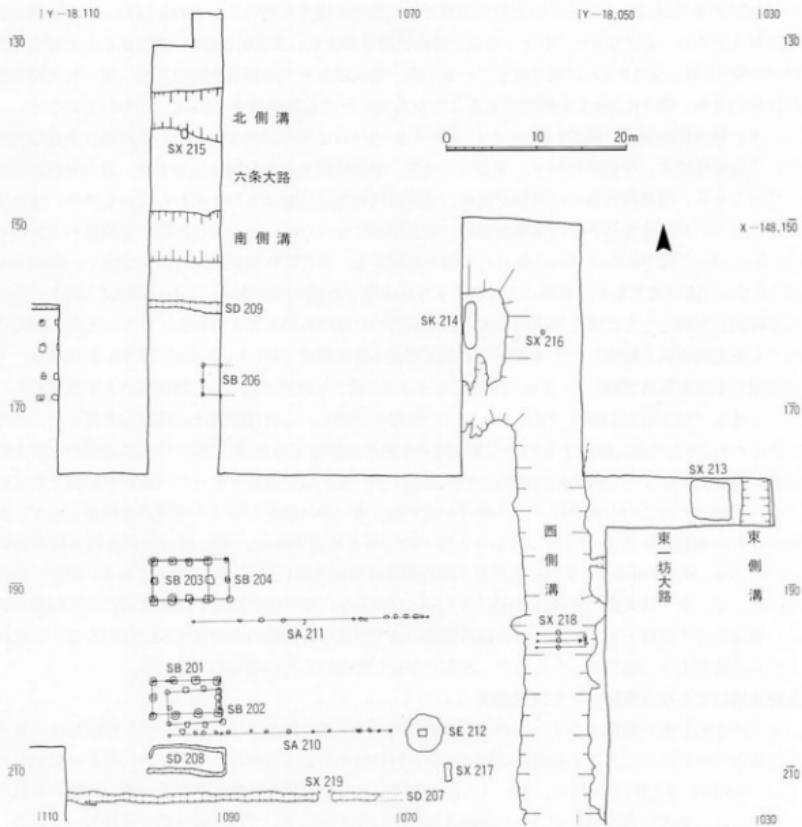
#### 条坊遺構にともなう埋葬ないし祭祀遺構

十六坪を囲む条坊遺構上で4ヶ所の土器埋納遺構、1ヶ所の祭祀土坑を検出した。SX215は六条大路北側溝の路肩近くにある土器埋納遺構で、奈良時代後半の甕2点を合口で土坑内に横たえ埋納したもの。SX316・SX317も同様で、東一坊大路の路面上、七条条間北小路との交差点近くで検出された。なお、これら甕内の内容物特定のため甕内に残っていた土壤について脂肪酸分析を現在行っている。SX446は奈良時代後半の甕1点を土坑内に横たえ埋納したもので、有機質の蓋があった可能性がある。SX444は七条条間北小路南側溝底の長さ6.4m、深さ0.5mの祭祀土坑で、西側には馬の上顎2点、下顎1点、脚部などの骨が集中し、中央部に土師器甕や墨書き人面土器、馬上顎1点、東側に須恵器壺、須恵器杯などが埋められていた。出土土器の年代は奈良時代前半である。

十六坪内の遺構 坪内を南北に二分する位置に東西溝SD207、東西に二分する位置にSA402がある。前者の西半部は調査区外で、後者は北半部に及ばないが、これらおよびその延長で区画される区域をここでは便宜的に東北部、東南部、西南部、西北部と呼ぶ。

#### 東北部の様相

検出した遺構は掘立柱建物5棟、掘立柱塀2条、溝3条、井戸1基、土坑1基である。建物は1回の建て替えがあり、東半には建物遺構は見られない。十六坪の四周のうち、六条大路に面する北面と東一坊大路に面する東面には築地塀があったと考えられるが、削平され本体は遺存しない。SD209は六条大路の南側溝の南約5.2mにある幅0.7~1.1m、深さ0.4mの東西溝で、北面築地の南雨落溝と考えられる。埋土からは築地の崩壊土と多数の瓦片などが出土した。十六坪の南北を二分する東西溝SD207



十六坪東北部遺構平面図

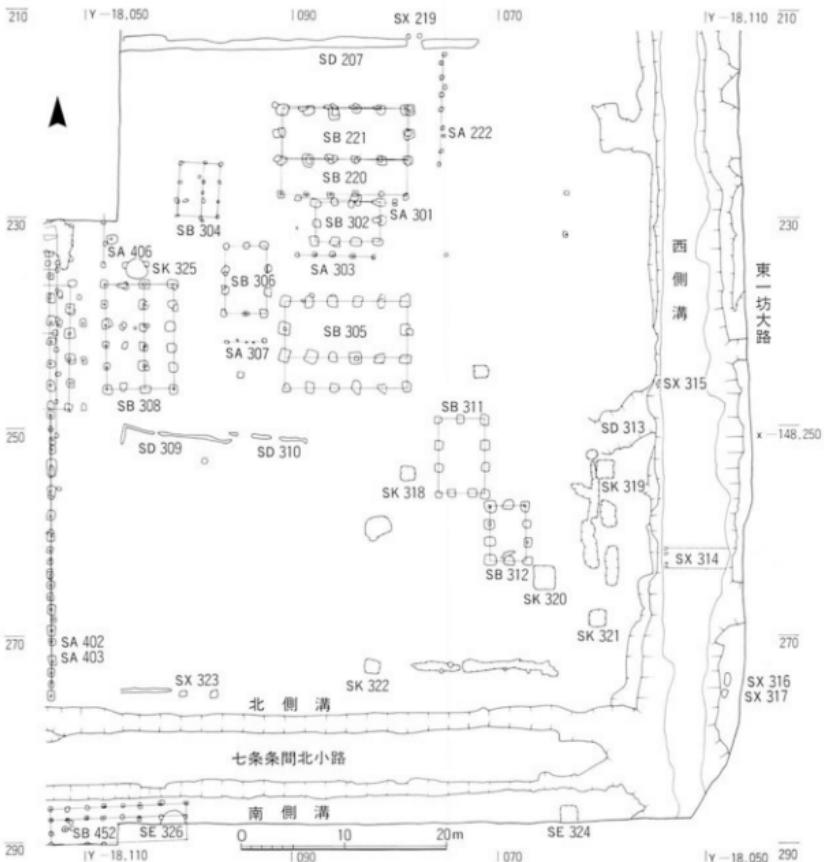
は幅約1m、深さ0.2mで、六条大路心と七条大路心とのほぼ中間に位置する。このことからこの溝は条坊計画時の奈良時代初頭に遡る可能性が大きい。この溝は後述する十六坪東南部の正殿SB220・SB221・SB305の東妻に対応する位置で一旦途切れ、陸橋部北側には柱穴が2個並ぶ。通用口と簡単な門であろう。掘立柱東西棟建物SB201と掘立柱東西棟建物SB203は西妻をそろえ、前者はほぼ同位置で一周り小さい掘立柱東西棟建物SB202に、後者は西妻の位置を変えず梁行が1間長い掘立柱東西棟建物SB204にそれぞれ建て替えられる。SB201の南にはロの字状を呈す東西8.6m、南北3.2mの浅い溝SD208があり、この建物に伴う菜園の区画溝と考えられる。また掘立柱東西棟建物SB206や1辺約90cmの縦板横柵どめ方形井戸枠を伴う井戸SE212、SB201の南からSE212まで延びる掘立柱東西塀SA210などがある。他に平安時代前半の遺構として木棺墓SX217がある。掘形は長さ202cm、幅約60cm、現存深さ19cmである。木棺はそれが腐食した粘質土の範囲から長さ175cmで、下に柵を据えていた。副葬品には漆器方形箱、漆器椀、土師器椀、須恵器平瓶、ガラス玉、承和昌宝（承和2（853）年初鉄）などがあり、主要な副葬品が北端に寄せられていたことから北頭位と考えられる。

### 東南部の様相

東南部で検出した遺構は掘立柱建物8棟、掘立柱塀5条、土坑5基などで各建物間には敷地を区画する明瞭な施設はなく、奈良時代を通じて東南部を一体的に利用していたと考えられる。東南部、西南部、西北部では遺構の方位の振れ、重複関係、位置関係からA～Dの4期に区分でき、A・B期が奈良時代前半、C・D期が奈良時代後半にあたる。

**A期** 掘立柱東西棟建物SB305は正殿で、桁行5間、梁間2間に南廂がつく。桁行の中心が坪の南北四等分線上にあり、桁行の中心は坪の東西四等分線上にある。正殿の西にある掘立柱南北棟建物SB308は桁行5間、梁間2間に東廂がつき、南妻を正殿の南廂に揃える。正殿の東南にある掘立柱南北棟建物SB311は桁行3間、梁間2間であるが、南妻を3間に割っており中央に戸口を設けたと考えられる。SX323は七条条間北小路北側溝の北側にある2個の柱穴で、小路への出入り口であろう。

**B期** A期のSB305・SB308は存続し、正殿SB305の北側にその後殿となる掘立柱東西棟建物SB302



十六坪東南部遺構平面図 (1 : 500)

を建てる。正殿の東南には掘立柱南北棟建物SB312を配する。

**C期** B期の建物をすべて廃し、敷地の中央北端近く、東西四等分線上に桁行5間、梁間2間、南面付きの掘立柱東西棟建物SB220を置く。またその南5.9mに目隠し塀SA303を設ける。さらに、坪の東西二等分線上に南北棟建物SB404（後述）を置く。

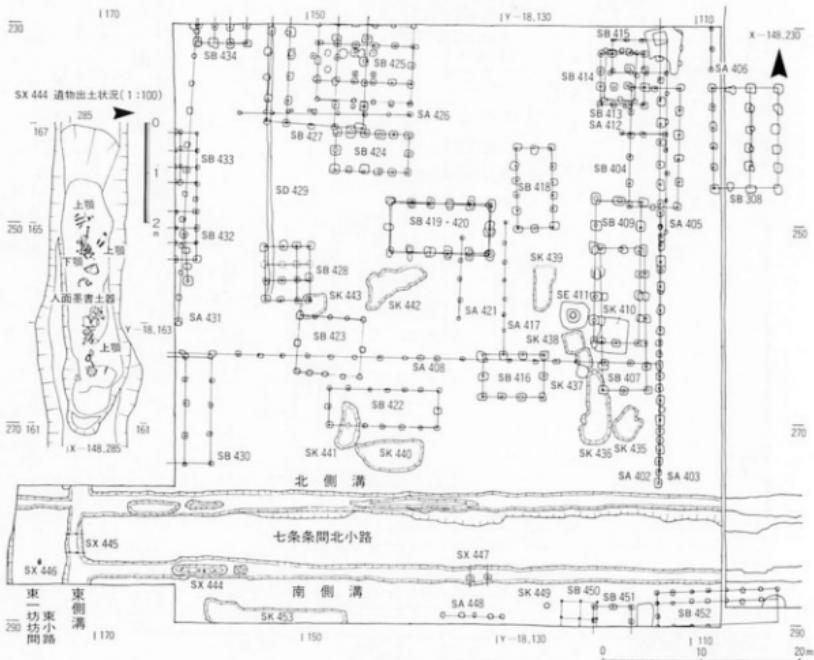
**D期** SB220を廃し身舎の位置と規模を変えずに南面のない掘立柱東西棟建物SB221に建て替える。SB221の南に掘立柱塀SA301、東に掘立柱塀SA222、南西に掘立柱南北棟建物SB306を置き、その南には掘立柱塀SA307を配する。

#### 西南部の様相

西南部で検出した遺構は掘立柱建物20棟、掘立柱塀8条、井戸1基、溝1条、土坑多数で東北部、東南部に比べ数が多い。

**A期** A期の遺構の方位は北でやや西偏する。十六坪の南半を東西に二分する掘立柱南北塀SA402が西南部の東を限る。SA402の西には桁行6間、梁間2間の掘立柱南北棟建物SB407があり、その北には柱筋を揃えた総柱の掘立柱南北棟建物SB413がある。SB407の北西には掘立柱南北棟建物SB418があり、梁行中心が坪の南北四等分線上にのる。SB428は総柱の掘立柱南北棟建物で、北妻がSB407の北妻と筋を揃える。

**B期** B期の遺構の方位は北で東偏するものが多い。掘立柱南北棟建物SB409はSB407と同規模で北へ2間ずらし建て替えている。SB409の北には棟通りを揃えた掘立柱南北棟建物SB414がある。桁行5



十六坪西南部遺構平面図（1:500）

間、梁間 2 間に南北両廊がつく掘立柱東西棟建物SB425はその南の掘立柱東西棟建物SB424と東妻を揃えて建つ。さらに、その南には掘立柱東西棟建物SB423がSB424の桁行中心線に東妻を揃えて建つ。また、27m分を検出した幅0.6m、深さ0.15mの溝SD429は東一坊条間東小路東側溝から17.7m(60尺)東にある。

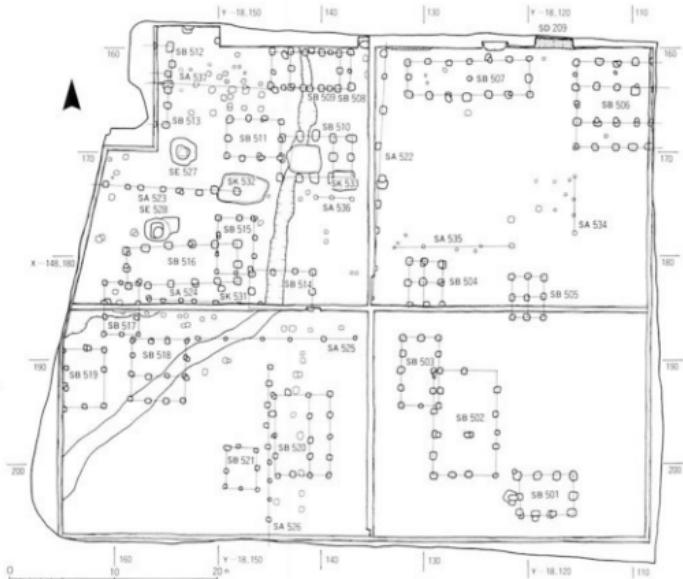
**C期** C期の遺構の方針も北で東偏するものが多い。B期までのSA402を掘立柱南北塀SA403が踏襲するが、掘立柱南北棟建物SB404で止る。この塀から掘立柱東西塀SA408が西に延び、その南には掘立柱東西棟建物SB422があり、東妻をSB419の桁行中心線に揃える。東西塀の北には掘立柱東西棟建物SB419があり、その北側柱をSB404の南妻に揃える。東西両廊が付く掘立柱南北棟建物SB427はその東廊がSB404の棟通りから29.7m(100尺)離れ、桁行が5間とすると桁行中心線がSB404の北妻と揃るように配置していたと考えられる。SB427の西にはSA408の3m北から北へ延びる掘立柱塀SA431がある。

**D期** C期のSB419を同位置、同規模で建て替えた掘立柱東西棟建物SB420を中心として方位の振れない遺構が整然と配置される。坪の東西二等分線上ではSA403を廃し、掘立柱東西棟建物SB415の東妻から南に延びるSA405に替わる。SB420の北に掘立柱東西塀SA426、東に掘立柱南北塀SA417、さらにその南に掘立柱東西棟建物SB416掘立柱南北塀SA417があるので、SB420の周囲では遺構が疎である。これに対し、東一坊条間東小路に面した敷地の西辺には掘立柱南北棟建物SB430、SB432、SB433、SB434があり、敷地利用が街路寄りに変化したと考えられる。その他の遺構としては廃絶が奈良時代末で、時期が未確認の井戸SE411がある。掘形は最大径3mで、直径0.8m・長さ1.83mのヒノキの大木をくり抜いた井戸枠を伴う。SK410は井戸の試掘の跡か、井戸枠を伴わず途中で放棄したものと考えられる。

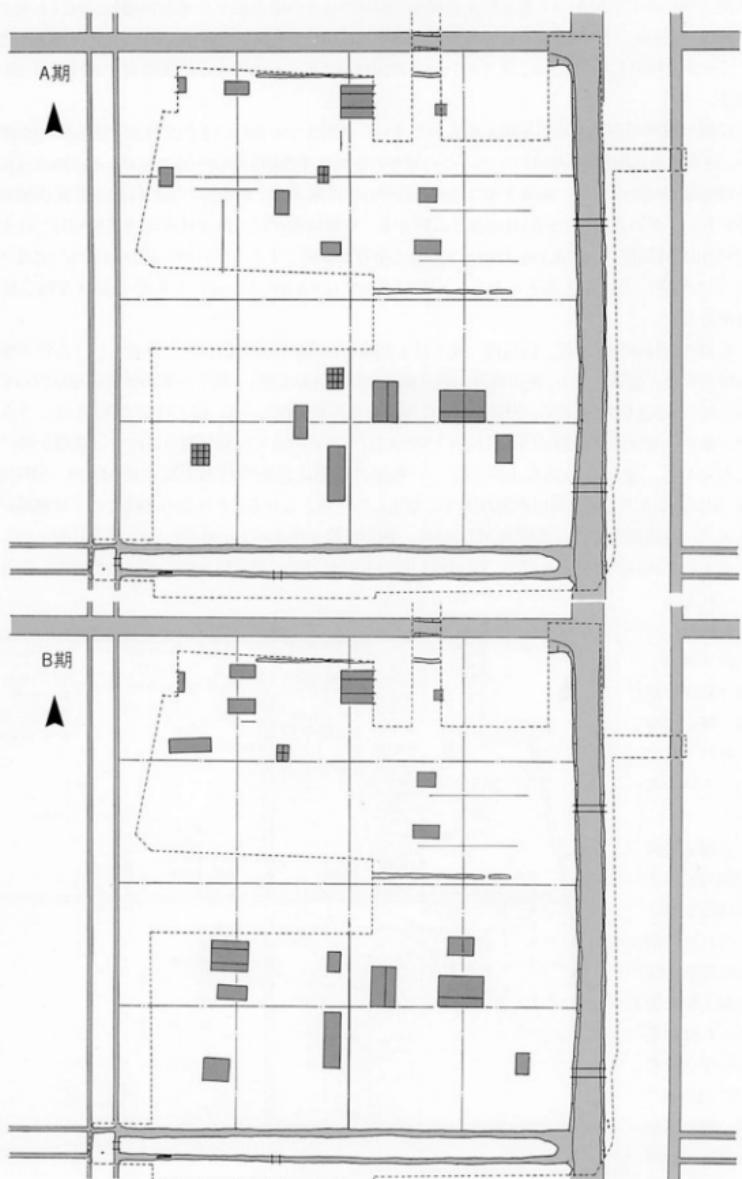
#### 西北部の様相

西北部で検出した遺構は掘立柱建物21棟、掘立柱塀5条、井戸4基、溝4条、土坑4基である。

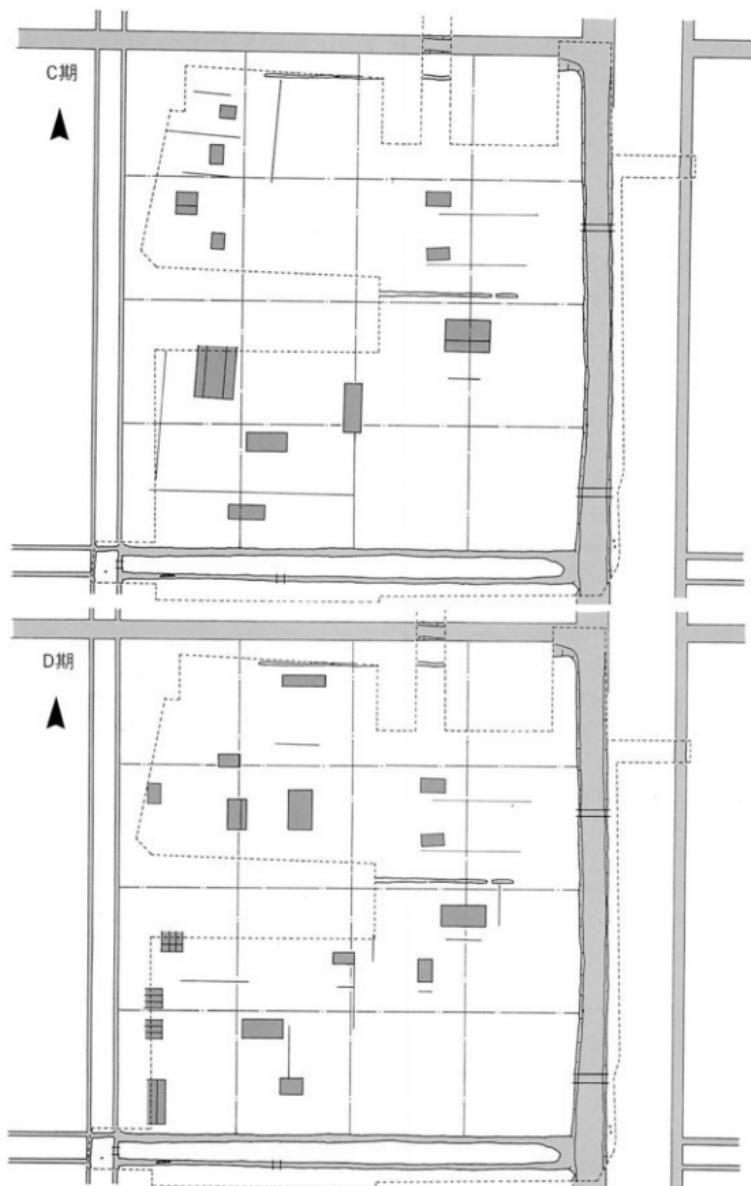
**A期** 北面築地南雨落溝SD209のすぐ南に建物3棟を置き、それらの南に掘立柱建物4棟、掘立柱塀1条を置く。これらは南北両廊付の掘立柱東西棟建物SB506の妻柱筋、側柱筋から10尺単位の距離をとって配置されている。掘立柱東



十六坪西北部遺構平面図（1：500）



左京七条一坊十六坪遺構変遷図（上：A期、下：B期）



左京七条一坊十六坪遺構変遷図（上：C期、下：D期）

西棟建物SB506は梁行を 5 間とするとその中心は東一坊大路心と東一坊坊間東小路心の距離を二等分する位置にあり、この位置の設定は条坊計画時の奈良時代初頭に遡る可能性が大きい。掘立柱東西棟建物SB509はその西妻がSB506の西妻と 44.5m (150 尺) 離れる。掘立柱東西棟建物SB501はその東妻をSB506の西妻に揃え、北側柱がSB506の棟通りと 35.6m (120 尺) 離れる。掘立柱南北棟建物SB503は棟通りがSB506の西妻柱筋と 14.9m (50 尺) 離れ、北妻がSB506の北側柱筋と 23.9m (80 尺) 離れる。

**B 期** SB506は存続し、SB506の桁行中心線から 29.6m (100 尺) 西に桁行の中心を置く掘立柱東西棟建物SB510を建て、その南西に総柱の掘立柱南北棟建物SB504と掘立柱東西棟建物SB516を置く。また、SB509を掘立柱東西棟建物SB508に、SB512を掘立柱南北棟建物SB513にそれぞれ建て替える。SB508はSB510と東妻柱筋を揃える。

**C 期** 様相が大きく変わり、遺構は北で東偏する。西北の隅を掘立柱南北塀SA522と掘立柱東西塀SA524で仕切り、さらにその中を掘立柱東西塀SA523で二分する。SA523の北側には掘立柱東西棟建物SB511を置き、南側には掘立柱南北棟建物SB515を置く。SA524の南には桁行 3 間、梁間 2 間に南廊の付く掘立柱東西棟建物SB518と掘立柱南北棟建物SB521が建つ。

**D 期** ふたたび様相が大きく変わり、遺構は北でわずかに西偏する。SD209沿いに掘立柱東西棟建物SB507を建て、東西塀SA535を隔てた南には桁行 5 間、梁間 2 間の掘立柱南北棟建物SB502が建ち、その棟通りをSB507の桁行中心線上に置く。SB502の西には南妻柱筋を揃えた掘立柱南北棟建物SB520が建つ。SB520の北には掘立柱東西棟建物SB514、西には掘立柱南北棟建物SB519を置く。時期が未確定な遺構としてSA523の北にある井戸SE527やこの南にある井戸SE528などがある。前者の井戸枠は下から順に、円形曲物、転用した方形木樋、縱板 15 枚を上下 2 段の枠木で組んだ方形枠を埋設する。

#### 十五坪内の遺構

十五坪内は幅 4 m 分しか調査していないため、時期区分は困難である。桁行 7 間、梁間 2 間に北廊が付く掘立柱東西棟建物SB452の西妻は十五坪の東西二等分線上にある。他に掘立柱南北棟建物SB450や塀SA488、土師器椀（平城 II）1 点を上向きに据えていた土器埋納土坑SK449などがある。

#### 遺物

遺物は東一坊大路西側溝からの出土が多量でその内容は多種多様であった。通常の土器（硯・製塙土器・墨書き土器など）、木器（刀子柄・砧・柄杓・折敷・曲物・皿・杓子・檜扇・下駄・横櫛・留針・木印）、金属器（鉄刀子・鉄鑿・鉄族・鉄鋤先・鉄鎌・鉄釘・鉄石突・海老銛牡金物・銅帶金具・銅環珞）、瓦塙類のほか、祭祀関係遺物、生産関連遺物、木簡が多量にみられる。祭祀関係遺物では各種材質の祭祀具が揃っており、人面墨書き土器・ミニチュア土器などの祭祀用土器・土馬・銅製人形・鉄製人形・小型素文銅鏡・銅鈴・木製人形・壇串・刀形・一本歯下駄などである。なお、口絵に人形の写真を示した。

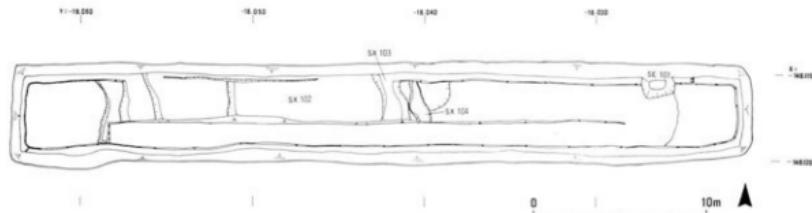
生産関連遺物ではガラス関係の坩堝・ガラス玉鋳型・金属器関係の甑炉・炉壁・轆羽口・鉱滓・坩堝・鉛切り屑・砥石・漆関係の漆付着土器・刷毛などがある。瓦塙類では軒丸瓦6012B・6272B・6282Bb・6282Db・6285A・6291Ab・6304L・6314A・6345新・軒平瓦6691J・6663F・6663J・6668B・6691A・6710A・6716C・6721A・6721C・6721Gb・薬師寺253、隅切平瓦などがある。木簡は六条大路北側溝から 3 点出土した以外、削屑を含めた数百点が東一坊大路西側溝からである。内容は文書・荷札・付札・習書と多様で、衛士に関連すると推定されるものや「主業所」のような文献にみられない部署名を記す木簡などもある。これらがどこで廃棄されたのか、周辺遺構と関連があるのか等の検討が必要である。

## まとめ

第252～255次調査で平城京左京七条一坊十六坪のほぼ全城の様相が明らかになった。坪の南半部ではC期に東西二等分線をまたぐSB404ができ南半部の一体性が強まるが、基本的には東西二等分線上のSA402・403の東西で遺構の配置や密度が異なり、区画して利用していたと考えられる。一方、北半部では東西二等分線上にSB506があり、北半部を東西に区画する溝・堀などの施設を検出していないことから北半部は一体的であったと考えられる。南半部と北半部では時期ごとの遺構の方位の振れの様子が異なるため、それぞれ別の敷地であったことが考えられる。しかし、坪を南北に二分するSD207には十六坪東南部の正殿SB220などの東妻に対応する位置に出入りがあることから、一坪を占める敷地で用途により南北に区画していたとも考えられる。十六坪の性格については東一坊大路西側溝から官衙関係の木簡がまとめて出土したことや東一坊大路西側溝や坪の東端部から多様な生産関連遺物の出土することから官営工房の存在を推定する意見もある。しかし、建物配置は官衙的ではなく、坪内に工房があったとしても邸宅の可能性が考えられる。一町規模の敷地なら下級貴族、二分の一町なら中級官人の宅地であろう。遺物の整理を待ってさらに検討したい。なお、第252～255次調査および第251次調査については1996年度末に正式な報告を行う予定である。

## 左京六条・東一坊大路の調査（第251次）

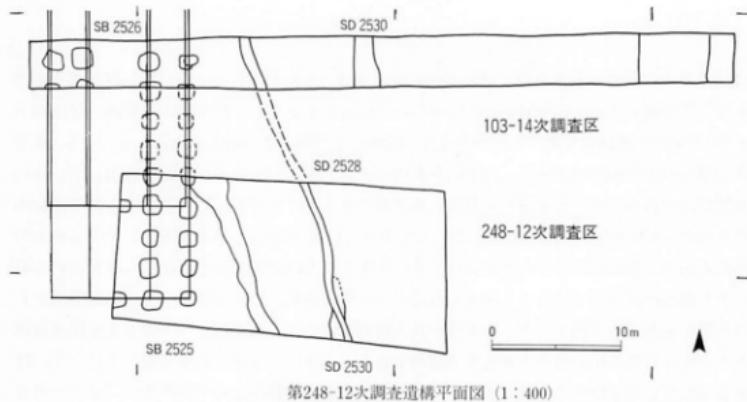
大型小売り店舗の新築に伴う事前調査で、前述の第252～255次の調査に先立ち東一坊大路の位置と規模の確認を目的とした。厚さ60～70cmの表土および耕作土の下の土層から中世の土器と瓦が出土した。調査区東端部ではこの土層の直下で地山が検出されたが、東端から3.2mほどの所から西側は沼状の遺構SX102となる。SX102の中央部は複雑に窪み、斜行溝状のSX103・SX104も検出した。これらの最も深いところは東端部地山面から1.2～1.3mである。また、SX102の東北隅ではこれより新しい井戸SE101を検出した。結局、この調査では目的とした東一坊大路に関わる遺構の確認はできなかった。



第251次調査遺構平面図（1：300）

## 右京一条二坊四坪の調査（第248-12次）

集合住宅建設に伴う事前調査である。調査区は平城宮の西方の西一坊大路に面し、大路の西側溝の検出を目的とした。検出した主な遺構は大型の掘立柱建物・礎石建物各1棟、溝5条である。掘立柱建物SB2525は身倉および東廂部分の桁行4間分を検出した。礎石建物SB2526は南妻部分の3個の掘形を検出し、その礎石据え付け掘形が掘立柱建物の南から4番目の掘形を切り込んでいた。礎石建物は今回調査地区の北約12mで行われた第103-14次調査でも検出しているが、この調査でも掘形が重複していたことから掘立柱建物がここまで延びていた可能性がある。このため掘立柱建物は第103-14次調査区まで続く南北8間以上の東西両廂付の南北棟で、北へ3間ずらして東西両廂付の南北棟礎石建物に建て替えられたと考えられる。SD2527・SD2529・SD2531は古墳時代の素掘溝で、SD2528は中世以降の溝と考えられる。西一坊大路の西側溝SD2530は調査地区的南側でかろうじて4m程検出した。



第248-12次調査平面図 (1:400)

北側では削平されて残らない。従来、本調査地区周辺では秋篠川による削平のために遺構検出例はほとんどなかったが、今回の調査によって平城宮に面する西側の土地利用を考える貴重な資料を得た。

#### 右京一条二坊一坪の調査 (第248-1次)

集合住宅建設に伴う事前調査である。調査地区は右京一条二坊一坪の東辺部にあたり、西一坊大路西側溝の確認を目的として調査地区を設定した。検出した遺構は南北溝2条、掘立柱建物1棟、掘立柱塀1条、土坑2基である。西一坊大路西側溝SD921は幅約3m、深さ約0.5mで、堆積は上下2層に分かれる。下層埋土の堆積する溝は断面がV字形で一段深い。溝の西側には築地塀の痕跡はないが、掘立柱塀も存在しないため築地塀であった可能性が高く、調査地区西端の幅1.1m、深さ0.2mの南北溝SD2510は築地の西雨落溝と考えられる。掘立柱南北塀SA2515はSD921の東肩にあり、下層埋土より新しく、柱抜取穴から奈良時代末から平安時代初頭の土師器が出土したことから上層の溝と並存すると考えられる。南北棟建物SB2511は桁行、梁行とともに3間以上で時期は不明であるが、築地想定位置に重なるため長岡京遷都以後の遺構であろう。

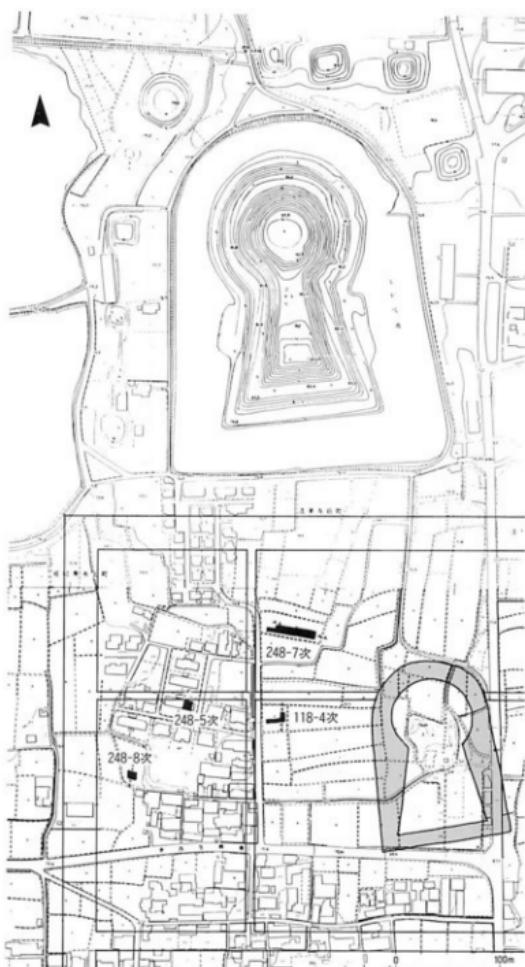
#### 西一坊大路の調査 (第248-14次)

住宅改築に伴う事前調査である。調査地区は平城宮西面中門と北門との間の大垣の西側にあたり、西一坊大路が想定され、その両側溝の確認を目的に東西2ヶ所のトレーニングを設けた。西トレーニング西端で西側溝と考えられる南北溝を検出したが、幅70cm、深さ20cmしか残っていなかった。一方、東トレーニングでは幅5.6m、深さ0.5mの南北溝があり、これを東側溝と判断した。今回の調査による西一坊大路の幅は溝心々距離で22.6mで、従来の成果とはほぼ一致した。

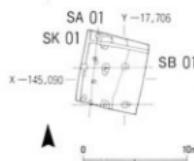
#### 左京一条二坊十坪の調査 (第248-5次)

住宅新築に伴う事前調査である。調査区は法華寺の北方で、遺存地割りから条坊道路の復原による左京一坊二坊は不整形な地割りが考えられているが、南側の十坪と北側の九坪の間を通る東西の小路が想定されていた。6m四方の調査区から遺物はほとんどなく、検出した遺構は北で東偏する南北塀SA01を3間分、東西棟建物SB01、土坑SK01等であった。従って、想定していた東西小路は検出できなかった。今回の調査で注目したいのは調査区全域にわたる遺構検出面の地盤で、遺構が人工的に

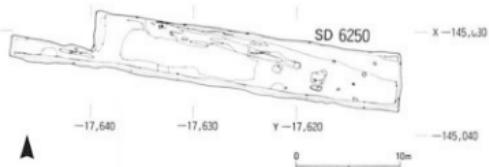
互層に積み上げられた地盤を掘り込んでいる点や土層が水平層を成す版築状ではなく傾斜をもった堆積を示す点である。この地盤を掘り込み地業と見ればSB6642は礎石建物となるが、その柱掘形は掘立柱建物の形状を示している。また、これが梁間2間の礎石建物なら掘り込み地業の北端が検出されると考えられるが、それはない。さらに、この建物が北廂付きの建物としても柱穴が見られない。従って、地盤はSB6642に伴うものではないことが明らかである。さて、ここで本調査区周辺の調査を検討してみよう。本調査区の東側の第118-4次調査で検出した70cmの掘り込み地業とされる遺構は版築状ではなく、30cm程の厚さをもつ2層に分かれるに過ぎず古墳の周濠埋立土とみることもできる。また、第248-6次調査で検出した溝に奈良時代初期の土器がまとまって捨てられていた状況は東方の木取山古墳の周濠埋立土のそれに類似する。さらに、第248-7次では確認された地山の落ちは古墳の周濠の可能性が指摘されている。このように調査区周辺の状況には削平されたいいくつかの古墳の存在を推定させる要素がある。従って調査区の互層地盤はこのような古墳に伴う積土と考えられる。



コナベ古墳南方の調査位置図 (1:4000)



第248-5次調査遺構平面図 (1:500)



第248-7次調査遺構平面図 (1:500)

### 左京一条二坊十六坪の調査（第248-7次）

住宅新築に伴う事前調査である。調査区の東端では現地表面下約0.7mで地山になるが、西にいくにつれ地山面は深くなり、大量の土器を含んだ整地土が厚く堆積する。中央部は近年の擾乱があり、検出した主要な遺構は東西溝SD6250の南肩のみで、溝の幅は3m以上、深さ1.2mである。この溝は東で15°南へ振れ条坊と方位が一致せず、現状の地割りなどからも北のコナベ古墳などと関連する古墳の周濠ではないかと推定される。溝の埋土は上下二層に分かれ、下層の埋土からは多量の土器と多量の炭が出土した。土器は平城宮II期に属し、埴輪や漆付きの土器を含んでいることから近辺に工房のあった可能性が指摘される。また、調査区西端の整地土からは出土した土器は平城宮IV～V期に属し、二彩陶器片3片を含む。大型の盤と皿の破片で、この付近が一般の宅地とは異なる性格を持っていたと考えられる。

（内田和伸）

調査地区	遺跡・次数	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	備考	調査要因
6 ADE-H・I	平城宮 第246次	94.3.10～94.7.7	2,200	右馬寮	計画調査
6 ABA-E	平城宮 第248-1次	94.4.11～94.4.20	43	内裏北外郭北方	下水道工事
6 ABB-D					
6 ABN-K	平城宮 第248-6次	94.8.19～94.9.12	54	北面大垣	下水道工事
6 ADD-L	平城宮 第248-9次	94.10.19	44	馬寮推定地	奈文研収蔵庫建設
6 ALD-G	平城宮 第248-10次	94.10.31～94.11.1	9	東院東端	個人住宅建設
6 AAG-G	平城宮 第248-13次	94.10.24～95.1.27	120	小字門・東一坊大路	宮跡内水路改修
6 ALS-C					
6 AAN-C	平城宮 第248-15次	95.1.18～95.1.25	82	市庭古墳	下水道工事
6 AAI-A	平城宮 第256次	94.7.1～94.7.12	140	式部省東官衙	宮跡内水路改修
6 AGA-I	平城宮 第248-2次	94.6.13～94.6.28	96	右京一条一坊一十五坪	集合住宅建設
6 ASB-A	平城宮 第248-3次	94.7.17～94.7.19	14	平城宮北方(市庭古墳)	個人住宅建設
6 AGF-H・Q	平城宮 第248-4次	94.8.1～94.8.8	52	右京三条一坊(酒一坊持開路)	住宅改築
6 AFC-G	平城宮 第248-5次	94.8.22～94.8.30	36	左京一条二坊十坪	個人住宅建設
6 AFC-H	平城宮 第248-7次	94.9.17～94.9.30	187	左京一条二坊十六坪	集合住宅建設
6 AFC-F	平城宮 第248-8次	94.10.12～94.10.20	96	左京一条二坊十坪	住宅改築
6 AGF-H・I	平城宮 第248-11次	94.11.7～94.11.10	23	右京三条一坊八坪	住宅改築
6 AGA-B	平城宮 第248-12次	94.11.28～94.12.26	324	右京一条二坊四坪	集合住宅建設
6 AGA-D					
6 KDC-Q	平城宮 第248-14次	95.1.9～95.1.13	95	平城宮西方(西一坊大路)	住宅改築
6 BSD-C	平城宮 第248-16次	95.1.25～95.2.2	67	西大寺旧境内	防災工事
6 AFJ-D・E	平城宮 第249次	94.4.4～94.5.23	620	左京三条一坊十四坪	共同住宅建設
6 AHC-J					
6 AHD-A	平城宮 第251次	94.5.31～94.6.21	225	左京六条・東一坊大路	大型小売店舗建設
6 AHD-H・I					
6 AHH-Q・R	平城宮 第252次	94.6.21～94.10.26	3,900	左京七条一坊十六坪	大型小売店舗建設
6 AHH-G・H					
6 AHD-P・Q	平城宮 第253次	94.10.13～94.12.27	3,730	左京七条一坊十五、十六坪	大型小売店舗建設
6 AHH-G・H					
6 AHH-I	平城宮 第254次	95.1.9～94.3.31	3,700	左京七条一坊十五、十六坪	大型小売店舗建設
6 AHH-I					
6 BZT-A	平城宮 第255次	95.2.21～94.3.31	2,500	左京七条一坊十六坪	大型小売店舗建設
6 BZT-A					
6 BZT-A	平城宮 第257次	94.11.14～95.3.31		頭塔	解体修理

1994年 平城宮・京跡発掘調査一覧

# 奈良国立文化財研究所要綱

## I. 事業概要

### 1. 研究普及事業

#### 公開講演会

(1) 1994年4月23日 退官記念講演会

「朱雀門が建つ」

細見啓三

「私の奈良学」

鈴木嘉吉

(2) 1994年5月14日 第74回公開講演会

「日本庭園の近代—京都・画家と庭とのかかわりを中心にして」

小野健吉

「考古情報の視覚化」

森本 晋

(3) 1994年10月29日 第75回公開講演会

「平城宮南辺官衙の調査成果から」

小澤 義

一式部省と兵部省の構造—

波迫晃宏

一式部省・兵部省対等化への道—

- |                 |                      |      |
|-----------------|----------------------|------|
| (3) 1994年10月1日  | 平城宮跡第252次(左京七条一坊十六坪) | 内田和伸 |
| (4) 1994年10月15日 | 水落遺跡第7次              | 西口壽生 |
| (5) 1994年12月1日  | 山田寺第9次               | 黒崎 直 |
| (6) 1994年12月17日 | 平城宮跡第253次(左京七条一坊十六坪) | 長尾 光 |
| (7) 1994年2月25日  | 平城宮跡第254次(左京七条一坊十六坪) | 岩永省三 |
| (8) 1994年3月18日  | 本薬師寺參道               | 花谷 浩 |

#### 平城宮跡資料館・遺構展示館(見学者数)

区分	資料館	遺構展示館	計
1994年	56,914	53,622	110,536
累計	1,355,014	1,694,426	3,049,440

資料館は1970年度、遺構展示館は1963年度以降の累計

#### 現地説明会

(1) 1994年5月19日・20日 藤原宮跡第75次 上原真人

(2) 1994年6月1日~3日 平城宮跡第246次(右馬塚)

小澤 義

## 2. 1994年文部省科学研究費補助金による研究

新 規	種 目	研 究 課 題	研究代表者	交付額(千円)
新	重点領域(I)	遺跡探査法の総合的開発研究	西村 康	11,300
新	重点領域(2)	集落・埋納遺跡の探査	西村 康	6,700
新 規	一般研究(A)	解析図化およびコンピュータ・グラフィックによる古代都城遺跡の比較研究	町田 章	5,000
新 規	一般研究(B)	當時微動測定による古建築の構造安定性に関する研究	内田昭人	3,900
新 規	一般研究(c)	都城・国分寺・国府・三関・その他の寺院における八世紀同范軒瓦の系統的研究	山崎信二	500
新	"	古代における銅生産の考古学的研究	小池伸彦	1,200
新	"	和鏡の生産と流通—出土鏡・鑄造遺跡からみた考古学的考察—	杉山 洋	1,100
新	"	古代度量衡の系譜	西口壽生	1,200
新	"	古代の地方端末における官衙遺跡の研究	山中敏史	1,300
新	"	弥生時代と古墳時代の祭祀の比較研究	岩永省三	700
新	"	画家による近代風庭園の系譜	小野健吉	700
新	"	古代の金製および銀製金工品の材質と製作技法に関する材料科学的研究	村上 隆	600
新	"	東アシアにおける古代ガラスの材質変遷からみた交易・流通システム	肥塚隆保	1,000
新 規	奨励研究(A)	設計規格からみた各地の大型前方後円墳の研究	岸本直文	900
新	"	数量化による弥生時代打製石器の型式学的研究	森本 晋	900
新	"	近世城跡に立地する近代化遺産の保存に関する研究	内田和伸	1,000
新 規	試験研究(B)	わが国古代の稻作農耕研究における生物考古学的手法の開発	工藤普通	1,000
新	研究成果公開推進費	二条大路木簡データベース	町田 章	4,540
新	"	古代史の謎に挑戦する自然科学(研究成果公開発表)	田中 琢	10,500
新 規	国際学術研究	日本都城と中国都城との出土文物による比較研究	田中 琢	13,500
新	"	中国長白山の巨大噴火の年代と環境への影響に関する年輪年代学術的研究	光谷拓実	2,600
	計	21件		70,140
重 点 領 域 (1)	(新規)	1件	一般研究(C)	(新規) 9件
" (2)	(新規)	1件	奨励研究(A)	(新規) 3件
一般研究(A)	(継続)	1件	試験研究(B)	(継続) 1件
" (B)	(新規)	1件		計 21件

### 3. 飛鳥資料館の運営

#### 展示

第一展示室 常設展示

増改築のため1994年6月30日まで閉館

1994年7月1日工事完成により開館

#### 普及

インフォメーションルームにおいて観覧者の質問に応じている。特別展示の刊行物として「飛鳥の一と」を刊行した。閲覧室に資料を増備した。

入館者数 (1994.7.1~1995.3.31 開館日数233日)

区分	個人観覧	団体観覧	有料	無料	合計
一般	20,363	8,283			
高・大生	3,486	8,498			
小・中生	3,950	13,461			
計	27,799	30,242			
			58,041	4,293	62,334

(平成5年12月6日より平成6年6月30日まで増改築工事のため休館)

#### 特別展示等

春期研究展示 増改築工事のため中止

秋期研究展示 「飛鳥の一と」

1994.10.4~11.24 (55日間)

#### 特別講演会

1994年10月8日

「飛鳥の調査をふりかえって」

田中 球

1994年11月5日

—「大化改新」と飛鳥京の政治—

山尾幸久

#### 陳列品購入

猿石

### 4. 埋蔵文化財センターの研修・指導

#### 研修

埋蔵文化財の保護に資することを目的として主に地

方公共団体の埋蔵文化財保護行政担当者を対象に次の研修を実施した。

区分	課程	内 容	担 当 室	実施期日	研修日数	修了者数
一般研修	一般課程	遺跡の発掘調査に関する基礎的な知識と技術の研修	研究指導部	7月5日~8月10日	37	34
専門研修	遺跡探査課程	遺跡の探査に関して必要な専門的知識と技術の研修	発掘技術研究室	5月24日~6月2日	10	10
	保存科学基礎課程	遺物の保存に関する保存科学的な基礎知識と技術の研修	遺物処理研究室	6月14日~6月28日	15	16
	文化財写真課程	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な専門的知識と技術の研修	情報資料室	8月17日~9月13日	28	18
	遺跡測量課程	遺跡の測量に関して必要な専門的知識と技術の研修	測量研究室	9月20日~10月19日	30	17
	環境考古課程	古環境復原研究のために必要な専門的知識と技術の研修	考古計画研究室	11月29日~12月16日	18	26
	遺跡保存整備課程	遺跡の整備に関して必要な専門的知識と技術の研修	保存工学研究室	1月18日~2月9日	23	17
	寺院官街跡調査課程	古代寺院・官街遺跡の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	集落遺跡研究室	2月15日~3月1日	15	28
特別研修	埋蔵文化財基礎課程	埋蔵文化財行政を担当する上で必要な遺跡・遺物に関する基礎的知識の研修	保存工学研究室	4月20日~4月28日	9	29
	城郭調査課程	城郭調査に関して必要な専門的知識の研修	測量研究室	5月10日~5月17日	8	33
	製鉄遺跡調査課程	製鉄遺跡の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	集落遺跡研究室	10月25日~10月28日	4	32
	人骨調査課程	遺跡から出土した人骨の調査に関して必要な基礎的知識の研修	発掘技術研究室	3月7日~3月16日	10	23

#### 発掘調査・保存整備等指導

北海道 ピリカ遺跡 高砂地区遺跡 手宮洞窟 常呂

遺跡 北黄金貝塚 福山城

青森県 三内丸山遺跡 小牧野遺跡

岩手県 盛岡城跡 湯舟沢II遺跡

宮城県 一里塚遺跡 多賀城跡

秋田県 払田城跡 秋田城跡  
 福島県 二本松城跡 慧日寺跡 根岸道路  
 茨城県 平津官衙遺跡  
 栃木県 須須官衙関連遺跡 法界寺跡  
 新潟県 八幡林遺跡 小泊須恵器窯跡群  
 富山県 北代遺跡  
 石川県 七尾城跡 奥原町遺跡 須曾般戸穴古墳  
 岐阜県 寺平遺跡 住飯大塚古墳 江馬氏館跡 杉崎  
 麻寺  
 三重県 丹山庵寺  
 静岡県 肪機山古墳 遠江国分寺跡 大知波峠麻寺跡  
 愛知県 柳ヶ坪遺跡 三河国分寺跡 市道遺跡 東畠  
 麻寺跡  
 三重県 長者屋敷遺跡 城之越遺跡 犬生庵寺  
 滋賀県 甲山古墳 安土城跡 木村古墳群 大規模遺跡  
 京都府 物集女車塚古墳 慶仁京跡 大覺寺御所跡  
 市坂瓦窯跡 梅谷瓦窯跡  
 大阪府 金山古墳 心合寺山古墳 新池埴輪製作道路  
 池島・福万寺遺跡  
 兵庫県 神園遺跡 太市中古墳群 有年原田中遺跡  
 植矢遺跡 篠山城跡 西求女塚古墳 赤穂城  
 姫路城 西条古墳群 北山古墳群 二郎宮の  
 前遺跡  
 奈良県 船石遺跡 ナガレ山古墳 大野寺石仏 勝  
 間田城跡 内山瓦窯  
 鳥取県 植山古墳 不入岡遺跡  
 島根県 穴神横穴墓群 後谷V遺跡  
 岡山県 岡山城跡 儒中松山城跡 太田茶屋遺跡  
 広島県 内遺跡 中世城館遺跡 草戸千軒遺跡 前原  
 遺跡  
 山口県 仁馬山古墳 茶臼山古墳 長登銅山跡 大板  
 山たたら製鉄遺跡  
 香川県 丸亀城跡 許岐國分寺跡 有岡古墳群  
 愛媛県 井手東1遺跡 葉佐寺古墳 来住寺 寺宮前  
 川北遺跡  
 福岡県 大野城跡 太宰府口城門 鴻臚館跡 平塚川  
 湾遺跡  
 佐賀県 名護屋城跡  
 長崎県 原の注遺跡 鷹島海底遺跡  
 熊本県 鞣智城  
 大分県 安国寺遺跡 亀塙古墳  
 宮崎県 国衙・都衙・古寺跡範囲確認調査 上の原遺  
 跡 西都原古墳群  
 沖縄県 知念城跡 今帰仁城跡 糸数城跡 識名園  
 仲原遺跡

**埋蔵文化財ニュース刊行**  
 第78号 保存科学関連設備と保存科学に携わる人員の  
 調査

**5. その他**  
**委員会等**  
 第20回飛鳥資料館運営協議会  
 1994年7月18日 於 飛鳥資料館  
 平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会  
 1994年5月30・31日 於 平城宮資料館講堂

### 協力事業等

文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており、1972年度から当研究所在文化庁から支出委任を受けて買取業務を担当しているが、1994年度の状況は下記のとおりである。

区分	面積	金額
1994年度	5,495.03	279,987,594
国有地合計	349,209.86	25,249,146,074

### II. 図書及び資料

図書 151,140冊 (1995.3.31)

区分	種別	購入	寄贈	計
1994年度	和漢書	1,934	6,092	8,026
	洋書	58	109	167
累計	和漢書	54,796	88,642	143,438
	洋書	5,867	1,835	7,702

写真 545,782 (1994年度末)

### III. 研究成果刊行物

1. 1994年度刊行物

名 称	
学 報	第54冊 平城京左京二条二坊 一長屋王邸・藤原麻呂邸一 発掘調査報告
	第55冊 飛鳥藤原宮発掘調査IV 一飛鳥水落遺跡の調査一
史 料	第40冊 山田寺出土建築部材集成
	第41冊 平城京木簡一
報告書等	1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報 飛鳥・藤原宮跡発掘調査24 平城宮発掘調査出土木簡概報28 平城宮発掘調査出土木簡概報29
図 錄	古代の影 藤原京創都1300年特別展

### 2. 前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

年度	名 称
1954	第1冊 仏師連慶の研究
	第2冊 修学院離宮の復原的研究
1955	第3冊 文化史論叢
1956	第4冊 奈良時代僧房の研究
1957	第5冊 飛鳥寺発掘調査報告
1958	第6冊 中世庭園文化史
1959	第7冊 兴福寺食堂発掘調査報告
1960	第8冊 文化史論叢II
1961	第9冊 川原寺発掘調査報告
1962	第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告
1963	第11冊 院の御所と御堂一院家建築の研究一
1964	第12冊 巧匠阿弥陀仏快慶
1965	第13冊 寂厳造系庭園の立地的考察
1966	第14冊 店招提寺藏「レース」と「金龟舍利

	塔」に関する研究
第15冊	平城宮発掘調査報告II 官衙地域の調査
1963 第16冊	平城宮発掘調査報告III 内裏地域の調査
1965 第17冊	平城宮発掘調査報告IV 官衙地域の調査
第18冊	小堀遠州の作事
1967 第19冊	藤原氏の寺とその院家
1969 第20冊	名物製の成立
1971 第21冊	研究論集I
1973 第22冊	研究論集II
1974 第23冊	平城宮発掘調査報告VI 平城京左京一条三坊の調査
1975 第24冊	高山一町並調査報告一
第25冊	平城京左京三条二坊
第26冊	平城宮発掘調査報告VII
第27冊	飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I
第28冊	研究論集III
第29冊	木曾奈良井一町並調査報告一
1976 第30冊	五條一町並調査の記録一
1977 第31冊	飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II
第32冊	研究論集IV
第33冊	イタリア中部の一山岳集落における 民家調査報告
第34冊	平城宮発掘調査報告IX
1978 第35冊	研究論集V
第36冊	平城宮整備調査報告 I
1979 第37冊	飛鳥・藤原宮発掘調査報告III
第38冊	研究論集VI
1980 第39冊	平城宮発掘調査報告X
1981 第40冊	平城宮発掘調査報告XI
1984 第41冊	研究論集VII
第42冊	平城宮発掘調査報告XII
第43冊	日本における近世民家（農家）の系 統的發展
1985 第44冊	平城京左京三条二坊六坪発掘調査報 告
1986 第45冊	薬師寺発掘調査報告
1988 第46冊	平城京右京八条一坊十三・十四坪発 掘調査報告書
第47冊	研究論集VIII
1990 第48冊	年輪に歴史を読む—日本における古 年輪学の成立一
第49冊	研究論集IX
第50冊	平城宮跡発掘調査報告書 XIII
1992 第51冊	平城宮跡発掘調査報告書 XIV
第52冊	西隆寺発掘調査報告書
1993 第53冊	平城宮朱雀門の復原的研究

#### 奈良国立文化財研究所史料

年度	名 称
1954 第1冊	南無阿弥陀仏作菩薩（複製）
1955 第2冊	西大寺叡尊伝記集成
1963 第3冊	仁和寺史料 寺誌編1
1964 第4冊	俊乗坊重源史料集成

1966 第5冊	平城宮木簡 1 図版
1967 第6冊	仁和寺史料 寺誌編2
1969 第5冊	平城宮木簡 1 解説（別冊）
1970 第7冊	唐招提寺史料 1
1974 第8冊	平城宮木簡 2 国版・解説
第9冊	日本美術院彫刻等修理記録I
1975 第10冊	日本美術院彫刻等修理記録II
1976 第11冊	日本美術院彫刻等修理記録III
1977 第12冊	藤原宮木簡 1 国版・解説
第13冊	日本美術院彫刻等修理記録IV
1978 第14冊	日本美術院彫刻等修理記録V
第15冊	東大寺文書目録第1巻
1979 第16冊	日本美術院彫刻等修理記録VI
第17冊	平城宮木簡 3 国版・解説
第18冊	藤原宮木簡 2 国版・解説
第19冊	東大寺文書目録第2巻
1980 第20冊	日本美術院彫刻等修理記録VII
第21冊	東大寺文書目録第3巻
1981 第22冊	七大寺巡礼私記
第23冊	東大寺文書目録第4巻
1982 第24冊	東大寺文書目録第5巻
第25冊	平城宮出土墨書き土器集成 I
1983 第26冊	東大寺文書目録第6巻
1984 第27冊	木器集成図録—近畿古代編—
1985 第28冊	平城宮木簡 4 国版・解説
第29冊	興福寺典籍文書目録第1巻
1988 第30冊	山内清男考古資料 1 真福寺貝塚資 料他
第31冊	平城宮出土墨書き土器集成 II
1989 第32冊	山内清男考古資料 2
1991 第33冊	山内清男考古資料 3
第34冊	山内清男考古資料 4
第35冊	山内清男考古資料 5
1992 第36冊	木器集成図録—近畿原始編—
第37冊	梵鐘実測図集成（上）
1993 第38冊	梵鐘実測図集成（下）
第39冊	山内清男考古資料 6

#### 奈良国立文化財研究所基準資料

年度	名 称
1973 第1冊	瓦編 1 解説
1974 第2冊	瓦編 2 解説
1975 第3冊	瓦編 3
1976 第4冊	瓦編 4
第5冊	瓦編 5
1978 第6冊	瓦編 6
1979 第7冊	瓦編 7
1980 第8冊	瓦編 8
1983 第9冊	瓦編 9

#### 飛鳥資料館図録

年度	名 称
1976 第1冊	飛鳥白鳳の在銘金銅仏
第2冊	飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇
1977 第3冊	日本古代の墓誌
1978 第4冊	日本古代の墓誌 銘文篇

	第5冊	古代の誕生仏
1979	第6冊	飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺—
1980	第7冊	日本古代の鶴尾
1981	第8冊	山田寺展
1982	第9冊	高松塚拾年
1983	第10冊	渡来人の寺—檜隈寺と坂田寺—
	第11冊	飛鳥の水時計
	第12冊	小建築の世界—埴輪から瓦塔まで—
1984	第13冊	藤原—半世紀にわたる調査と研究—
1985	第14冊	日本と韓国との塑像
	第15冊	飛鳥寺
1986	第16冊	飛鳥の石造物
1987	第17冊	萬葉乃衣食住
	第18冊	壬申の乱
1988	第19冊	古墳を科学する
	第20冊	聖德太子の世界
1989	第21冊	仏舍利埋納
	第22冊	法隆寺金堂壁画飛天
1990	第23冊	日本書紀を読む
1991	第24冊	飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察
	第25冊	飛鳥の源流
1992	第26冊	飛鳥の工房

#### IV 定員

区分	指定職	行政職(△)	行政職(□)	研究職	計
1994年度	1	22	1	62	86
1995年度	1	22	1	62	86

#### V 予算 (1994年度)

人件費	707,960千円
運営費	1,178,071
事務管理	7,528
一般研究	61,240
特別研究	270,491
発掘調査	549,428
宮跡整備管理	72,871
飛鳥資料館運営	52,388
埋蔵文化財センター運営	73,265
本庁舎維持管理等経費	66,856
飛鳥藤原宮跡発掘調査部運営	24,004
施設費	679,717
平城宮跡等整備費	667,355
各所修繕費	12,362
計	2,565,748

#### VI 施設

##### 土地

奈良国立文化財研究所所管	47,890m <sup>2</sup>
本庁舎	8,860m <sup>2</sup>
飛鳥藤原宮跡発掘調査部	2,515m <sup>2</sup>
飛鳥資料館	17,092m <sup>2</sup>
郡山宿舎(△)	80m <sup>2</sup>
飛鳥資料館宿舎	1,343m <sup>2</sup>
文化庁所管(関係分)	1,438,321m <sup>2</sup>
平城宮跡地区	1,084,071m <sup>2</sup>
藤原宮跡地区	349,209m <sup>2</sup>

飛鳥稻瀬宮殿跡地区 5,041m<sup>2</sup>

建物 34,829m<sup>2</sup>

1. 庁舎 34,391m<sup>2</sup>

区分	本庁舎	平城	藤原	飛鳥	資料館	藤原宮跡	計
事務室	568	176	197	108			1,049
研究・整理室	1,419	2,464	1,205	125			5,213
資料・図書室	1,021		383	131			1,535
会議室	338		129	49			516
講堂		384	210	132			726
展示室		864	254	1,361			2,479
写真室	79	667	149	78			973
復原建物		747					747
遺構展示室		1,563					1,563
車庫	84	608	352	94			1,138
倉庫・収蔵庫	123	7,376	2,041	696			10,236
研修棟	1,416						1,416
その他	1,673	1,979	1,506	1,606	36		6,800
計	6,721	16,828	6,426	4,380	36		34,391

2. 宿舎等 438m<sup>2</sup>

重要文化財旧米谷家住宅 213m<sup>2</sup>

飛鳥資料館宿舎 225m<sup>2</sup>

#### 主要工事

(1) 平城宮跡地等整備費 千円

平城宮跡東院復原平成6年度工事 81,370

平城宮跡東院復原本木加工場仮設工事 25,750

平城宮跡朱雀門復原平成6年度工事 391,400

平城宮跡朱雀門木材保管庫新設工事 24,720

平城宮跡東方官衙地区整備工事 98,159

平城宮跡馬廄地区環境整備工事 96,305

藤原宮跡環境整備平成6年度工事 45,114

(2) その他

(試験研究費、各所修繕費、国有文化財保存整備費)

平城宮跡遺物解析処理棟改修工事 30,900

平城宮跡第3叢蔵庫保存科学室分電盤改修工事 5,253

飛鳥資料館圓障改修工事 5,150

特別史跡山田寺跡整備工事 76,220

#### VI 人事異動 (1994.4.1~1995.3.31)

4月1日 奈良国立文化財研究所長に採用 田中 球

庶務部長に昇任 板垣 義信

庶務部庶務課長補佐に昇任 中田日出男

庶務部庶務課庶務係長に昇任 金野 忠司

庶務部会計課経理係主任に昇任 北川 博之

平城宮跡発掘調査部遺構調査室長に昇任 山岸 常人

埋蔵文化財センター教務室長に昇任 西影 憲二

庶務部会計課施設係に転任 松井 敏夫

建造物研究室長に転任 天田 起雄

埋蔵文化財センター研究指導部保存工学研究室長に転任 加藤 光彦

事務補佐員（庶務部庶務課）に採用	退職
藤原伊奈美	吉田 昌代
研究補佐員（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）に採用	退職
羽島 幸一	伊藤 武
平城宮跡発掘調査部主任研究官に配置換	退職
岩永 省三	村田 和弘
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に配置換	退職
上原 真人	
飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室に配置換	退職
次山 淳	
文化庁記念物課文化財調査官に転任	退職
本中 真	
高知大学人文学部助教授に転任森 公章	退職
京都国立近代美術館庶務課長に転任	退職
白井 国明	
京都大学医学部附属病院総務課長に転任	退職
宮谷 浩	
大阪大学医学部附属病院総務課職員掛長に転任	退職
美濃越 進	
大阪大学医学部附属病院管理課用度第二掛主任に転任	退職
林 正一郎	
名古屋大学施設部設備課管理掛に転任	退職
小園 秀彦	
7月1日 平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任	昇任
玉田 芳英	
平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任	昇任
渡辺 晃宏	
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に昇任	昇任
島田 敏男	
7月16日 庶務部会計課用度係長に昇任	昇任
市原 稔三	
東京近代美術館フィルムセンター主幹補佐に昇任	昇任
小林 雅文	
8月1日 理蔵文化財センター教務室に配置換	配置換
宍戸 雅子	
庶務部会計課に配置換	配置換
港 優子	
理蔵文化財センター研究指導部に配置換	配置換
岩永 恵子	
9月1日 事務補佐員（庶務部庶務課）に採用	採用
西井 千恵	
9月8日 死亡	死亡
天田 起雄	
9月22日 辞職	辞職
西井 千恵	
10月1日 理蔵文化財センター教務室教務係長に昇任	昇任
高畠 孝雄	
建造物研究室主任研究官に転任村田 健一	転任
飛鳥藤原宮跡発掘調査部遺構調査室に配置換	配置換
藤田 盟児	
京都大学木質科学研究所会計掛長に転任	転任
川島 保夫	
10月20日 事務補佐員（庶務部庶務課）に採用	採用
橋谷 香英	
3月31日 辞職	退職
牛川 喜幸	
辞職	退職
大脇 潤	
辞職	退職
山岸 寛人	
退職	退職
松沢 亜生	
退職	退職
木全 敏哉	
退職	退職
藤原伊奈美	

## VIII 組織規定

### 文部省組織令（抜粋）

昭和59年6月28日 政令第227号

#### 第2章 文化庁

##### 第3節 施設等機関

###### （施設等機関）

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国立国語研究所を置く。

2 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

（中略）

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は文部省令で定める。

### 文部省設置法施行規則（抜粋）

昭和28年1月13日 文部省令第2号

#### 第5章 文化庁の施設等機関

##### 第4節 国立文化財研究所

###### 第1款 名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるところとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

##### 第2款 奈良国立文化財研究所

（所長）

第123条 奈良国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

（内部組織）

第124条 奈良国立文化財研究所に、庶務部、建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2 前項に定めるもののほか、奈良国立文化財研究所に、飛鳥資料館及び理蔵文化財センターを置く。

（庶務部の分課及び事務）

第125条 庶務部に、次の二課を置く。

一 庶務課

二 会計課

2 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

一 職員の人事に関する事務を処理すること。

二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

四 この研究所の所掌事務に関し、連絡調整すること

と。

五 この研究所の所掌に係る造物及び遺物の保全のための警備に関する事務。

六 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

3 会計課においては、次の事務をつかさどる。

一 予算に関する事務を処理すること。

二 経費及び収入の決算その他の会計に関する事務を処理すること。

三 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四 庁舎及び設備の維持、管理に関する事務を処理すること。

五 庁内の取締りに関する事務。

第126条 削除

(建造物研究室等の事務)

第127条 建造物研究室においては、建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

2 歴史研究室においては、考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(平城宮跡発掘調査部の六室及び事務)

第128条 平城宮跡発掘調査部に考古第一調査室、考古第二調査室、考古第三調査室、造構調査室、計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2 前項の各室においては、平城宮跡に関し、次項から第6項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。

3 考古第一調査室、考古第二調査室及び考古第三調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4 造構調査室においては、造構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5 計測修景調査室においては、造構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

6 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

(藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務)

第129条 飛鳥藤原宮跡発掘調査部に考古第一調査室、考古第二調査室、造構調査室及び史料調査室を置く。

2 前項の各室においては、藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に関し、次項から第5項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。

3 考古第一調査室及び考古第二調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4 造構調査室においては、造構の保存整理及び調査研究、造構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5 史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果

の公表を行う。

(飛鳥資料館)

第130条 飛鳥資料館においては、飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に關し、国民の理解を深めるため、この地域に関する考古資料、歴史資料その他の資料を収集し、保管して公衆の觀覧に供し、あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行う。

(飛鳥資料館の館長)

第131条 飛鳥資料館に、館長を置く。

2 館長は、館務を掌理する。

(飛鳥資料館の二室及び事務)

第132条 飛鳥資料館に、所務室及び学芸室を置く。

2 廉務室においては、飛鳥資料館の庶務、会計等に関する事務を処理する。

3 学芸室においては、次の事務をつかさどる。

一 飛鳥地域に関する考古資料、歴史資料、建造物、絵画、彫刻、典籍、古文書その他の資料の収集、保管、展示、模写、模造、写真の作成、調査研究及び解説を行うこと。

二 飛鳥地域に関する図書、写真その他の資料の収集、整理、保管、展示、閲覧及び調査研究を行うこと。

三 飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行うこと。

(埋蔵文化財センター)

第133条 埋蔵文化財センターにおいては、次の事務をつかさどる。

一 埋蔵文化財に關し、調査研究及びその結果の公表を行うこと。

二 埋蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して、専門的、技術的な研修を行うこと。

三 埋蔵文化財の調査及び保存整理に關し、地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、専門的、技術的な指導及び助言を行うこと。

四 埋蔵文化財に關する情報資料の作成、収集、整理、保管及び調査研究を行い、並びに地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、その利用に供すること。

(埋蔵文化財センターの長)

第134条 埋蔵文化財センターに長を置く。

2 前項の長は、埋蔵文化財センターの事務を掌理する。

(埋蔵文化財センターの内部組織)

第135条 埋蔵文化財センターに、教務室、研究指導部及び情報資料室を置く。

(教務室の事務)

第136条 教務室においては、研修の実施に関する事務を処理するほか、埋蔵文化財センターの庶務に関する事務をつかさどる。

(研究指導部の六室及び事務)

第137条 研究指導部に、考古計画室、集落史跡研究室、発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室を置く。

2 考古計画研究室においては、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（他の室の所掌に属するもの

を除く。) をつかさどる。

- 3 集落遺跡研究室においては、集落遺跡に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務(発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室の所掌に屬するものを除く。)をつかさどる。

- 4 発掘技術研究室においては、遺跡の発掘技術に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

- 5 遺物処理研究室においては、遺物の処理に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

- 6 測量研究室においては、埋蔵文化財の測量に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

- 7 保存工学研究室においては、遺跡の保存整備に關し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

(情報資料室の事務)

- 第138条 情報資料室においては、第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。

(客員研究員)

- 第139条 奈良国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

- 2 客員研究員は、所長の命を受け、奈良国立文化財研究所において行う調査研究に參画する。

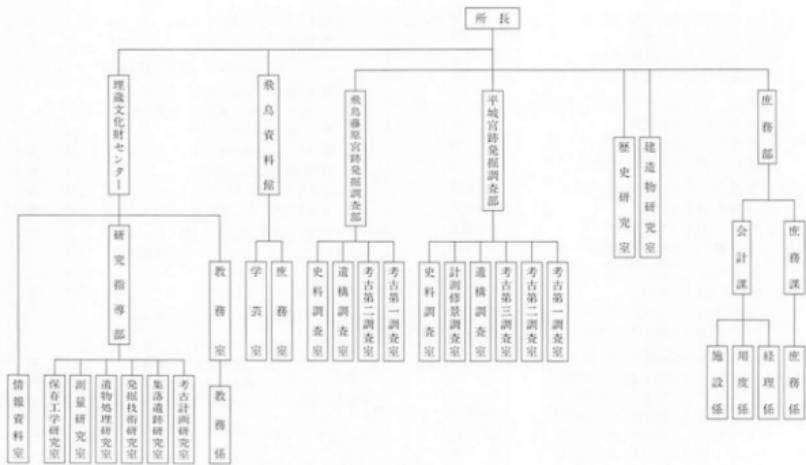
- 3 客員研究員は、非常勤とする。

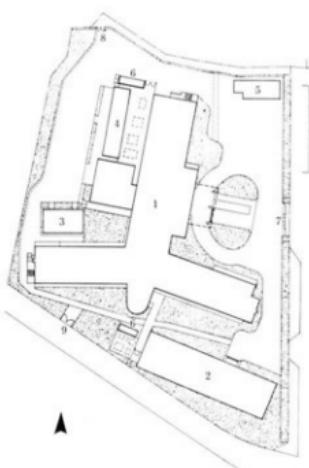
改 正 昭和43年6月15日 文部省令第20号  
 昭和45年4月17日 文部省令第11号  
 昭和48年4月12日 文部省令第6号  
 昭和49年4月11日 文部省令第10号  
 昭和50年4月2日 文部省令第13号  
 昭和51年5月10日 文部省令第16号  
 昭和52年4月18日 文部省令第10号  
 昭和53年4月5日 文部省令第19号  
 昭和53年9月9日 文部省令第33号  
 昭和55年4月5日 文部省令第14号  
 昭和55年6月25日 文部省令第23号  
 昭和58年10月1日 文部省令第25号  
 昭和59年6月30日 文部省令第37号  
 昭和63年4月8日 文部省令第12号

### 職 員 (1995年7月1日現在)

所 属	氏 名	官 職	担 当
	田 中 球	文部技官 所 長	
庶 務	板垣義信	文部事務官 部 長	
	清水 功	文部事務官 課 長	
	田中日出男	文部事務官 課長補佐	平城事務
	西田健三	文部事務官 専門職員	
	金野忠司	文部事務官 庶務係長	
	八木清隆	文部事務官	庶務人事
	大西和子	事務補佐員	庶務
	福本良子	事務補佐員	庶務
	新宮恵子	事務補佐員	庶務
	中風呂恭代	事務補佐員	庶務
課	柳谷香美	事務補佐員	庶務
	本中宣代	事務補佐員	図書資料
	中川かよ子	事務補佐員	図書資料
	中垣聰美	事務補佐員	図書資料
	石川千恵子	研究補佐員	公開
	奥村 功	技能補佐員	保守
	荻原寿都	文部事務官 課 長	
	細谷 優	文部事務官 課長補佐	
	渡邊康史	文部技官 課長補佐	施設
	篠松 保	文部技官 専門職員	施設
会 計	櫻井雅樹	文部事務官 専門職員	施設
	市原稔三	文部事務官 経理係長	施設
	北川博之	文部事務官 経理主任	施設
	港 晃子	事務補佐員	経理
	森本はぎ子	事務補佐員	経理
	小林玉美	事務補佐員	経理
	中鳴昌士	文部事務官 用度係長	経理
	森 昭彦	文部事務官 用度主任	経理
	飯田信男	文部技官 車庫長	自動車運転
	上村敬子	事務補佐員	用度
建 築 物 研究 室	幸田治子	事務補佐員	用度
	篠松 保	文部技官 施設係長(兼任)	施設
	松井敏夫	文部技官 施設主任	施設
	上垣内茂樹	文部技官	施設
	水井和代	事務補佐員	施設
	山口由佳	事務補佐員	施設
	中埜 博	技術補佐員	施設
	木村 勉	文部技官 室 長	建築
	村田健一	文部技官 主任研究官	建築
	浅川滋男	文部技官(併任)	建築
歴 史 研 究 室	小野健吉	文部技官(併任)	遺跡開発
	島田敏男	文部技官(併任)	建築
	藤田豊見	文部技官(併任)	建築
	綿村 宏	文部技官 室 長	歴史
	西口壽生	文部技官(併任)	考古
	橋本義則	文部技官(併任)	古史
	森本 晋	文部技官(併任)	考古
	渡辺晃宏	文部技官(併任)	古史
	白井 駿	文部技官(併任)	考古
	町田 章	文部技官 部 長	古史
平 城 宮 踏査 調 査 部	小林謙一	文部技官 室 長	古史
	白井 駿	文部技官	古史
	加藤真二	文部技官	古史
	毛利光俊彦	文部技官 室 長	古史
	立木 修	文部技官(併任)	古史
	玉田 芳美	文部技官(併任)	古史

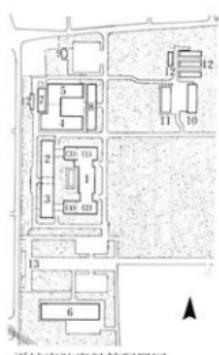






本館配置図

- 1 本館
- 1階 庶務部及び図書資料室
- 2 階 所長室及び平城宮跡発掘調査部
- 3 階 建造物研究室、歴史研究室及び理叢文化財センター
- 2 階 理叢文化財センター研修棟
- 4 機械棟
- 5 車庫
- 6 自転車置場
- 7 正門
- 8 通用門
- 9 駐車13

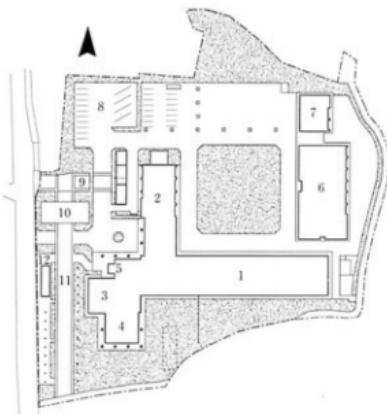


平城宮跡資料館配置図

- 1 平城宮跡資料館
- (1) 展示室 (3) 準備室
- (2) 講堂 (4) 写場
- 2 第1収蔵庫
- 3 第2収蔵庫
- 4 第3収蔵庫
- 5 第4収蔵庫
- 6 第5収蔵庫
- 7 大型遺物処理棟
- 8 遺物解析処理棟
- 9 便所
- 10 整備棟
- 11 資材保管加工棟
- 12 収蔵庫
- 13 佐伯門跡
- 14 宮内省北門・築地復原
- 15 宮内省復原建物(西北殿)
- 16 宮内省復原建物(西南殿)
- 17 宮内省北門・築地復原
- 18 宮内省復原建物(南殿)
- 19 東大講壇
- 20 メモリアル
- 21 田代寺塔心礎
- 22 法輪寺塔心礎



平城宮跡遺構展示館配置図



飛鳥宮跡発掘調査部配置図

- 1 整理研究棟
- 2 展示室
- 3 入口
- 4 保存科学棟
- 5 六条糞跡
- 6 東三坊間跡
- 7 井
- 8 駐車場
- 9 10 建物跡



飛鳥資料館配置図

- 1 第1展示室
- 2 第2展示室
- 3 講堂
- 4 ロビー
- 5 間版室・売店
- 6 会議室
- 7 便所
- 8 光庭
- 9 管理棟
- 10 正門
- 11 売札所
- 12 星外展示解説室
- 13 メモリアル
- 14 機械室
- 15 通用門
- 16 須弥山石
- 17 酒船石
- 18 石人像
- 19 山田寺塔心礎
- 20 猪石
- 21 人頭石
- 22 法輪寺塔心礎

## Table Of Contents

	Page
Frontispiece	
<b>I. International Scholarly Exchanges</b>	
Archaeological Investigations at the Northern Wei Dynasty Yongning	
Buddhist Temple site, Luoyang, Henan, China .....	2
Institute's Curators' Long-Term Research Trips Abroad .....	4
Institute's Curators' Short-Term Research Trips Abroad .....	6
Foreign Scholars Invited and Visited .....	8
Miscellaneous International Research News .....	9
<b>II. Researches and Investigations</b>	
Intra-Institute Advanced Seminars .....	12
Wooden Artifact Discovered in the Nagaoka Capital Site (A. D. 784-794), which Has been Identified as a Japanese Harp .....	15
Eaves Tiles of the Asuka-dera Buddhist Temple Site (Supplement) .....	16
Archaeological and Scientific Investigations into Metal Vessels Owned by the Hōryū-ji Buddhist Temple (Part 2) .....	18
Roof Tiles with Engraved Marks, which Have been Excavated at Kiln Site in Northern Nara and Southern Kyoto Prefectures .....	20
Analysis of Faunal Remains (11) .....	22
Dendrochronology (12) .....	23
Three-dimensional Image of a Silver Inlaid Phoenix Pattern Captured by an X-Ray Computed Tomography .....	24
Catalogs of Buddhist Sutras Owned by the Hōrin-in, Ishiyama-dera Temple, Shiga Prefecture .....	26
Architectural Studies on the Early Modern Buddhist Temples and Shinto Shrines in Okayama City (1) .....	30
Studies for and Prototype-Building of Mechanical Systems that Assist Archaeological Excavations and Mapping .....	32
Photogrammetry and Manual Measurement of a Stone Stupa at the Tō-no-Mori ["Forest of Pagodas"], Nara City .....	36
Plan and Design for a Physical Reconstruction of the Main Hall of Eastern Complex of the Nara Imperial Palace .....	37
Design for a 1: 10 Scale Model of the Early Imperial Audience Hall .....	40
Wooden Tablets with Inscriptions in Ink Discovered in the Nara Imperial Palace and Capital Sites in the Fiscal Year of 1994 .....	42
Special Exhibition in the Division of the Asuka and Fujiwara Palace Site Investigations Display Room, Held in Conjunction to Celebrations for 1300 Anniversary of the Fujiwara Palace .....	44
Special Exhibitions Held at the Asuka Historical Museum .....	45
Preparatory Studies for a Reconstruction of the Early Imperial Audience Hall Compound, Nara Imperial Palace .....	46
Restoration of the Nara Imperial Palace and Fujiwara Palace Sites .....	47
Public Lectures/Miscellaneous Research News .....	50
<b>III. Archaeological Excavations</b>	
Sites in the Asuka Area, Fujiwara Palace and Fujiwara Capital .....	52
Nara Imperial Palace and Nara Capital Sites .....	74
Miscellaneous Activities of the Institute/Organization of the Institute .....	93

ANNUAL BULLETIN  
OF  
THE NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES  
RESEARCH INSTITUTE  
1995

Published by  
Nara National Cultural Properties Research Institute  
Nara, 1996. 3.